
バカと天才と召喚獣

イリーガル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと天才と召喚獣

【Nコード】

N1651U

【作者名】

イリーガル

【あらすじ】

文月学園は、科学と偶然とオカルトが生み出した試験召喚システムという、最先端システムを使用した試験校である。

さらにこの学園は、クラスの振り分け方も他の学校とは違っている。一年は成績に関係なく振り分けられるが、一年の終わりに、振り分け試験と呼ばれるものを行い、二年生は、その成績に応じたクラスに振り分けられる。

振り分け試験で優秀な成績を残した者は最高の設備を、逆に、成績が悪かった者は最低な設備に。

この物語は、寝坊をして振り分け試験を受けそびれた主人公、神長大地と、Fクラスのメンバーたちによるバカコメディである。

これが初投稿となりますが、よろしく願いします。

プロローグ

「待たなんか神長あ！」

「誰が待つかああ！」

俺がこの文月学園に入学して二度目の春。つまり、二年生になる最初の日。そんな日に、俺はある先生と朝から命がけの鬼ごっこをしていた。

「つて！ アンタもいい加減諦めろよ鉄人！」

もう鬼ごっこを始めて10分近く経つ。全力で逃げ回っていたため、俺の体力はもうすぐ底を尽きる。だというのに――

「貴様！ またその名で呼んだな！ 教育的指導だああ！」

「捕まるものかああ！」

相手はまったく速度が落ちない。くそ……！コイツ本当に人間なのか！？

俺を追いかけ回しているのは、西村教諭だ。ちなみに、俺がさっき言った鉄人つてのは、生徒の間での西村教諭のあだ名で、その由来は趣味のトライアスロンからきている。

「つて、これは本当にまずいな……！」

鉄人が俺のかなり近くまできている。

くそつ！このままじゃ教育的指導（全力で殴る）をやられちまう！

なんとかこの状況を打破する方法を考えていると、校門に一人の男子生徒の姿が見えた。あれは――

「おい明久！」

「ん、大地。おはよーうつて、なんでそんな汗だくなの？」

校門に立っている男子生徒は、吉井明久。学年一のバカだ。

「それはあれを見ればわかるだろ！」

「ん、あろつてーげ！ 鉄人！？」

「吉井！ 何度その名で呼ぶなと言えればわかるんだあ！」

「うわあ！ こっちにくるなあ！」

「教育的指導！」

「いいいやああ！」

逃げる間もなく、鉄人に捕まる明久。

ふっ。作戦成功。これで鉄人の怒りは全て明久にー！。

「貴様もだ神長」

いくわけないよな。

「そつだ。意識がなくなるまえにこれを渡しておこつ」

まず、生徒相手に意識が無くなる前にとってのはおかしいと思う。

「これにお前達のクラスが書いてある」

そつ言つて俺と明久に一つずつ封筒を渡す。

まあ、俺は振り分け試験を受けてないようなものだから、Fクラスだかな。

「さて、渡すものも渡したんだ。ー教育的指導だあああ！」

「「ぎややあああ！」」

くプロローグく(後書き)

感想があったらお願いします

第1話 Aクラス戦 開幕

「いてて。鉄人め。手加減しやがれってんだ……」

「まったくだよ。危うく本当に意識を失いかけたよ……」

新校舎の階段を登りながら、明久と愚痴をこぼす。

そして、去年はほとんど来たことのない三階に足を踏み入れると、目の前にバカデカイ教室が目に入った。

「大地。これってさ……」

「ああ。Aクラスだろうな」

「ねえ、ちよつと見ていこうよ」

「それは無理だな」

「え、なんで？」

明久が不思議そうな顔をする。

「今はもうとつくにHRが始まっている時間だからだ」

まあ、まだ始まってないかもしれないがな。

「あ、そっか。ならしかたないね。Aクラスはまた今度見学しよう
つと」

「ああ。そうだな」

俺は行かないがな。

「あ、そう言えば……」

「ん？ どうした明久？」

明久が立ち止まり、懐から一つの封筒を取り出す。そういや、あれにどこのクラスなのか書いてあるんだっけか。

「僕、まだどこのクラスだか確認してなかったよ」

「お前は確認する必要なくFクラスだろ
バカだしな。」

「そんなの見てみなきゃわからないじゃないか！ 僕は大地と違っ

て振り分け試験を受けてるんだから！ それに、振り分け試験は結構できたんだ！」

「ほほう。どのくらい解けたんだ？」

そういうと、明久が少し間をおいて、口を開く。

「十問に一問は解けた」

「早くFクラスに行くぞ」

封筒を開けて明久が落ち込んだ明久と一緒に、俺はFクラスへの道を急いだ。

「さて、入るとするか」

「そ、そうだねは、入ろうか」

隣でなぜか明久が緊張していたが、俺はきにせずFクラスのドアを開ける。

ガララ

「すまん。少し遅れた」

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れウジ虫野郎と大地」

「ねえ大地……」

「すまんすまん。……って、なんでお前が教壇に立ってるんだ？」

彼の名前は坂本雄二。先生ではなく、生徒のはずだ。

「ねえ！僕を無視しないでよ！」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？」

「……………」

「もう無視するのは止めて！」

「すまん。俺が教壇に上がっているのは、このクラスの最高成績者だからな」

「ほう。つまり、お前が代表ってわけか」

「ま、そういうことだ」

コイツが代表か。それはそれで面白くなりそうだ。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に背後から霸気ない声が聞こえてきた。まさかこの人がFクラスの担任なのか？

「はい、わかりました」

「あいよ」

「うーっす」

俺達が席につくと、先生とおぼしき人が自己紹介を始める。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生は薄汚い黒板に名前を書こうとして、止めた。チョークすらろくに用意されていないようだ…

「ここで1年を過ごすのか…」

明久達がいれば退屈はしないだろうが、この設備で過ごすのは少しいやかなりいやだ。そんなことを考えている間に自己紹介が始まったみたいだ。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

この独特の言葉遣いは、秀吉だな、あいつもFクラスだったのか。

「ーというわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

秀吉の自己紹介が終わってしまった。随分と短いものだな。

「……………土屋康太」

これまた聞き覚えのある声だ。

この土屋康太となのつた男子生徒も俺の知人だ。

「ーです。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

この声も聞き覚えがあるな、確か…

「趣味は吉井明久を殴る事です」

「よかつたな明久、島田も同じクラスだぞ」

「え！？島田さんも一緒なの！？僕は毎日ボコボコにされる学園生

活がみえてきたよ……」

明久とそんな話をしていると、

「ハロハロー」

島田がこちらにきずき、笑顔で手を振ってきた。

「……あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

島田の自己紹介がおわり、その後は名前を告げる作業が進む。

「次、僕かな」

「なんだ、もうそこまでできていたのか」

明久が立ち上り、一呼吸置いて喋り出した。

「ーコホン。えーっと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んで

下さいね」

「ーッダアアーリーーン!!」「」「」

野太い声の大合唱。気持ち悪い……

「ー失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願いします」

明久が終わったって事は、次は俺か……

「神長大地だ。一年間よろしくたのむ」

簡単に名前だけ告げて席につく。その後はまた名前を告げるだけの作業続いていたが、不意に教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

第1話 Aクラス戦 開幕（後書き）

ちゅうと半端で終わらせてしまっすいませんくく近い内に続きをかかせていただきます。

感想お待ちしております。

第2話

「あの、遅れて、すいま、せん????????」

「えっ?」「」

誰からというわけでもなく、教室全体から驚いたような声があがる。そりゃあ普通は誰だってびっくりするだろうな。

クラスがにわか騒がしくなる中、担任の福原先生がその姿を認めて話かけた。

「丁度よかったです。自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします。」

「は、はい!あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします????????」

「はい!質問です!」

既に自己紹介を終えた一人の男子生徒が右手を上げる。

「あ、は、はいつ。なんですか?」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く姫路。

「なんでここにいますか?」

この男子生徒は失礼にならないような質問の仕方をしらないようだ。だが、この質問はクラスのほぼ全員が思っている事だろう。

なぜなら、姫路は入学して最初のテストで学年二位を記録し、その後も上位一桁以内に常に名前を残しているほどだった。

そんな彼女が最下層に位置するFクラスにいるわけがない。学年中の誰もが、彼女はAクラスにいますと思っっているだろうな。

「そ、その????????」

緊張した面持ちで姫路が口を開く。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました????????」

たしか途中退席は無得点扱いになるんだったよな。なるほど、だからFクラスにいるのか。

それにしても、俺みたいに寝坊ならともかく、体調不良で無得点扱

いは厳しいな。

まあ、それがこの学園の方針なんだろう。

そんな姫路の言い訳を聞き、クラスの中でもちらほらと言いつ声
が上がる。

「そう言えば、俺も熱の問題がでたせいでFクラスに」

「ああ。科学だろ？あれは難しかったな。」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

さすがはFクラス。予想していた以上にバカばかりだな。

「で、ではっ一年間よろしくお願ひしますっ！」

そんな中、逃げるように俺の後ろの明久と雄二の隣の空いているち
やぶ台に着こうとする姫路。

「き、緊張しました〜????????」

「あのさ、姫ー」

「「姫路」」

明久の声にかぶせるように俺と雄二が声をかける。

「は、はいつ。なんですか？えーっと????????」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「俺は神長大地だ」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

多分雄二が聞こうとしてる事俺と同じだろうから、俺はひいとくか。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

やはり俺が聞こうとした事と同じだったな。

「あ、それは僕も気になる」

明久が姫路の体調の話にくいついてきたか。

まあ、こいつも俺らと同じ事を聞こうとしてたんだろうな。

「よ、吉井君!？」

明久の顔を見て驚く姫路。ああ、なるほど、明久がブサイクすぎる

から驚いたのか。なら謝るべきだな。

「姫路。明久がブサイクですまん」
やはり雄二とは気があうな。

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ?????」

「そろそろ明久を陥れる事を言おうと俺が口を開こうとしたとき、雄二が「俺にやらせろ」と目で告げる。そして。

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺にの知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

ん、確か明久に興味を持っている奴っていうと???????

「え？それは誰」

「そ、それって誰ですか!？」

明久よりも姫路のほうが食いつきがいいなんて意外だったな。

「確か、久保」

「ー利光だったかな」

そう、明久に興味を持っているのは久保利光、そう、男なのだ。
「????????????????」

今度は本当に泣き出した。

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」 雄二

「安心しろ明久、今の雄二の話は半分冗談だから」 俺

「え？残りの半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」 俺

「あ、はい。もうすっかり元気です」

「ねえ大地！残りの半分は!？」

明久が必死に聞いている。

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

「あ、すいませー」 明久

バキィツ バラバラバラ???????

教卓が叩いただけでゴミ屑になるとは。さすがはFクラスの設備だ。

「え〜????????変えを用意してきます。少し待っててください」
「気まずそうにそう告げると、先生は足早に教室から出て行った。」

「あ、あはは????????」 姫路

姫路が苦笑いをする。

俺はトイレに行くため、教室を後にした。

第2話（後書き）

また中途半端で終わってしまいましたすみません<>感想お待ちしてお
ります！

第3話

「Aクラスは冷房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが
ー」

「ー不満はないか？」

「大ありじゃあっ!!」

トイレからもどると、クラスからそんな声が聞こえてきた。

なぜこんな話になったのかは知らないが、とりあえず今入るのはすこしずつ気まずいから廊下で聞くとしようか。

「だろっ？俺だっつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そっだそっだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだっつて同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる
！」

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

まあ、俺もこの設備には少し不満があるし、この話にさらに興味をもてそっだ。

でも、不満があるからと

言っても、設備を変えるのは無理があるしな、雄二が何をやるきなのかわからんな。

「みんなの意見はもっともだ。そこで」

級友たちの反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だがー」

雄二が級友に野生味満点のです八重歯を見せ、

「FクラスはAクラスに「試験召喚戦争」を仕掛けようと思っ
ここに来て、やっと雄二の考えがわかった。」

だが、Aクラスえの宣戦布告。それは俺達Fクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらぬ」

一人を除きそんな悲鳴が教室から聞こえてくる。

それにしても、試験召喚戦争か。ついに俺達もそんなシステムを使えるのか。

科学とオカルトと偶然により完成された「試験召喚システム」これはテストの点数に応じた強さを持つ「召喚獣」を喚びだして戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能となる。ちなみに、この学園のテストは点数に上限がないため、一時間という制限時間と、無制限の問題数が用意されている。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争―試験召喚戦争だ。

その戦争で重要になるのがテストの点数なのだが、AクラスとFクラスの点数は文字通り桁が違う。正面からやりあったとしたら

、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうか。いや、相手次第では四、五人でも負けるかもしれない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせてみせる」

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろう」

「何の根拠があつてそんなことを」

確かに、どう考えたって勝てる勝負だとは思わないだろう。だが、雄二が何の根拠もなしにこんな話をふっかけるとは思えない。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

やはり根拠はあるようだ。

「それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす雄二。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「?????????????!?! (ブンブン)」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。

姫路がスカート裾を押さえて遠ざかると、アイツは顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩きだした???????

第3話（後書き）

またしても中途反発になってしまいました。すみません。感想お待ちしております。

オリキャラ紹介（前書き）

本当は本編を書いたんですが、まちがって消してしまい、1日に同じ内容のものを2個書く気になれなかったので主人公の紹介を書きたいと思います

オリキャラ紹介

名前 神長 大地（かみなが だいち）

身長 178

体重 56

髪色 黒 髪型 後ろ髪を一本に縛っている（ハガ ンみたいに）

好きな事 寝る事

家の位置 明久と同じマンション

家族設定 まだ本編では書いていないんですが、従兄弟がいて、その子が大地の家に住む事になっています。両親は違う家にすんでいます。

趣味 クロスワード ナンプレ

特技 お菓子作り

召喚獣の装備 黒のコート 武器 太刀

腕輪の能力 炎斬 刀身に炎を纏わせ、その刀で相手を焼きつきます。炎を飛ばすこともできる

得意科目 数学 平均450以上

総合点数 3800ぐらい

オリキャラ紹介（後書き）

PCではなくDSIで書いているため、中途半端な終わり方が続くと
思います<>すみません<>
感想お待ちしております。

第4話（前書き）

夜中に目が覚めちゃったんで書きました。
こんなことなら昨日の内に書けばよかったと後悔しています……

第4話

「土屋康太。こいつがあ有名な、ムツツリーニだ」 雄二

「????????????????!!!! (ブンブン)」

土屋康太という名前はあまり有名ではないが、ムツツリーニという名前は別だ。その名前は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以てあげられる。

「ムツツリーニだと?????????」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか?????????」

「だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ?????????」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ?????????」

畳の跡を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。たとえどういった状況であろうとも、自分の下心は隠し続ける。異名は伊達じゃない。

「?????」

姫路は頭に疑問詞を浮かべているようだ。

「後は?????????おい大地いい加減入ってこい」 雄二

「コイツ、最初から気づいてたのか?」

「気づいてたなら最初から呼べよ」 俺

「悪いな、最初に呼ぼうとしたんだが、ムムツツリーニが姫路のスカートを覗いてたから先にこつちを紹介させてもらった」 雄二

「????????????!!!! (ブンブン)」

今更否定のポーズを取っても遅い。

「大地つて、神長大地か?」

「あいつも確かAクラスに普通にはいれる点数取ってたよな?」

「じゃあ、姫路さんと同じで体調が悪かったのか?」

「いや、きつとあいつのことだから寝坊してテストを受けられなかったとかだろ」

凶星だが、最後の奴後で殺す。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」 姫路

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」 雄二

「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだっ」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何もいらない」

さつきから姫路にラブコールを送ってるのは誰だ。

「木下秀吉だっている」 雄二

秀吉か、アイツは学力ではあまり名前を聞かないが、他のことで有名なんだよな。演劇部のホープだとか、双子の姉のこととか。

「おお????????!!」

「ああ。アイツ確か、木下優子の????????」

「当然俺も全力を尽くす」 雄二

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが三人もいるってことだよな！」

士気が上がってきたな。なんか男だらけだからか？妙に暑苦しい。

「それに吉井明久だっている」 雄二
「????????シンナー」

さすがは雄二。オチはやはり明久だ

「たよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」 明久

「誰だよ、吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

「おい明久。お前のせいで士気が下がっちゃまったじゃねえか」 俺

「いや、絶対僕のせいじゃないよね！？雄二も僕を睨まないでよ！」

明久

「そうか。知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは観察処分者だ」 雄二

そう。明久の肩書きは観察処分者である。だが、観察処分者というのは――

「????????それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

そう、バカの代名詞である。

「ち、違うよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

明久

「そうだ。バカの代名詞だ」 雄二

「肯定するな、バカ雄二！」 明久

「あの、それってどういうものなんですか？」 姫路

「具体的には教師の雑用係だな。ちから仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」 雄二

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」 姫路

第5話

「あはは。そんな大したものじゃないんだよ」 明久
明久が否定のポーズをとる。

だが、本当にそんなに大したものじゃなかったりするんだよな。召喚獣は教師が召喚を許可したときのみ召喚が可能になる。そのため、明久は召喚獣を自分のために使うことができない。しかも明久の召喚獣の負担は何割かがフィードバックするらしい。当然痛みもだ。

「おいおい。> 観察処分者くつてことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？」

「だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな」

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」 雄二
「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

明久

「おい雄二明久はいてもいなくても同じ雑魚なんかじゃないぞ」 俺

「大地??????僕をフォローしてくれるんだね」 明久

「明久はいるだけで負けをよびよせる危険性があるほどの雑魚だ」

俺

「そこまで言われると思わなかったよ！バカ大地！」 明久

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずわDクラスを征服してみようと思う」 雄二

ん？なんでDクラスなんだ？弱い所から落とすならEだし、いきなり本丸を落とすならAなんだが。まあ、あいつなりの考えがあるんだろうな。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」 雄二

「当然だー！」

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」 雄二

「おおーっ！！！」

「俺達に必要なのはちやぶ台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」 雄二

「うおおーっ!!」

「お、おー?????」 姫路

クラスの雰囲気には圧されたのか、姫路も小さく拳を作り掲げていた。

「明久にはAクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」 雄二

「???????下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」 明久

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる」 雄二

「本当に？」 明久

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」 雄二

「大丈夫、俺を信じる。俺は友人を騙すような真似はしない」 雄二
確かにあいつは友人には嘘をつかないかもしれない。友人には、な

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」 明久

「ああ、頼んだぞ」 雄二

さて、明久は生きて帰ってこれるかな。

明久が教室から出るのを確認すると、俺は雄二に聞くことがあったのを思い出した。

「雄二、この試召戦争のきっかけは明久なのか？」 俺

「外れてはいないが、少し？」 俺

「ああ、そうだ」 雄二

「なるほどな。だが、お前がそれだけでこんな事をするはずがないと思うんだが」 俺

「ああ、俺にももちろん目的がある」 雄二

「やっぱりな。んで、その目的ってのはなんなんだ？」 俺

「世の中、勉強だけが全てじゃないということをしらしまいたんだ」

雄二

やはり雄二にもこの戦争を始める理由があったか。コイツが簡単に

教えてくれるとは思わなかったが、教えてくれたんだし、俺も協力しよう。

「やっぱお前にも理由があるんだな」 俺

「ああ。俺に理由がなければこんな無謀な勝負は挑まない」 雄二

「そうだな」 俺

「つとそろそろ明久が逃げ帰ってくる頃か」 雄二

「そんなに時間がたっていたのか。んじゃ俺は自分の席に戻るとするか」 俺

「おう。後、お前も点数は高いんだ。期待しているぞ」 雄二

「へいへい」 俺

俺は雄二との会話切り上げ、自分の席についた。

第5話（後書き）

感想お待ちしております

第6話

「騙されたあつ！」 明久

お、生きて帰ってきたか。

「やはりそうきたか」 雄二

使者への暴行はやはり予想していたようだ。

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないかつ！」 明久

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」 雄二

「少しは悪びれるよ！」 明久

そろそろ俺も明久の所に行くか。

「明久、よく死ななかつたな」 俺

「僕は大地の予想では死んでたの！？そんなことを予想するなら止めてよ！」 明久

「悪いな。俺はお前と友人じゃないからな」 俺

「傷ついた！今の一言で僕の心は傷ついた！」 明久

「吉井君、大丈夫ですか？」 姫路

姫路の声に反応する明久。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」 明久

「吉井、本当に大丈夫？」 島田

島田も明久が心配なのか？？？いや、こいつのことだ、次には殴るとかそういう単語が飛び出すだろう。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」 明久

「そう、良かった？？？？。ウチが殴る余地はまだあるんだ？
？？？？」 島田

やはりそうきたか。

「ああっ！もうダメ！死にそう！」 明久

「島田、手加減してやれよ」 俺

「それはフオローしているの！？」 明久

「いや、俺が殴る分を残しとけという意味だ」 俺

「なんで大地まで僕を殴ろうとするのさ！この教室を血で赤く染めるき！？」 明久

「どうせなら黒がいいな」 俺

「そんなに僕を殴るの！？」 明久

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」 雄二

「僕に取っては大切なことなんだけど！」 明久

そんな明久の言葉を無視して雄二は教室の扉を開けて外に出て行った。

「んじゃ、俺も」 俺

俺は雄二の後を追うように廊下に出て、雄二にかけよった。

「なあ、雄二」 俺

「なんだ？」 雄二

「お前は明久のことをどう思ってるんだ？」 俺

「それは、戦力としてか？」 雄二

「ああ」 俺

「役にたたないとはいっているが、少しは期待をしている。アイツはやる時はやるヤツだからな」 雄二

「お前もそう思ってるのか。やっぱアイツはただのバカじゃないのかもな」 俺

そうかもな、と笑うように言う雄二。

そんな話をしてしていると、いつのまにか目的地についた。

「屋上か。ここで待ってるといつのまにか寝てそうだな」 俺

「お前の場合本当にありそうだな」 雄二

俺はそんなに寝てるイメージが強いのか。

しばらくすると、一人の男子生徒が屋上のドアを開けた。

「すまぬ、待たせたかの？」 秀吉

「いや、そんなにまっつてはいない。それにまだ明久たちがきてないしな」 俺

「明久たちならまだ教室かもしれんのか」 秀吉

「さすがにそれはないだろう。というか秀吉、また一段とカワイー
ー男らしくなったな」 俺

いけない。本音がでそうになった。

「おぬし今カワイイといいかけたじゃろう」 秀吉

「そんな事はない。秀吉はとても女らしいさ」 俺

「こんどは完全に女らしいと言い切っておらんか!? わしは男じゃ
ぞ!?!」 秀吉

「ハハハ、冗談だ」 俺

「冗談なら良いのじゃが?????」 秀吉

なんとなく不満げな秀吉。コイツは本当に男かと思う時があるが
つきとした男だ。俺のさっきの発言は本当に冗談だ。勘違いしないで
欲しい。

そんな会話をしながら、明久たちが来るのを待っていると、少しし
て屋上のドアが開かれた。

第6話（後書き）

感想お待ちしています

第7話

「明久。宣戦布告はしてきたな？」 雄二
そう言いながら雄二がフェンスの前の段差に腰を下ろす。御礼と秀吉もその近くに腰を下ろした。

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」 明久
明久たちが各々腰を下ろす。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」 島田
「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ？」

雄二

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」 明久
そっぴや、今日作ってきたワッフルがあったな。それを明久にやるか。

「明久、ワッフルでよかったらやるよ」 俺

「え、いいの？」 明久

「ああ、少し作りすぎたしな。皆もよかったら食ってくれ」 俺

そっぴやって俺はワッフルの入ったバケットを取り出す。

「それじゃ、一つ貰おう」 雄二

「わしもいたたくとするかの」

「?????????一つ貰う」

そっぴやって3人がバケットからワッフルを取り出し、それをほおばる。

「美味しいな」 雄二

「うむ、美味じゃ」

「?????????美味しい」

3人が美味しいといっしてくる。これは嬉しいな。

「でしょ？大地の作るお菓子は美味しいんだ。」 明久

「姫路と島田もどうだ？」 俺

「そっね、一つ頂戴」 島田

「あ、あのつ、私にも一つください」 姫路

「ほいよ」 俺

そういつて俺がワッフルを二人に渡す。

「本当に美味しいわね」 島田

「お、美味しいです」 姫路

ワッフルの出来は上々のようだ。

「でしょ？大地の作るお菓子は美味しいんだ」 明久

「ん？前にも大地の菓子を食ったことがあるのか？」 明久

「うん。大地は僕と同じマンションに住んでるんだ。しかも隣に」

明久

「そういやそうだったな。ということは大地はよく菓子を作るのか

？」 雄二

「ああ。一週間に一回は作るな」 俺

「それを明久に食べさせて感想を？」 雄二

「いや、作り終わるとなぜか明久が呼び鈴を鳴らして入ってきて「
ください」といった感じの目で見てるからついあげてしまうんだ」

俺

「お前はどんだけいやしいんだ」 雄二

「う????????だつて美味しそうな匂いがするからさ、ついつい」

明久

コイツは犬か！

「それより、僕食べていいかな？」 明久

「そういや、最初は明久にあげるつもりだったのに結局皆にあげちま
ったな。確か6個作ったはずだから明久も1個か。」

「ああ、最初からそのつもりだったしな」 俺

「それじゃ????????」 明久

「あ、そういや一つ俺が味見するために食ったような気が????????」

「明久、どうしたのじゃ？」

「ワッフルが一つも残ってないんだ????????」 明久

「やっぱ食ってたか。」

「ごめんな明久。この話は無かったことにしてくれ」 俺

「うう????????久しぶりにまともな物を食べられると思ったのに????????」 明久

「えっ?吉井君ってあまりご飯を食べない人なんですか?」

「いや。一応食べてるよ」 明久

「まともじゃない物をな」 俺

「主に塩と水だな」 雄二

「失礼な!砂糖だつて食べているさ!」 明久

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ??
?????」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

「ここは優しい目で見てやるべきだな。」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」 雄二

「し、仕送りが少ないんだよ!」 明久

「????????あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか?」

第7話（後書き）

眠くて書けませんでした????????すみません<>
感想お待ちしています

第8話（前書き）

すいません<>DSIの制限が来てかなり中途半端になってしまったので後書きに少しかかせていただきます<>

「ーにしたいと思ってました」 明久

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「大丈夫だ秀吉。アイツはもとから変態だから」 俺

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

雄二

俺の想像も超えている。

「だって????????お弁当が????????」 明久

コイツはどれだけ貧乏なんだ。

「さて、話がかかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」 雄二

そっぴやそっぴやだつたな。

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや

?段階を踏んでいくならEクラスじやろうし、勝負にでるならAク

ラスじやろう?」

「俺も気になっていたんだが、ちゃんと考えがあるんだろうな?」

俺

「あたりまえだ」 雄二

「どんな考えなんだ?」 俺

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は

簡単だ。戦うまでもない相手だから」 雄二

「え?でも、僕らよりはクラスが上だよ」 明久

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれな

いな。けど、実際のところは違うオマエの周りにいる面子をよく見

てみる」 雄二

「えーつと????????」 明久

そっぴやつて明久が俺達を見る。

「美少女二人と馬鹿が三人とムツツリが一人いるね」 明久

「誰が美少女だと!」 雄二

「ええっ!?雄二が美少女に反応するの!」 明久

「????????????????(ポツ)」

「ムツツリーニまで!?!どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない

！」 明久

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリー二」

どうでもいいが、俺もバカの部類にはいつてるのかもしれない。

「そ、そうだな」 雄二

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツツコミを入れた
いんだけど」 明久

「俺も同感だ」 俺

「ま、要するにだ」 雄二

コホン、と咳払いをして雄二が説明を再開する。まさか無視される
とは。

「姫路と大地に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには
勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意
味が無いってことだ」 雄二

「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」 明久

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」 雄二

「だったら最初から目標のAクラスに挑もうよ」 明久

確かに俺達の目標はAクラスであり、Dクラスではない。試召戦争
自体が目的の雄二とは求めるものが違う。

「初陣だからな。派手にやっつて今後の景気づけにしたいだろ？それ
に、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

雄二

さつきいいかけたって、明久が姫路のためとかなんとかと雄二に相
談したときの話か。

「あ、あの！」

姫路にしては珍しい大きな声。

「ん？どうした姫路」 雄二

「えつと、その。さつき言いかけた、って????????吉井君と坂
本君は、前から試召戦争について話合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさつき、姫路のためについて明久に相談
されてー」 雄二

「それはそうと！」 明久

なんだ。せつかくいいところだったのに。まあ、俺は雄二にもう聞いているがな。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」 明久

「負けるわけないさ」 雄二

明久の心配を笑い飛ばす雄二

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」 雄二

普通に考えたら無理だ。だが、コイツが言っと、なんとなく勝てるきがしてくる。

第8話（後書き）

「いいか、お前ら。ウチのクラスはー最強だ」 雄二

根拠はないだろう。ただ、それは雄二の本心だろう。なら、俺はアイツを信じて全力を出してやるしかないだろ！

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「ああ、そうしてやるうぜ」 俺

「????????? (グツ)」

「が、頑張りますっ」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」 雄二

感想お待ちしております。

第9話（前書き）

また後書きに続きを書かせていただいています。

第9話

「吉井！木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

廊下からそんな声が聞こえる。

「よし、終わった」 俺

「もういいのですか？後10分ぐらい時間はありますよ？」

「ええ、採点を頼みます」 俺

「わかりました。神長君がいいならそうさせて貰います」

これで化学のテストの点数補充は終わった。

「雄二、俺はこの後どうすればいいんだ？」 俺

「もう終わったのか。んじゃ、明久たちと合流してくれ」 雄二

「おう」 俺

俺は雄二にそう告げて廊下に出る

「目が、目があつ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！アンタは隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよ！」

「????????何をやってるんだ？」 俺

明久たちを見つけた途端に島田が明久に目潰しを入れていた。

「あ、大地。もう補充試験が終わったの？」 明久

「ああ、途中で切り上げたんだが400は超えているから大丈夫だ」
俺

「途中で終わらして400って????????アンタ頭いいのね」

「まあな。それはいいとして、今はどういった状態なんだ？」 俺

「えつとね?????」 明久

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

「つていう状態」 明久

「????????????????」 俺

呆れてものも言えない。さつき逃げようとした明久を叱ったばかりなのにいざとなったら自分から逃げ出そうとするとは。

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

問題ありありだ。

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」 明久

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

「いや、なにもしてないだろ」 俺

明久たちが逃げる準備をしていると本陣に配置されているはずのクラスメイト、たしか、横田がいた。

「どうしたんだ、横田？」 俺

「代表より伝令があります」

「へ逃げたらクロス」

「全員突撃しろっ！」 明久

「さつきまで逃げ出そうとしてたくせに」 俺

「明久、大地、援護に来てくれたんじゃな！」

「ああ、それよりも秀吉、大丈夫なのか？」 俺

「うむ。戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

「そうか、それなら早くテストを受け直さないと」 俺

「そうじゃな。全教科を受けている時間はなさそうじゃが、一、二教科だけでも受けてくるとしよう」

言うや否や、秀吉は教室に向かって走っていた。その後ろに前線部隊に配置されたクラスメイトが続く。出陣した時より人数が少ないのは補習室に連行されたからだろうな。

「吉井、神長、試召戦争のルールは覚えている？その科目の教師が

いないと召喚はできないからね！」

「わかつてる！」 明久

「ああ！」 俺

俺の場合は化学しか補充していないので、化学の教師の立ち会いのもとで戦うしかないな。だが、今回は学年主任の立ち会いだから、総合科目の勝負のはずなんだが、雄二はなんで俺に化学だけ受けさせたんだろうか。

「吉井、神長、見て！」

「ん、なんだ？」 俺

「五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

雄二はDクラスが化学教を引っ張ってくることを知ってたのか？もしくは掛けかもしれないが、まあいい、今は試召戦争に集中するだけだ。

「大地、島田さん、科学に自信は？」 明久

「俺はさっき言った通りだ」 俺

「全くなし。60点台常連よ」

「よし、それなら五十嵐先生と布施先生に近づかないよう注意しながら学年主任のところに行こう。大地は布施先生か五十嵐先生のところに行つて」それよ？」 俺

「そつちこそ！」 明久

俺は明久たちとわかれて、化学のフィールドを探す。

「お前、Fクラスだな！布施先生、こつちに来てください！」

「つと、さつそく出番か」 俺

「試獣召喚！」

Dクラスの生徒が試験召喚獣を呼び出す。

「試獣召喚」 俺

俺もDクラスの生徒にならない、召喚獣を呼び出す。

そして、召喚獣の頭上には参考として、点数が浮かび上がる

「Fクラス 神長大地 429点

VS

Dクラス 菊池進二 102点」

「な、なんでそんなに点数が高いんだ!？」

Dクラスの生徒が驚きの声を上げる。

「加勢する! 試獣召喚!」

「俺も、試獣召喚」

Dクラス生徒が二人加勢に来て3対1となった。しばらくすると、加勢に来たDクラス生徒の点数が表示される

「Fクラス 神長大地 429点

VS

Dクラス 菊池進二 102点

Dクラス 山本雅司 91点

Dクラス 志賀海斗 95点

「いくぞ!」

相手の一人が武器の剣を振りかぶって突っ込んでくる。

第9話（後書き）

ここで使うのはもったいない気もするが、3対1は面倒だな。

「炎斬」 俺

キーワードを口にすると俺の召喚獣が装備している腕輪が輝き、装備している太刀に炎が纏わりついた。この腕輪は、400点以上の点数を取った時のみ装備され、特殊能力を使えるようになる。俺の特殊能力は太刀に炎を纏わせ、それを飛ばすか、そのまま焼き切るといった能力である。

「行け！」 俺

俺の召喚獣が自分（召喚獣）と同じ長さの太刀を横に振る。すると振った瞬間、太刀から炎が飛び出す。

「……なっ!?!」

飛び出した炎は最初に突っ込んできた召喚獣を焼き尽くし、さらに後ろの二人の召喚獣をも焼き尽くした。

「俺の勝ちだな」 俺

「くそ?????! Fクラスにこんな点数の高い奴がいるなんて!」

悔しそうに言うDクラスの生徒。

「0点になった戦死者は補習!」

「……て、鉄人!?!」

「さあこい、補習室でたっぷり指導してやるからな」

「い、嫌だ!」

「あんなの勉強じゃない!」

「そ、そうだ! 拷問だ!」

「拷問? これは立派な教育だぞ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるぞ」

正直、そんな奴はいないと思う。

「……だ、誰か助けっ……???'?」
悲鳴すら聞こえなくなった。

「さてと、他に補習室送りにされたい奴はいないのか？」 俺

「くそっ！調子にのりやがって！覚えてやがれ！」

典型的な悪役の捨て台詞を残してDクララス生徒が逃げていく。

「さてと、一度本陣に戻るとするか。」 俺

俺は戦場を後にし、一度本陣に戻ることにした。

後書き

感想お待ちしております

第10話

「離して！今から吉井を殺しに行くんだから！」

「落ち着け！吉井隊長は仲間だといってるだろ！」

「????????何があつたんだ？」 俺

「おい神長、島田を落ち着かせてくれ！」その前にこうなった理由を教えて欲しい。

「島田、落ち着け、今やるべき大事なことは試召戦争だ」 俺

「でも、アイツは殺さなきゃなんないのよ！」

「アイツは今一応役にたっているから殺されると困る。わかってくれ、島田」 俺

「でも?????????!」

「そのかわり?????????試召戦争が終わったら明久を煮るなり焼くなり殺すなりしていいぞ」 俺

「しかたないわね。今は戦争に集中するわ」

「神長?????????お前鬼だな」

とにかく島田を落ち着かせることは成功した。

「つと、雄二！」 俺

「なんだ？ーって大地か。補充テストか？」 雄二

「いや、点数はそこまで消耗していない」 俺

「そうか。それより、そろそろ面白いものが流れるぞ」 雄二

「面白いものつてー」 俺

ピンポンパンポン >連絡致します<

この声、たしかクラスメイトの?????????須川だったか。これのどこが面白いんだ？

>船越先生、船越先生<

船越先生（45歳 独身）のどこがおもしろいんだ？

>吉井明久君が体育館裏で待っています<

おお、明久を使ってきたか。

>生徒と教師の垣根を超えた、男と女の大事な話があるそうです
「これは明久の身に面白いことがおきそうだな」 俺

「だろ？これで船越先生は体育館裏で明久が来るのをずっと待っているだろう」 雄二

「須川あああああつっ！」

廊下から叫び声が聞こえる。

「んで、なんで戻ってきたんだ？」 雄二

「特に理由はない」 俺

「まあ、一度戦つと点数が表示されるから、お前の点数じゃ4〜5人いつきにかかってきてもおかしくないから、戻ってきて正解だったかもな」 雄二

「まあな、んで、そっちの様子はどうなんだ？後少しなんだが？
????？」 雄二

「時間です」

「よし！採点が終わったら俺に続け！大地、お前は残っていてくれ」

雄二

「わかった」 俺

雄二たちが戦場へと足早に向かった。

「よ、よかった????？」 明久

「やすんでる暇はない。早くテストを受け直せ」 俺

「ねえ大地、校内放送きいてた？」 明久

「あたりまえだ。後でいつてこいよ」 俺

「いかなきゃだめかな？」 明久

「そうだな。いかなないと、授業とかであつたら大変なことになるぞ」
俺

とてもいやそうな顔をする明久。

「そんなことより早くテストを受ける」 俺

「うん、そうするよ????????」 明久
力なく明久がそう答える。

「さてと、俺もテストを受けるか」 俺

「大地も消耗したの？」 明久

「いや、化学はあまり消費していない。ただ他の教科がな」 俺

「そっか。それじゃあテストを受けなきゃね」 明久

結局俺も補充テストを受けることになった。テストって嫌いなんだよな。眠くなるし。

なんとか眠らないで補充テストを終わらせたところで、

「よくやった明久」 雄二

雄二が明久にらしくない言葉をかける。

「校内放送、聞こえてた？」 明久

「ああ。バツチリな」 雄二

明久の不幸をよるこんでるな。

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」 明久

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」 雄二

「やれる、僕なら殺れる??????」 明久

「やるなアホ」 俺

「コイツ、さっき島田から助けて貰ったらたことを忘れてるのか？」

「ちなみに、だが」 雄二

「あの放送を指示したのは俺だ」 雄二

明久の怒りが雄二に向いた。

第10話（後書き）

感想お待ちしております

第11話

「シヤアアアッ！」 明久
なぜ包丁を持っているのだろうか。

「あ、船越先生」 雄二
これは雄二の嘘だ。しかし明久は確認することなく掃除道具入れに飛びこんだ。

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか」 雄二
「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、
頃合いじやろう」

「だな」 俺
「???????????????????? (コクコク)」

「おつしゃ！ Dクラス代表の首を獲りに行くぞ！」 雄二
「「「おうつ！」」」

雄二の掛け声とともに俺たちは教室から出ていく。

「あー、明久」 雄二
雄二が明久になにかを言う。

「船越先生が来たっていうのは嘘だ」 雄二
それを言うと、教室には誰もいなくなつた。
さて、そろそろ決着をつける時だな。

「下校してる連中にうまく溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」 雄二

ん、あれは?????????Dクラスの塚本か。アイツをまず潰すか。
「Dクラス、塚本、覚悟！試獣召喚！」 俺
「くつ、神長か?????????!試獣召喚！」

点数が表示されるより早く、俺の召喚獣が塚本の召喚獣の喉を突き刺し、一瞬で勝負がついた。

「雄二、Dクラス塚本を討ち取ったぞ！」 俺
「よくやった大地！」 雄二

これでDクラスの隊長各は消えた。後は代表の首を??????
「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないよ
うに周囲を見て動け！」

「くそっ！援軍か！」 俺

「Dクラスの本隊だ！ついに動き出したぞ！」
誰かがそう叫ぶ。

「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二の首を獲りに行け！他のメン
バーは囲まれている奴を助けるんだ！」

「……おおー！」「」

「まずい！」 俺

雄二の周りにも本隊がいるが、そう長くはもたない。

「Fクラスは全員一度撤退しろ！人ごみに紛れて攪乱するんだ！」

雄二

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けはない！追い詰めて討ち
取るんだ！」

ここは俺も一度ひいたほうがいいな。というところで、

「Dクラス、山田敦、Fクラス神長大地に数学勝負を申し込む！」

「……同じく！」

「しまった！囲まれたか！」 俺

くそ????????!!もつと早く動くべきだった！

????????だが、数学が対戦科目なら、俺に負けはない！

「……試獣召喚！」「」

「試獣召喚！」 俺

「Fクラス 神長大地 数学 569点

VS

Dクラス 山田敦 数学 98点

Dクラス 赤塚大悟 数学 104点

Dクラス 和田一朗 数学 96点

「……なにっ!?!」「」

「数学は俺の得意教科だ」 俺

「くそ?????!だが、三対一なんだ!こっちが有利なのに変わりはない!」

そのとおり。俺の腕輪の能力を見ていたのか、三人が三方向から俺の召喚獣を狙ってくる。

「だが、あまい!炎斬!」 俺

炎が召喚獣の太刀に纏わりつく。そして、俺はその炎を飛ばすことなく、地面に叩きつけ、炎の壁を作った。

「くそなに!」

「だからあまいっていったんだ!」 俺

こちらに向かつて全力で突撃していた3人の召喚獣は止まることなく炎の壁に激突し、燃えつきた。

「俺の勝ちだな」 俺

「くそ?????!」

「もつと注意するべきだったか」

3人を倒し、あたりを見渡すと、丁度Dクラス代表と明久が見えた。そしてその後ろには???????

「姫路、か」 俺

姫路が代表の後ろにいるってことは、この戦争はほぼ決まったも同然だな。

「く、ごめんなさいっ」

姫路がそういい、代表の召喚獣を下す。

これで、俺たちの勝利が確定した。

第11話（後書き）

少し短くなってしまいましたた<>
感想お待ちしております

第12話(前書き)

また後書きに続きがあります。

第12話

Dクラス代表 平賀源二 討死

「……うおおーっ！」「」

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで置やちやぶ台ともおさらばだな」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛しています！」

最後の奴を除き代表である雄二を褒め称える声がいたるところから聞こえてきた。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつーか」

お、めずらしいな。こいつが照れるなんて。

「坂本！握手してくれ！」

「俺も！」

これまた凄いな。皆雄二を英雄扱いだ。

「雄二！」 明久

「ん？明久か」 雄二

明久の手に包丁が握りこまれてるように見えるのは気のせいだろうか。

「僕も雄二と握手を！」 明久

明久が手を突き出して、

「ぬおおっ！」 明久

ガジッ

手首を抑えられる明久。

「雄二????????!!どうして握手なのに手首を押さえるのかな? ??????!」 明久

「押さえるに?????????決まってるだろうが?????????! フンツ!」 雄二

「ぐあつ!」 明久

明久が雄二に手首を捻りあげられ、握りこんでいた包丁を取り落とす。あ、気のせいじゃなかった。

「????????」 明久

「????????」 雄二

「雄二、皆でなにかをやり遂げるって、素晴らしいね」 明久

「????????」 雄二

「僕、仲間との達成感がこんなに

いいものだなんて、今まで知らな関節が折れるように痛いっ!」

明久

「今、何をしようとした」 雄二

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いっ!」 明久

「おい。誰かペンチを持ってきてくれ!」 雄二

「す、ストップ!僕が悪かった!」 明久

「????????チツ」 雄二

雄二が明久を解放する。

つてか、ペンチをなにもに使う気なんだ?

「?????????ブツブツ????????」 雄二

雄二が何かをつぶやく。

「?????????生爪?????????」

なるほど。爪を剥がすのに使うつもりだったのか。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて?????????信じられん」

背後から誰かの声がする。

振り返ると、そこにはヨタヨタと歩み寄る平賀の姿があった。

「あ、その、さっきはすいません?????????」

違う方向から姫路も駆け寄ってくる。

「いや、誤ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

これも立派な勝負だから、姫路が誤る必要はないな。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

明久が雄二に聞く。

「いや、その必要はない」 雄二

ん、雄二はクラスの設備の交換をするきはないのか。

「え？なんで？」 明久

「Dクラスを奪う気はないからだ」 雄二

「つまり、Aクラスが目的である以上、Dクラスの設備を手に入れても意味がないってことか？」 俺

「まあそんなところだ」 雄二

「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」 明久

「少しは自分で考える。そんなんだから、お前は近所の中学生に「馬鹿なお兄ちゃん」なんて愛称をつけられるんだ」 雄二

「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」 明久

「おっとすまない。近所の小学生だったか」 雄二

「????????人違いです」 明久

「まさか????????本当に言われたことがあるのか?????????」 雄二

さすがにそれはないだろう????????多分。

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」 雄二

「それは俺達にはありがたいが????????。それでいいのか？」

「もちろん、条件がある」 雄二

まあ当然だな。このまま解放したらこの戦争を始めた意味がない。

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら窓の外にあるアレを」

動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が指したのはDクラスの外に設置されているエアコンの室外機。ただ、あれはDクラスのじゃなくて――

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあるとは思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」 雄二

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」 雄二
なるほど。それでBクラスの設備を壊せなんていったのか。

第12話（後書き）

「?????????そうか。ではこちらはありがたくその提案を吞ませ
て貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」

雄二

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」
「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っっているんだろ？」

雄二

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社
交辞令だな」

じゃあ、と手を挙げ、Dクラス代表は去っていった。

「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行
うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散！」

雄二

雄二が号令をかけると、皆雑談を交えながら自分のクラスへと向か
い始めた。帰りの支度をするんだらうな。

「雄二、大地。僕らも帰ろうか」 明久

「そうだな」 雄二

「悪い。俺は今日ちょっと買い物して帰るから一緒には帰れない」
俺

「あ、そうなんだ。じゃあまた今度」 明久

「またな」 雄二

「ああ、んじゃ」 俺

俺は明久と雄二と別れ、教室への道を急いだ。

第13話

「なんで鍵が開いてるんだ？」

俺は買物物を終えて、帰宅したんだが、今朝閉めたはずの家の鍵が開いている。

「泥棒か？」

恐る恐る家のドアを開ける。

「あ、大地君。おかえりなさい」

「人違いです」

「バタン！」

「????????????????」

ドアの向こうには、泥棒より怖い物がいた。

「もお、なんでドアを閉めちゃうかな」

今度は内が側からドアが開けられる。

「悪い。まさかお前がいるとは思わなかったもんでな」

「ま、いいよ。改めて、おかえり、大地君」

コイツの名前は神崎美華。俺の従兄弟だ。

「美華、一つ聞きたいことがあるんだが」

「ん、何？」

ほかにも色々とききたいことはあるんだが、今一番聞きたいのはな。

「なんでお前がここにいるんだ!？」

今はこれが一番重要だ。

「あれ?お母さんから話聞いてないの？」

「お袋から?何も聞いてないぞ？」

「あれ?連絡したって言ったのにな」

そついや、今日は試召戦争があったから、午後から携帯を使ってないから、そんなときにメールでもよこしたのか。

「まあ、面倒だから、このばでお前が説明してくれ」

本人がいるんだから、本人に聞いたほうが早いだろう。

「んーつと、今日からここに住むことになったの」

「????????????? Really?」

「うん。私の両親、海外に出張にいつちゃって、しばらく戻ってこないから」

「だからってなんで俺の家なんだ? お袋の所に行けばよかつたんじゃないか?」

「それが、なんか私達も仕事が忙しいとかで、面倒見れないから大地君の所につて」

あのヤロウ。仕事してねえだろうが。

「まあいい。んじゃ、お前は今日からこの家で暮らすんだな?」

「うん、そうだよ」

そうかそうか、なら俺はー

「新しい家を探さないとな」

「何いつてるのかな大地君。私は大地君と一緒に暮らすんだよ」

「嫌だ! せつかく一人暮らしを満喫してたのに一年でそれが崩れるなんて嫌だ!」

くそ! お袋め?????!!

「まあまあ、落ち着いて」

「もうこの現実を受け止めるしかないのか?????」

「それより早く家に入って荷物の整理手伝ってよ!」

もう荷物も運んでいたのか!

美華に押されて家の中に入る。

つてこの荷物多すぎじゃね?

「美華、お前の両親、いつかえつてくるんだ?」

「んーつとね、確か?????4ー」

4カ月か。それならまだいいか。

「1ー年だったかな」

「嘘だろ!？」

4年!?! こいつの親は4年も海外で何をしてるんだ! そんなに長くいるつもりなら娘も連れてけ!

「はあ????????もう諦めるか」

「あ、それと私明日から文月学園の生徒だから
????????え?

「それ、マジで?」

「うん。もう振り分け試験も終わらせてきたよ」

「なんか、もう驚き疲れたな??????」

もう今日はネ寝たい??????。

「ところで、大地君は何クラスなの?」

「俺はFクラスだ」

「えっ、そうなの?」

驚く美華。

「大地君って頭いいよね?」

「まあ人並みにはできるな」

「あゝあ、せつかく大地君と同じクラスになれると思ったのに」

実は、美華も頭がかなり良い。

「んじゃ、美華はAクラス確定なのか?」

一応聞いてみる。

「うん。とりあえず、試験管だった先生が、これだけ解ければAクラスは確定だろうって言うてたから」

「そうか??????」

美華がAクラス?????か。いずれ戦うことになるのか。

「それよりさ、文月学園のこと聞かせてよっ!」

「それ、話題に上がってないんだが??????」

「いいからいいから!」

それから俺は美華に文月学園の話をして、やることをやり眠りについた。

第14話

「ほら、朝だよ大地君！起きて！」

「ん????????」

「ほら、寝ぼけてないで早くご飯食べよ！」

美華が俺から布団を奪い取る。

「まだ眠い??????」

布団を取られたにもかかわらず、俺はまだ寝ようとする。

「もう！早く????????起きろー！」

ガツ！

「ガハアツ！」

殴られた!?しかもグーで！

「美華！普通殴るならパーだろ！グーでやらなくてもいいじゃねえか！」

「だって、パーじゃ完全に起きないと思って????????」

「だからってグーはないだろ！」

「わかったよ。じゃあパーでもう一度????????」

「もう結構です」

また殴られるなんてごめんだ。

「それより、早く着替えてご飯食べないと遅れちゃうよ！」

「はいはい」

「大地、今日は早いんだ????????な????????」 雄二

登校途中、雄二と会った。しかし、雄二の視線は俺ではなく、隣を歩いている美華にいつていた。

「ああ、全くない」 俺

教室に入るなり命を狙われるような事はしていない。

「そうか。なら教えてやろう。貴様のしたことは、女子と一緒に登校したことだああ！」

????????????????は？

コイツらはんそれだけのことでクラスメイトの命を狙うのかー

「つて！危ねえ！」

またも飛んでくるカッター。今度は横に飛び、それを回避する。

「動くな。狙いにくいだろう」

「動かないとこつちは死ぬんだよ！」

もうこいつらには何をいつても意味がないな。だったら。

「お仕置きが必要だな」

しかたがない。学校で暴れるのは気が引けるが、先生もいないしいだらう。

「てめえら！歯食いしばりやがれえ！」 俺

第14話(後書き)

短かめになってしまってすいません。

第15話

「おはよー！って！なにがあつたの!?」 明久
教室に入ってきた途端に大きな声を出す明久。まあ、この状態を見たら当然の反応だ。

今このクラスの生徒の半分以上が畳の上に倒れているのだから。

「うるさいぞ明久」 俺

「いや、そんなことよりこの状況を説明してよ！」 明久

「大地が女と一緒に登校してきたのを知ったクラスの連中が大地に攻撃した結果だ」 雄二
雄二が俺の変わりに説明する。

「???????え?それって本当?」 明久

「まあ、一応真実だな」 俺

従兄弟つて説明が抜けてたが、さすがにコイツまで襲ってくることはないだろうと考えたその時――

「くたばれ大地いい！」 明久

「うおおおお！」 俺

コイツまでそんなことで襲いかかるのか!

「さて明久!一緒に登校したといつても従兄弟とでな――」 俺

「うるさい!今すぐやつざきにしてやる!’ 明久

コイツ????????!まったく話を聞いてない!

「くそつ????????やるしかないのか」 俺

明久と俺がそれぞれ構えた所で、一人の女生徒が明久に近づき――

「吉井っ!」

「ごぶあつ!」 明久

明久に拳を叩きこんだ。

「し、島田さん、おはよう????????」 明久

「おはようじゃないわよっ!」

とりあえず、もう明久とやりあわなくても良さそうなので、構えを

とく。

というか、また明久は島田になにかしたのか？

「アンタ、昨日はウチを見捨てただえじゃ飽き足らず、消化器のい
たずらと窓を割った件の犯人に仕立てあげたわね?????!」

「明久はそんなことをやったのかよ。
「おかげで彼女にしたいくないランキングが上がっちゃっかじゃない
！」

まだあがる余地があったのか。

「ーと、本来なら掴みかかっているんだけど」

島田が冷静さを取り戻す。

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん。さつきから鼻血が止まらないんだ」

「いや。そうじゃなくてね」

「ん？それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストなんだけど」

島田が心から楽しそうに言う。

たしか一時間目の数学のテストっていうと、監督の先生は?????
???

「監督の先生、船越先生だって」

それを聞いた瞬間、明久は扉を開けて廊下を疾駆した。

第15話(後書き)

また短くなってしまってすみません??????

「それって、今朝一緒に登校してたとか言う女の子のこと？」 明久
ここでそうだななんて言ったら、またこのゾンビみたいな連中を相手
しなきゃいけないんだよな。ここは嘘をついとくか。

「いや、ただの男友達だ」 俺

そういつた途端、クラスから殺気が消える。

「そうか。なら、ソイツも誘って一緒に食うつてのはダメなのか？」

雄二

「別にかまわなー」 俺

しまった！コイツ????????!

「そうか、大丈夫なんだな。じゃあ早く連れてこいよ」 雄二

コイツ！笑ってやがる！やっぱ連れが美華だつてことを予想してた
のか。

ここでダメだなんて言ったらますます怪しまれる可能性もある。

ここはおとなしく美華を連れてくしかないか。

「んじゃ、食堂でまってるからな」 雄二

「????????後で覚えてるよ」 俺

「はて、なんのことだ？」 雄二

そういつて顔に笑みを浮かべる雄二。

コイツ、俺の不幸を楽しんでやがる。

雄二達が学食に行こうとしたとき、

「あ、あの。皆さん??????」

姫路に呼び止められた。

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いう。え、えつと??????、お、お昼なんですけど、そ
の、昨日の約束の??????」

姫路がもしもじしながら俺達の方を見る。

昨日の約束っていうと確か???????

「おお、もしか弁当かの？」

そうだ。弁当だ。昨日はいろいろありすぎてすっかり忘れてた。

「は、はいっ。迷惑じゃなかつたらどうぞっ」

と、身体の後ろに隠していたバッグを出す姫路。

俺は弁当を持ってきてきているんだが、まあ少し貰っておこう。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」 雄二

「そうですか？良かったあ〜」

「むー????????瑞希って、意外と積極的なのね????????」

明久を親の仇のように睨む島田。

「それでわ、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

「そうだね」

「そうか、それならお前らは先に行つててくれ」 雄二

「ん？雄二もどこか行くのか？」 俺

俺は美華を連れてくから今からAクラスにいくんだが、雄二は何をするのだろうか。

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」 雄二
なるほど、雄二は飲み物を買いにいくのか。

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む」 雄二

「おっけー」

「んじゃ、俺も呼びにいつてくるか」 俺

「きちんと俺達の分をとっておけよ」 雄二

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行つてくる」 雄二

そういつて雄二と島田が財布をもって教室を出ていった。

「それじゃ、俺もいつてくるな」 俺

「うん、いつてらっしゃい」

俺は美華を呼ぶため、Aクラスに向かった。

第16話（後書き）

感想を書いていただけるとありがたいです。

第17話

「大地くん。こっちこっち!」

Aクラスの前で美華が俺のことを呼ぶ。

「もう、遅いよ大地君」

「悪い。少し話が長びいてな。後、今日はクラスの連中と食べる」とになったんだが、お前も来るか?」 俺

「いいの?」

「ああ、クラスの連中には話である」 俺

「それじゃ、一緒に食べさせてもらおうかな????????」

なんだか美華が少し寂しそうな顔をしているのは気のせいか?

「それじゃ、屋上で食うみたいだから、行くか」

「うん!」

元気よく返事をする美華。やっぱりさっきのは気のせいだったな。

「そついや、Aクラスはどえだったんだ?」

歩きながら美華に質問をする。

「んーと、皆良い人で友達ももうできたよ」

「そつか、よかったな」

そんな雑談をしながら歩くこと数分、俺達は屋上に出るための階段までできていた。

「お、もうついたか」

「意外と早くついたね」

俺達が階段を登ろうとすると、上から人が降りてきた。

「あら? 神長、と、そつちは????????」

島田か。そついや島田は美華のことしらなかつたな。

「はじめまして。2年Aクラスの神崎美華です」

「あ、2年Fクラスの島田美波です」

そついつて笑顔を見せる島田。

「とうるか島田、どうしたんだ?」

「それがね、虫が死んでたところに手をついちゃって」

「んじゃ手を洗いにいくのか？」

「ま、そゆこと」

そついうと島田は俺達の横を通り水道へと走っていった。

「今のも友達？」

「まあそんなところだ」

俺は屋上の扉を開きながらいう。

扉を開くと、そこには雄二とムツツリーニの死体があった。

??????ん？死体？

「つて！何があつたんだ！？」 俺

「????????うっ、大地か?????まあこつちにこい????

????？」 雄二

なんか、本当に今すぐ死にそうなほどに弱ってる。

「あ、神長君、とちちらは?????」

「あ、はじめまして。神崎美華です」

「はじめまして。姫路瑞希です」

姫路が挨拶するなか、明久と秀吉は雄二に弁当を詰め込んでー

「つて！弁当はーむぐうっ！」

「静かに！姫路さんにはれないうちに雄二に食わせてるんだから！」

明久が俺の口を押さえつける。

「状況がまったく掴めないんだが?????」

姫路と美華は話をしている、こちらの話にはきずかない。

「そつじゃな、とりあえず、姫路の料理を食べるところなるとしか

説明できんのじゃが?????」

そついつて気の毒そつに倒れている雄二に視線を落とす秀吉。

「ちよつとまで。姫路の料理には毒でも入ってるのか？」

入ってないと信じたい。

「毒なんて生優しいものじゃないよ。あの雄二があんなに苦しんでるんだから」

たしかに、あいつなら何を食っても大丈夫そうだが、今回はだらし

なく地面に突っ伏している。

「ってことは、姫路の料理はそんなに危険なのか?????」
俺が食ったらどうなってしまったのだろうか。

「うん」

「とりあえず、このことは姫路には言わないでほしいんじゃないか??」
?????」

「ああ、わかった」

さすがにあの雄二を一瞬でダウンさせるほどの力をもった料理をほ
つとくのは危険だともうがな。

「それより大地よ。隣にいる女子生徒は誰なのじゃ?」

そっぴや秀吉達にはまだ説明してなかったな。

「俺の従兄弟だよ」

「へえ、従兄弟なんだ」

そんな話をしてると、姫路と美華が話終えたようで、こちらに来る。
いままでの会話は聞こえてないよな?????。

「あれ?もう全部食べちゃったんですか?」

空の弁当箱を見て、姫路が聞いてくる。

「うん。雄二が「美味しい美味しい」って凄い勢いでたべちゃった
からね」

食べちゃったじゃなくて、食べさせたんだがな??????

「そうですかー。うれしいですっ」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二」

第18話

「う????????う????????。ありがとうな、姫路?????」
「??」

ヤバイ。目が虚ろだ。

「あ、坂本君?」

ヤバイ! そういや美華には事情を話してなかった!
かくなる上は????????!

「なんか目がーむぐうつ!」

美華の口に俺が持つてきた弁当を押し込む。

「むぐむぐ、ゴクン。ちよつと大地君! いきなりなにをーむぐうつ!」

もう一度押し込む。

今日は俺、昼飯は食えないかもしれない。

「むぐむぐ、ゴクン。だから大地君! 美味しいのはもうわかったからもう押し込まないでよ!」

「そういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店がー」

ここで話題を逸らしにかかる明久。

このことだけは明久に感謝するべきだな。

「ああ、あの店じゃな。確かに評判が良いな」

「え? そんなお店があるんですか?」

「なんか、話題を逸らされた気が??????」

「気のせいだろ」

「それでね、今度今日のお礼に雄二がおごってくれってさ」

「ため、勝手なこと言うなっつての」

明久が話題を逸らしたおかげで、俺の危機は消えさった。

「あ、そうでした」

「ん、どうしたの?」

「実はですねー」

「ごそごそ、と鞆を探る。」

「デザートもあるんです」

「ああっ！姫路さんアレはなんだ!？」

明久がそう言った瞬間に俺は姫路のデザート？を雄二に食わせようとするが、

「やめる大地！次は俺でもきつと死ぬ！」

雄二が命がけで俺達の作戦を止めにかかる。

（大地！俺を殺す気か!？）

（しかたないんだ！こんな毒より危険なもの、お前にしか食えない！だからここはまかせた!）

（馬鹿を言うな！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできないのはできん!）

（ねえ、皆でなんの話しかけてをしてるの?）

一人状況の掴めていない美華が聞いてくる。

（話すとながいんだが?????とりあえず、姫路の料理は毒より危険ってことだ）

（え、そんな風には見えなかったけど??????）

（あそこで倒れてる男がその証拠だ）

そういつて俺はムツツリー二が倒れている方を指さす。

（??????本当に危険なのね??????）

（わかつてくれたか）

後残った問題は誰が姫路の殺人デザート？を食べるかなんだか??????

（??????ワシがいこう）

（なっ!??）

（秀吉!？無茶だよ、死んじゃうよ!）

（俺のことは率先して犠牲にしたよな!??）

（本当にいいのか?秀吉）

（大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう）

「どうかしましたか？」

「あ、いや！なんでもない！」

「あ、もしかして????????」

姫路が顔を曇らせる。

もしかして嫌がってるのがバレたのか？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」

そう言われると、容器に入っているデザートはヨーグルトと果物のミックス？だ。箸で食べるのは難しいだろう。

「取ってきますね」

そういつて階下へと消える姫路。

「でわ、この間に頂いておくとするかの」

「????????すまん。恩に着る」

「ごめん。ありがとう」

「すまんが、よろしくたのむ」

「なんかよくわからないけど、ありがとうね」

「別に死ぬわけではあるまい。そう気にするでない」

「そ、それもそうだね！」

「これぐらいで死ぬような奴じゃないもんな！」

「ああ！秀吉、頼んだぞ！」

「うむ。任せておけ。頂きます」

容器を傾け、一気にかきこむ秀吉。

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴばあっ！」

また一輪、花が散った。命という儂い花が。

「????????雄二」

「????????なんだ？」

「????????さつきは無理矢理食べさせてごめん」

「????????俺からも、すまん」

「????????わかつてもらえたならいい」

自称「鉄の胃袋」は白目で泡を吹いていた。

第19話

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」 雄二

「うん」

激しい昼食を終え、復活した皆でお茶をすする。特に秀吉には大量にお茶を飲ませる。お茶には殺菌成分が含まれているらしいからなちなみに美華は用事があるとかで先に教室に戻っていた。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」 雄二

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

そう、俺達の目標はAクラスだ。Bクラスは通過点に過ぎない。

「正直に言おう」 雄二

雄二が急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てない」 雄二
戦う前から降伏宣言とは雄二らしくもない。

とはいえ、無理もない。文月学園はAからFの六クラスから成るけど、Aクラスは各が違う。五十人のAクラス生徒のうち、四十人はまだいいが、残り十人ほどがやばい。

代表の霧島は当然だが、美華の成績もかなりのものだ。もしかしたら、美華のが霧島よりも上かもしれない。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」 雄二

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」 雄二

「一騎打ち、だと？」 俺

俺も会話に割って入る。

「ああ、そうだ」 雄二

「????????どうやって持ち込むつもりなんだ？」俺

Aクラスはたぶん俺や姫路が出てくることを警戒するだろう。例え
雄二が出るといったとしても素直に聞き入れるかどうか。

「Bクラスを使う」

そういわれ、俺は少し考える。

もし俺の考えがただしいなら、今回の目標がBクラスなのも頷ける。

「大体理解したようだな」雄二

「まあ、な」俺

「ちよつとまって、どういうことなの？」

明久はまだ理解していないようだ。

「??????明久、試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はど
うなるか知っているな？」雄二

「え?も、もちろん!」

わかってないな。

(吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるん
ですよ)

姫路が明久に助け舟を入れる。

「設備のランクを落とされるんだよ」

第19話（後書き）

投稿遅れてすいません<>

しかも短くて中途半端な終わり方ですいません<>

第20話

「???????。まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」 雄二

「そうだね。常識だね」

「では、上位クラスが負けた場合は？」 雄二

「悔しい」

「ムツツリーニ、ペンチ」 雄二

「ややっ。僕を爪切り要らずの身体にする動きがっ」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

姫路がまたフォローに入る。こんなバカをフォローする必要なんてないのにな。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする」 雄二

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」 雄二

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。「Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ」といった具合にな」 雄二

「なるほどねー」

やはり俺の考えであっていた。

だが、この作戦にはいくつか問題がある。

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに」

「それに？」

「そもそも一騎打ちで勝てるかどうかわからない。だろ？」 俺

「そうじゃ。こちらに大地や姫路がいることは知れ渡っていることじゃろう？」

「ま、そうだろうな。んで、本当に大丈夫なのか？」 俺

コイツが勝算なしで戦うわけがない。

そうわかっていても雄二に確認をしてしまった。

この勝負に負けたらうちのクラスは一つ設備を落とされる。

正直ちやぶ台より酷い設備があるのかどうか。

「ああ、もちろん大丈夫だ」 雄二

やはりコイツには考えがあるようだ。その考えがなんなのかまではわからなが、コイツならなんとかしてくれるだろう。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後教えてやる」

雄二

「ま、お前以外抜きでAクラスに勝てるとも思えないし、お前の言う通りにしよう」 俺

「うんうん」

明久が俺のセリフにうなづく。

「そうか、なら明久」 雄二

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い」

雄二

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

さっき言う通りにすると言ったばかりなのにな。

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」 雄二

「ジャンケン？」

この勝負に乗ったらたぶん明久の負けだろう。

「OK。乗った」

なにも考えてないのか、コイツは。

「よし。負けた方が行く、で良いな？」 雄二

明久がコクリとうなずく。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいこう」 雄二
心理戦つていうと、自分がなにを出すか先に言っ
て相手を惑わすやつか。

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

明久はグーを出すらしい。

「そうか。それなら俺はー」 雄二

雄二はどうでるんだろうか。

「お前がグーを出さなかったらブチ殺す」 雄二

?????そうきたか。これは明久の負けだな。

「行くぞ、ジャンケン」 雄二

「わああっ!」

パー(雄二) グー(明久)

「決まりだ。行って来い」 雄二

「絶対に嫌だ!」

「諦めが悪いな」 俺

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配してるのか?」 雄二

「それもある!」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する」 雄二

まっすぐな目で雄二が明久を見る。

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしい」 雄二

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

「でも、お前不細工だしな?????」 雄二

「そうだな?????」 俺

「失礼な!365度どこからどう見ても美少年じゃないか!」

「5度多いぞ」 雄二

「実質5度じゃな」

「確かに微少年だな」 俺

「三人なんて嫌いだっ」

「とにかく、頼んだぞー」 雄二

そんなこんなで昼食はお開きとなり、再びテスト漬けの午後が始まった。

第20話(後書き)

またUP遅れてすみません<>

オリキャラ紹介

名前 神崎 美華 (かんざき みか)

身長 163cm

体重 45キロ

髪色 薄い茶色

髪型 セミロング

好きな事 大地の作るお菓子を食べる事

趣味 天体観測

家 大地と同じ家

家族設定 両親が海外に長期出張のため大地と一緒に住んでいる

召喚獣の装備 白い鎧で武器は一本の白いソード

腕輪の能力 光星 召喚フィールドほぼ全体に流星を落とす。コントロールすることは出来ない。自分が見方と知っている者に当たってもダメージは受けない

得意科目 科学

総合点数 5300ほど

オリキャラ紹介（後書き）

すいません<>

大地の設定書いた時に同じ学園にひとつ下の従兄弟がいるって書い

てありましたが、まちがいです<>

いまさらすいません<>

後で直しておきます<>

第21話(前書き)

DSIが壊れてしまい1ヶ月も投稿できませんでした<>
これからは一定のペースで投稿していきます

あんななの?」

「ああ、そうだ。女子と親しくしようなら死刑。一緒に帰ろうなら拷問後死刑。付き合おうものなら????????」 俺

「ものなら?????????」

「どうなるんだろうな」

俺にもわからない。というかあいつらの理念ってのがわからん。

「まあ、いいけどさ」

あ、いいのかならいいや。

「それより私、お腹すいたなあ」

そういつて俺を見る美華。

これは作ってくれてことなんだろうなあ。

俺も疲れてるからカップメンですましたけど、しかたないかあ。

「はいはい。何が食いたいんだ?」 俺

「んーとね」

材料は結構あるから、大体のものなら作れるな。

「オムライスがいいなあ」

あーお子様思考だなあ。

「なんか、私の悪口考えなかった?」

「んー気のせいじゃないか」

恐るべし女の感。

そんな会話を混ぜながら、作り終えた夕食を食べ終え風呂やら洗濯やらをすませ、俺は明日のために眠りについた。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇にたった雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストで、ついさつき全科目のテストを終えて昼食を取ったところだ。

ちなみに俺は朝、昨日の放課後のことでクラスの連中に襲いかかられたが、須川をコテンパンにしたら皆実力の差がわかったようで、おとなしくなった。

??????視線で未だに攻撃している奴がいるが。

それより、今回俺は初めて全科目を寝ないでこなすことができたから、どのぐらい取れてるか少し気になるな。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か?」

「「「おおーっ!」「」」

一向に下がらないモチベーション。これがFクラス唯一の武器だろうな。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むのが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

「「「おおーっ!」「」」

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらう。野郎共、きつちり死んで来い!」

「が、頑張ります」

男のノリについていけないのか、若干引き気味な姫路が一步前にでる。

「「「うおおーっ!」「」」

??????コイツらのノリには俺もついていけない。

まあ、士気が高くなって悪いわけじゃないがな。

この戦闘は、廊下で勝たないと話にならないから、戦力もFクラス五十人中四十人を注ぎ込んでいる。

その中には、俺や姫路もいるから、まず廊下での戦闘は取れるだろう。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。これでいよいよBクラス戦開始だ。

「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

「『サー、イエツサー！』」

第21話（後書き）

感想を書いていただけると嬉しいです。

第22話

敵を教室に押し込むのが目的のため、勢いが重要だ。

俺達はほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。

「いたぞ、Bクラスだ!」

「高橋先生を連れているぞ!」

正面を見ると向こうからゆっくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる姿があった。人数は十人程度。あくまで様子見といったところか。

??????? 高橋先生は総合科目だったよな、点数確認に丁度いいな。

「明久!総合科目は俺がいくぞ!」

「わかった!」

そう明久に告げた瞬間。

「生かして帰すな!っ!」

物騒な台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

「試獣召喚!」

Bクラス生徒が召喚獣を出したか。

「受けて立つ!試獣召喚!」俺

さあ、どれだけ取れているんだ?????!

「Bクラス 野中長男 1943点

VS

Fクラス 神長大地 5989点

「はあっ!?!」

Bクラス生徒が驚きの声を上げる。正直、俺も驚いている。前の総合科目が4000いかなかったのに、ここまでいけるとはな。この点数だと教師にも匹敵するかなあ。

「お前、本当に人間か?????????」

「大丈夫だ。学校のテストはやる気が出ないからそんなに点数は取

れていない」

「いや、そういう問題じゃないんだが????????」

「なにはともあれ、いくぞ!」

「うわああ!」

さすがにこの点数だと召喚獣の動きが凄い。一瞬で

相手の召喚獣に肉薄し、獲物の太刀で相手を鎧ごと貫く。

その一撃で俺の勝ちが決まった。

「くそ????????!ありえねえ!」

負けた相手がそんなことを呟く。

「くつ????????!神長大地!コイツは本当にヤバイぞ!」

残り9人がそんな事を言う。

「なら、三人がかりだ!試獣召喚!」

「試獣召喚!」

素晴らしいBクラス三人が召喚獣を呼び出した。

「Bクラス 安東大貴 1867点

Bクラス 皆川優輝 2058点

Bクラス 菊池 諒 1989点

VS

Fクラス 神長大地 5989点

「先手必勝!」

相手の一人が正面から突っ込んでくる。おれはそれを右に避け、太刀で攻撃を加えようとすると、さらにもう一人、攻撃の構えを取った瞬間に剣を構え、突きを放つ。

俺は攻撃を諦め攻撃の構えから突きを受け流す構えを取り、どうにか突きを受け流し、相手から距離を取った。

「やっぱり使っしかないか??????」俺

あまり使いたくなかったんだが、もう出し惜しみはしない!

「炎斬!」

その言葉を口にした瞬間、俺の召喚獣が装備していた腕輪が光り、太刀が炎で覆われる。

「特殊能力か?????????!」

俺は召喚獣を大きく上に飛ばし、炎で覆われた太刀を大きく振るわせた。

その瞬間、太刀を覆っていた炎が相手の召喚獣目掛けて飛んでいく。

「うわああ!」

「一体だけはずしたか!

後一体の召喚獣を探す。

「もらったああ!」

「しまった!」 俺

もう一体の召喚獣はおれの召喚獣の着地点で攻撃の構えを取っている。

このままだと直撃する。だが???????

「一撃ぐらい食らってやらああああ!」 俺

こちらも攻撃の構えをとる。

次の瞬間相手の召喚獣の刃が俺の召喚獣の腹に突きを繰り出すも、防刃コートのおかげでそこまで深くはささらなかった。

「浅いか?????!」

相手の召喚獣はまだ動ける状態じゃない。

俺は刃が刺さったまま太刀を振り上げ相手の召喚獣を切り裂いた。

「これで終わり、だ」 俺

一撃貫つて、そこまで痛手というわけでもないが、一度引くか。そう思った時。

「ん?秀吉?」 俺

向こうから美少女ーーじゃなかった、美少年の秀吉がやってきた。

「どうしたんだ秀吉」 俺

「大地よ、一旦教室に戻るのじゃ」

「ん、なにかあったか?」 俺

「Bクラスの代表じゃが??????」

「じゃが?」 俺

「あの根本らしい」

「根本って、根本恭二か？」 俺

「うむ」

根本恭二は評判が悪いらしい。よくわからんが。

「まあ、戻っておくでしょう」 俺

「わしは明久にも伝えねばならんからおぬしは先にいくのじゃ」

「あいよー」 俺

秀吉に言われたとおり、俺は教室へ向かって歩き出した。

第22話（後書き）

感想を書いて頂けると嬉しいです。

第23話

「???????これは」

教室に戻ると、そこには穴だらけになったちやぶ台とヘシ折られたシャープや消しゴムが散らばっていた。

「???????根本の仕業か」

まさかここまでするとは思わなかったな。

というか、なんで雄二達が気づかなかったんだ？

「あれ?どうしたの大地。入らないの?」

「なにかあつたのかのう」

そんなことを考えていると、後ろから明久と秀吉が声をかけてきた。

「ん、まあ、見ればわかるさ」 俺

そういつて教室の惨状を明久達に見せる。

「???????酷いね」

「うむ、まさかこのようなことをするとはのう」

「しかし、なんでこのことに雄二は気づかなかったんだ?」 俺

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた」 雄二

「協定じゃと?」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。つてな」 雄二

「その協定、承諾したのか?」 俺

「そつだ」 雄二

「体力勝負に持ち込んだ方が俺らが有利になるんじゃないのか?」
俺

「姫路以外は、な」 雄二
なるほど、それで協定を承諾したのか。

「雄二、俺は先に戦線にもどるぞ、少しでも有利に進めたほうがいい

いからな」俺

「ああ、たのんだぞ」雄二

「お前ら、大丈夫か？」俺

廊下を走り、俺がいた部隊に戻る。

「神長！やつと帰ってきたか！まだ全滅はしていないが、かなり厳しい状況だ！」

厳しい状況か、なら俺がやるしかないか。

相手は4人か。なんとかなるな。

「一旦下がれ！ここは俺が何とかするから、残った奴は体制を整えるんだ！」

「げっ！？神長が戻ってきた！援軍を頼む！」

くそ！4人ならなんとかできるが、これ以上増えるとさすがにマズい！さつさと片付けるしかないか！

「試獣召喚！」

俺が召喚獣を呼び出し、点数表示がされるよりも早く、俺の召喚獣の正面にいた相手を攻撃しに行く。

「速い！？」

相手が防御の姿勢に入る?????だが、遅い！

俺は残った距離を一気に詰め、そのまま太刀を相手の喉元に刺した。
「嘘たる?????」

一瞬で勝負が決まり、戦死した相手が呆然としている。

そして、すこし遅れて点数が表示される。

「Bクラス 塚田拓哉 0点

Bクラス 長山幹男 1810点

Bクラス 草野光 1894点

Bクラス 安島愛実 2004点

VS

Fクラス 神長大地 5691点

前回の戦闘で腕輪も使ったし、攻撃も食らったから、さすがに点数は減っていた。

「くっ?????!援軍がくるまで持ちこたえるぞ!」

「おお!」

その声を合図に、相手の召喚獣が三方向から来る。俺はそれを後ろに下がらせ、回避させ、そのまよま大きく上に飛ぶ。

「腕輪を使う気だ!奴から離れる!」

「かかった!」

腕輪は使う。だが、今回やろうとしている使い方は少し違う。炎を太刀ではなく、召喚獣の体に纏わせる。これはやったことがない。

だから相手から出来るだけ離れたかったんだよ!

「炎斬!」

最初はやはり太刀に纏わりつく。だが、ここからだ。

「うおおお!」

その太刀の炎を自分に向けて飛ばす。

この能力、俺の予想だが、炎で敵を斬るだけじゃない。これは、俺の思い通りに炎を操れる能力かもしれない。

一度飛ばすとその炎は消える。だが、これは俺が全ての炎を飛ばしているだけで、少しずつ出せば、何度も使えるかもしれない。

つまりー

「俺の能力は無限に使えるかもな」

まあ、威力を弱めれば、だがな。

それより、召喚獣の体に炎を纏わせることができるか、ここが重要だ。

恐る恐る俺の召喚獣を見る。

「まさか、本当に出来るとはな」

俺の召喚獣は、全身に炎を纏っていた。

「なんだよ、あれ????????」

「あいつの能力っあんなだったのか？」

相手が驚きの声をあげる。まあ俺も驚いてるんだがな。

「もう、太刀は必要ないか」

俺は召喚獣に太刀をしまわせ、戦闘態勢に入った。

「さあ、第2ラウンドだ！」

第24話

「何が第2ラウンドだ！こっちが有利なのに変わりにはねえ！」
「素晴らしいまた三方向から相手の召喚獣が攻撃を仕掛けてくる。」

「本当ならここは避けるべきだろう。だが！」

「「「「な?????????!」「」」」」

正面にいた敵に攻撃を仕掛ける。

いつもの状態なら左右からの攻撃を受けて、この点数でもかなりのダメージになる。だが、今の俺には効かないんだ！

「くそつ?????????!」

正面の敵が攻撃を諦め防御の姿勢を取る。

「浅かったか?????????!」

俺の攻撃は戦死させるまではいかず、少し点数をのこらせてしまった。

「「「うおおお！」」」

残った二人の召喚獣が無防備となった俺を左右から攻撃する。だが、ボンツ！

「「「はつ?????????!」「」」」

その攻撃は召喚獣には届かず、炎にあたり、弾かれる。

「なんだよあれ!?!」

「本当に炎なの!?!」

相手が俺の召喚獣から距離をとる。

思った通り、これは鎧みたいな使い方もできるのか。となると?????????

「武器にもできるはず?????????!」

頭の中でイメージをする。今ある炎を最小限に利用し、作れる炎の剣を?????????

俺のイメージが出来たと同時に、召喚獣を覆っている炎の一部が剣

へと姿を変える。

「あんな使い方もありかよ?????!」

「ほとんどチート状態じゃねえか！」

実はそうでもない。使っている間は徐々に点数が減っているし、炎には限りがある。

一回使うとテストを再度行わないと使えないってのはないが、一回の戦闘で一度しか使えない。つまり、一度フィールドの外に出てもう一度召喚しなおさなければ使えない。

「?????さつさとしないとまずいな」

さつき援軍がどうかいつてたし、早く片付けないとな。

「いくぞおお！」

俺は手近にいた相手の召喚獣を炎の剣で切り裂いた。

「速い!？」

これで2対1!

次を仕留めれば1対1。こうなれば残った炎を全部飛ばせばいいだけなんだが?????

「そう上手くいく訳ないよな?????」

「遅くなつた！」

援軍だ。しかも4人も。今の状態で6対1は避けたい。どうすれば?????!

「?????????!」

そうだ!まだ策が消えた訳じゃない!

前の戦闘で使ったあの技を、召喚獣の体ごとやればいい!

「「試獣召喚!」」

これで6対1。だが、俺には最後の策がある!

「いけ！」

俺は召喚獣の体を覆っている炎を少しだけとばす。だが、目的は攻撃にはない!

「「っ!?!」」

そう、相手の召喚獣を閉じこめるための炎だ!

「アイツはなにをするつもりなんだ!？」

「落ち着け!さすがにこのままだとまずいから上にとんでー!」
相手が上を見た時、そこにあつたもの、それは俺の召喚獣だ。

「うおおお!」

俺は召喚獣を覆っている炎を召喚獣の拳に全て集め、相手の召喚獣がいる所に全力でその拳を叩き込む。

「うわああ!」

途端に炎が相手の召喚獣を全て焼き尽くした。

俺の召喚獣は???無傷だ!

自分の炎だから。焼けるわけないか。

「くそ?????!」

「6対1でも勝てないなんて!」

相手が悔しそうにそう呟く。

このあと、アイツらは補習室送りなんだよなあ???????

「神長!」

ん、あれは確か?????須川か。

「どうしたんだ?」 俺

「吉井が戦死した!」

「なに!？」

あのバカが戦死だ?!?アイツは召喚獣の扱いには慣れてるが、やはり点数差が厳しかったか。

「んじゃ、今は補習室にいるのか?????」 俺

「いや、Fクラスに居るぞ」

「?????は?

「さっき戦死したって言わなかったか?」 俺

「すまん、言い方を間違えた。島田に殺られたんだ」

なるほど、それで戦死か、バカだな、アイツも。

「まあ、丁度いい。俺は一度教室に戻る。後は頼む」 俺

「おう!」

須川にそう伝えて、俺はまた教室へと戻った。

第25話

「????????ここはどこ？」

「あ、気が付きましたか？」

「んああ????????つお明久、やっと目を覚ましたか」 俺

俺は教室に戻った後、散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をした明久の手当てを少し手伝い、その後で戦線に戻ろうとした所を雄二に止められ、教室で寝ていた。

「明久よ、いくら試召「戦争」とじゃからといって、本当に怪我する必要はないんじゃないぞ？」

「秀吉の言う通りだ」 俺

「まあ、ちよつと色々あつてね。それで試召戦争はどうなったの？」

「今は協定通り休戦中だ。続きは明日だな」 俺

明久にそう告げる。

「戦況は？」

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もつとも、こちらの被害も少くはないがな」 雄二

雄二がこちらの被害を書いたメモを読み上げる。計画通りつてのは聞いてたが、こちらの被害が大きいな。

「????????????????ん？」

「なあ、雄二」 俺

「なんだ？」 雄二

「一つだけ気になることがあのメモの中にあつた。それは――」

「この部隊だけ、結果がおかしくないか？」 俺

全体的に見て、被害はあまり変わらないように見える。だが、その部隊と戦っていたBクラスは――

「なんで相手の戦死者がないんだ？」 俺

「「「えっ!?!?!」」」

姫路、秀吉、明久も驚きの声を上げる。

「????????相手にもAクラス並みの実力を持っている奴がいたんだ」 雄二

「なに!？」 俺

「バカな????????!そんなのあり得ない!だって????????」

「こつちにはムツツリー二が居たんだぞ!そんな情報を逃す訳が????????????????!？」 俺

自分で言つて、自分で気づく。

もしかしたら、いや、だが、そんなことをやるやつ、いるはずがない!

「?????????そいつは、昨日きた転校生だ」 雄二

「「「え????????????????」」」

「?????????????????そつか」 俺

「?????????ムツツリー二は転校生の情報を掴んでいた。だがその時の奴の点数はギリギリBクラス程度のものだったから知らせなかつたんだが、まさかこんなことになるとはな」 雄二

となると、その転校生は昨日と今日でもう一度テストを受け直してAクラス並みの点数を取つたことになる。

だが、そんな数日で点数が伸びる訳がない。それだと、その転校生は最初からAクラスに入れる実力があつたつてことだ。

「?????????訳がわからない。何でそいつはAクラスじゃなくBクラスなんだ？」 俺

「それがわかつたら苦労はしない」 雄二

「そうだよな?????????そんなの本人に聞かなきゃわからないよな。」

「とりあえず、この話はここで止めておこう。これ以上話ても謎が増えるだけだ」 雄二

「そうだな」 俺

「?????????転校生、か。」

「?????????行くしかない、か」

「あいつが素直に喋るとは思えないけど、聞きたいことが増えたし、いくしかないか。」

「雄二、悪いが先に帰らせてもらっぞ」 俺

「それはいいが、用事でもあるのか？」 雄二

「ああ、まあな」 俺

「そうか。じゃあまた明日な」 雄二

「ああ」 俺

用事といっても、俺が行こうとしているのはこの学校の中にある――
「行くか、学園長室に」

第26話

「つと、美華に一応メール送っておくか」 俺
学園長室の少しまえで美華にメールを送る
もしかしたら、今日も待つてるかもしれないし。

「用事があるから先に帰ってきてくれ、返事はいらなからな」送
信つと」 俺

これで安心して学園長にあえるな。

俺はそのまま学園長室の扉を開けようとしたら、後ろから声をかけられた。

「君つて、もしかして、神長大地君？」

なんか、聞き覚えのある声だな。

「ああ、そうだが？」

後ろを向いて、相手を確認しようとした瞬間――

「やっと会えたー！」

「!!!???」

いきなり抱きつかれた!?! 一体誰なんだこいつは!?!

髪型はセミロング、身長は160前後ぐらいか? 全体的にほっそり
としていて、顔は――

「ああ! お前、一条北斗か!?!」

「そうだよー、大地の愛しの北斗ちゃんだよ」

北斗とは小学生の時から知り合いで、高校は親の都合で遠い所に
いったはずなんだがな?!!??

「なんでお前が文月学園にいるんだ?」

こいつの両親は厳しくて、一人暮らしなんてさせるはずがない。

「????????????? 実はさ、私の親、交通事故で死んじゃ
ったんだよな」

「????????????? え?」

両親が? 死んだ? それじゃあ北斗は今、

「今はね、両親が残してくれたお金で生活してるの。でも、前の学校じゃ学費が高くてね?????それで、こっちに引っ越してきたの」

「でも、それじゃあ、お前の家はどうしたんだ?」

「私、あつちではマンションだったから」

「そうか?????」

まさか、北斗の両親が?????

「でも、大丈夫、だって大地がいるから」

「ー!」

な、なんなんだこいつは!

「こんな重い話された後にこんな話を持ち出すとはな」

「あーごめんね。私の両親の話は忘れて、嘘だから」

?????????は?嘘?

「?????????おいコラ」

「ん、どうしたのかな?」

満面のため笑みだ。こいつ?????!

「一瞬でもお前に同情した俺がバカだったよ!」

はあ?????本当にバカだった。

「まあまあ、いいじゃないの。それよりもさ、なんで大地君はBクラスに居ないの?」

「俺はFクラスだからな」

「えっ!?大地って頭悪かったっけ!」

「いや、振り分け試験の時に寝坊しただけだ」

つつても、寝坊して無かったら、Aクラスだったけどな。

「なんだ!。てっきり大地はBクラスだと思ってBクラスに入ったのにな!」

ん、までよ。Bクラスってことは、雄二が言ってた転校生って北斗のことだったのか。

てか、それよりなるで俺がBクラスにいると思ってたのか気になるな。

「うわあああああああ！」

どういことなんだこれ！？いきなりき、き、キスってどういうこと！？

もしかして北斗は頭がおかしくなったのか！？中学の頃はあんな奴じゃなかったし！？

「いやまで、いったん整理しよう」

昔から付き合いがある幼なじみがいる そいつと久しぶりにあう突然キスされる

????????????????なるほど

「整理できねえええええええ！」

はあ、まず落ち着こう。もうこの事は忘れよう。今俺は学園長に用があるんだ。

心を落ち着かせて。

心が落ち着いた所で学園長室の扉を開けると、満面の笑みで学園長が――

「発情しとるねえ（ニヤニヤ）」

「いっそ殺せ！」

第26話(後書き)

第2のヒロイン登場です。

第27話

このババア！最初から聞いてやがったな！

「こんのクソババアアア！」

もう学園長なんて呼ばねえ！もうこれからはババアでいい！

「まったく、礼儀がなっていないねえ」

「めえのせいだババア！」

まあいいか。こつからはガチだ。

「んでババア、一つ聞きたいんだが」

俺が真剣な顔になると、ババアも真剣な顔になり、俺の話聞く

「なにさね」

「俺の召喚獣の腕輪の能力、あれはどういうことだ？」

「強すぎるってことかね？」

「とぼけるな！」

今日は大声を出すことがおおい。

「あの能力、俺のオヤジが考えていたものだろ？」

俺のオヤジは、試験召喚システムの研究員だった。だが、ある事件をきっかけにオヤジは研究員を辞められた。

「?????????????気づいたかね。そうさ、その通りさね」

「やはりそうか」

しばしの沈黙が続いた後に、ババアが口を開く。

「あんたのオヤジのことは悪かったと思っている。すまなかったさね」

ババアが謝るとは思わなかった。

「いい。別にオヤジが辞めさせられたのはアンタのせいじゃない。

それに、オヤジからきいてんだ。アンタは最後までオヤジを研究所に残そうとしてたってな」

このババアが本当にそんなことをしたかどうか知らないが、オヤジは嘘はつかない。

「はあ????????そんなこといったって、結局残してやることもできはかったがね」

「いいんだ。それより、この腕輪の能力、あんたが完成させたのか?」

オヤジが研究所をさったとき、この能力は完成していなかった。

「そうさね。私が完成させたんだよ。あんたの父親に頼まれてね」

「なに!??」

つてことは、オヤジはもともと俺をこの学園に入れるつもりだったのか!??

「さて、腕輪について喋ることはもうないんだが、他になにかあるのかね?」

まだ一つだけある。さっきの北斗との会話で気になったことが一つ。転校生の一条北斗。アイツの両親は本当に生きているのか?」

嘘だとは言っていたが、とても嘘にはみえなかった。嘘といわれたときは冷静になれなかったからわからなかったが、今になって考えると、あの話が嘘とは思えない。

「????????????????本人には言わないで欲しいっていわれたんだがね」

つてことは????????????????

「交通事故で、死んでしまったそうさね」

やっぱり????????????????

「あのバカ!」

嘘だなんていいやがつて!

まだ帰ってないといいんだがな。

「もう他にはないのかね?」

「ああ!大丈夫だ!」

そういうのとほぼ同時に、俺は廊下に飛び出した。

第27話（後書き）

取り替えしがつかないことに!？
この後の美華の運命やいかにかに!

第28話

「ところで、お前ってどこに住んでるんだ？」

北斗の心が落ち着き、俺は北斗と一緒に帰っていた。

「んーっと、まだ仮契約のマンションなんだけど」

ん、マンション？

「もしかして、後5分ぐらいしたら着く？」

「まあ、そのぐらいだね」

ああ、俺のマンションと同じだ。

「どうしたの大地。私の今住んでるマンションが俺と同じだキャッ
ホイって顔してますよ」

な????????????????

「キャッホイは思ってたねえよ！」

「あ、同じなんだね」

あ、しまった????????????

「それじゃあ今日遊びに行こうかな？」

!?それはまずい! 家には美華がいるし、たぶん変な誤解されるに
決まってる!

「い、いや、さすがに高校生が夜に二人っきりするのはまずいだろ
!だから今日は????????」

「ほうほう。家には女の子がいるわけですか」

「お前は人の心が読めるのか!？」

さつきからなんで俺の心を読んでるんだよ!?

「いやいや、ただ美華って子に聞いたただだよ」

「なんだ。聞いただけか」

心配したぜ。もしかしたら読まれてるかもって思ってた。

「はっはっは」

「ははは」

北斗も笑いだすー

目が笑ってないけど

「ダツシュ！」

ガシィ！

「どこに行くの大地い〜」

怖い！いままで生きてきた流れたで一番怖い！

「いや！これには事情が?????!」

頼む神様！弁明のチャンスを?????!

「大丈夫。事情は聞いてるから」

あ、よかった。でも、俺を掴んでる手がどんどんキツくなってき
がする。

「あのーそれなら離してくれてもいいのでは？」

「まさか大地は、彼女意外性の女の子と一緒に暮らしておきながら、
彼女と一緒に暮らすのは嫌だなんて言わないよね〜」

ま、まさか??????

「美華ちゃんもいよいよっていつてくれたし」

「あの〜まさかと思うけどさ?????」

「そのまさかです 私も大地の家に住んじゃいまーす」

ああ、俺の自由時間は無くなるだろうなあ??????

「んじゃ、荷物を運ばないとな」

「ん、諦めがいいね、さすが大地」

はあ、先が思いやられるなあ??????

「まあ、部屋は空いてるし、生活費も結構貰ってるからいいさ。そ
れに、一人にさせるのもなんだしな」

あ〜自分で言うておきながら、本当に恥ずかしいな。

「え。そ、そう。ありがとノノノ」

ん、ひよつとして??????

北斗って、自分から攻めるのは大丈夫だけど、攻められるのはだめ
なんだな。

よかった。毎日こんなことやられたら身が持たない。

「っと、ようやくついたか」

「まず荷物を取りにいく？それとも大地の家に行く？」

「まあ、荷物とか置いておきたいし、俺の家でいいか？」

「うん。いいよ」

「んじゃ、行くか」

「あ、そうだ」

「ん？どうした」

「クラスつてさ、変えられないのかな？」

「普通は無理だ」

「やっぱそうだよね????????」

「けど????????もしかすると。」

「????????俺が言えばもしかしたら」

「え？」

「ああ、いやさ、実は学園長と知り合いなんだは」

「え！？そうなの!？」

「ああ、だから、もしかしたらもう一度振り分け試験を受けられるかもしれないぞ」

まあ、ババアが素直に聞いてくれたらだけど、な。

「そっか、んじゃさ、もしかしたら、一緒のクラスになれるかもだね」

「ああ、そうだな。一緒のクラスにー！」

ク、ラ、ス？

俺のクラスに北斗が来たらどうなる？そりゃ、俺がクラスメイトからのカッターが飛んでくるに決まってる。

まあ、微妙たる問題か。

「あ、これが大地の家だよな？」

いろいろ話てるうちに、いつのまにかついてきたのか。

「ああ、そうだぞ」

「それじゃ、お邪魔します」

「ただいまー」

「あ、お帰り、大地さんと北斗ちゃん」

第28話（後書き）

美華が引っ越し！？はたして美華の立場は！？

第29話

「?????????それ、引越しする意味あるのか?」
正直、引越しの意味ないと思う。

「ははは。だって、このマンションがいいんだもん」

「いや、そういうことじゃなくて?????」

「大丈夫!たまに遊びに来るから!あ、そろそろいくね」
はっ!?!今日いくのかよ!?

「それじゃーねー」

「ちよっ?????!!」

ボタン

「?????????????あ〜と、飯でも食べる?」

「う、うん?????????」

?????????????気まずい!とても気まずい!さっきまで普通に喋れたのに、今はまったく喋れない!ど、どうすればいいんだ?????!!

「あ、あのさ、大地」

そんな沈黙を打ち破って、北斗が口を開く。

「な、なんだ?」

やばい。なんかただ喋ってるだけなのにすごい緊張する。

「に、荷物取りに、行こ」

そういえば、荷物取りに行つてなかったな。

「んじゃ、飯の前に取ってくるか」

「うん」

なんか、すごいギクシャクする。

どうしよう。このままじゃきまずすぎる。な、なにをすれば?????
?????!

「あのさ、大地」

また北斗から口を開く

第29話（後書き）

なんか、書いてる自分が恥ずかしいw
感想お待ちしております！

「なにさねクソガキ」

「いやな、転校生的一条北斗っているだろ。そいつの振り分け試験をやり直す訳には」

「ダメさね」

まあ、普通そうだよな。

「って普通ならいつてるんだが、あんたには父親のこともあるし、こっちの条件をのむっていうなら、その願い聞いてやるうじやないか」

あれ、意外と聞き分けの言いババアだな。しだが、条件ってなんだ？

「その条件ってのはなんなんだ？」

「簡単さね。あんたの父親が研究していたのはなにさね」

確か、

「腕輪の能力と、召喚者自体がもつー、なんの腕輪だっけ？」

やばい、忘れた。

「はあ、黒金の腕輪さね」

おお、そうだった。

「んで、それがどうしたってんだ？」

「実はね、この黒金の腕輪を完成させて欲しいのさね」

はあ？俺が？

「できるわけねえだろ、そんなこと」

「いいや、できるさね。アンタの頭のよさなら」

いくら頭が良くても、プログラムがわからないんじゃないやどうしようもない。

「まあ、引き受けられないんじゃないや、振り分け試験をもう一度ってのはなしさね」

くそっ！このババア！

????????????????いいじゃねえか！

「やってやるうじやねえか！その黒金の腕輪の作成をよ！」

「そうこなくちゃねえ」

こうして、ババアとの交渉は成功した。

「つと、後10分ぐらいで戦争開始じゃねえか」

結構説明が長かったからな。速くしないとまにあわないーって、

「雄二、それに皆も」 俺

「おお、大地か。速く教室に戻るぞ」 雄二

「ああ」 俺

「というか、今日は大丈夫なの？雄二」

「なにがだ？」

「なんだかAクラス並みの点数の人がいてその人にかなりやられた
っていつてたじゃん」

「そうだな、大地か姫路に潰してもらうしかないだろうな？？？

？？」 雄二

ああ、それなら

「その心配はないぞ」 俺

「ん、なぜだ？」 雄二

「そいつは今日再振り分け試験だからな」 俺

「何！？」 雄二

やはり雄二でも驚くよなあ。

「だが、なぜお前がそれを？」 雄二

んゝまあ、これは言っても大丈夫だろうな。

「俺がババアにいったんだ」あいつにもう一度振り分け試験を受け
させてくれ」ってな」 俺

そいうと雄二が考えこむ。

「まず、お前とその転校生は知り合いなのか？」 雄二

「ああ、そうだ」 俺

「次に、その情報は本当なんだな？」 雄二

「本当だ」 俺

そうすると、またしても雄二が考え込む。

「となると、そいつはAクラス行きか????????」 雄二

んーこれもいつといたほうがいいか。

「いや、あいつはFクラスに来る気だぞ」 俺

「「「なに!?!?!」」」

その場にいた全員が声を上げる。

「何だと!?!? Aクラスの実力があるのにFクラスに来るといつのか

!?!?」 雄二

ここまで驚くとは。とはいえ、ここまでいつちまうと、雄二は感づくだらうな。

「大地。そいつの名前は?」 雄二

「一条北斗だ」 俺

「なるほど、やはりそうか????????」 雄二

あー気づいたかな

「????????????????バレたら即死だぞ?」

他のやつに聞こえないような声で雄二が喋りかける

「大丈夫。殺しかかってきたら、逆に殺すから大丈夫だ、っと、そろそろ開戦じゃないか?」

「ん、そうだな」

俺達はFクラスへと急いで向かった。

第31話

「なあ雄二。俺はまだ戦争にでなくもいいのか？」俺
試召戦争が再開されてから数時間。俺は雄二にまだ出るなといわれ、
教室に残っていた。

「いや、もうそろそろ戦線に出て貰う。最初から出すと、確実に多
対一という状況に持ち込まれるだろうからな。だが、今なら敵も大
分減っているだろうし、そろそろ出て貰う」

そうか。そろそろ出るのか。

だが、俺は今出ないといけない。そんな気がする。

「????????雄二なんか嫌な予感がするから、もう出てもいいか
？」

「ん????まあいいだろう」

「すまん」

俺は、雄二に許可をもらい、戦線へと急いだ。

「明久！戦況はどうなっている！」

しばらく走り、俺はBクラス前まででつき、明久に戦況をきく。

「今の所は順調なんだけど????????」

ん、何か不安要素でもあるのか？

「姫路さんの様子がおかしいんだ????????」

「なに？」

姫路の様子がおかしい？

そういわれ、目で姫路を探す。

「確かに、変だな」

今の姫路は、総司令官にも関わらず、指揮も出してないようだし、何よりも戦争に参加していない。

「ねえ、何かあったのかな？」

「いや、俺にはわからない。だが、姫路をあのままにしておくのはまずいだろうな」

「だよ。僕、もう一度声をかけてみるよ」

もう一度つてことは、さっきも声をかけてたのか。

ん、明久が止まった？

明久は姫路ではなく、違う方向を向いている。その先には、窓際で腕を組み、手に封筒を持った根本がいた。

「まさか?????????????!」

あれは、姫路が明久に書いたラブレターか！それなら姫路が動けなくなつたのもうなずける！

「どこまでも卑怯な?????????????!」

ん、明久？

明久の方をむくと、明久は姫路になにかをつけていた後、姫路に背を向け、駆け出していた。

「おい、明久！」

「何？大地」

走りながらの会話になっている。どうやら明久は今、本気でキレてるようだ。

「????????????????? 姫路を前線から外すように雄二に言うんだよな」

もちろんと頷く明久

「止めないでよ」

止める？バカを言え。

「止めるんだつたら最初から止めてたさ」

「じゃあ????????」

「ああ、俺はお前に協力する」

「ありがとう、大地」

「雄二っ!」

明久とはもる。いつもならこのばでふざけるが、今はそれどころじゃない。

「うん? どうした明久に大地。脱走か? チョキでしばくぞ」

明久と教室に飛び込むと、雄二はノートに何かを書き込んでいるところだった。ちかづいてみると、それはウチの現在の戦力を記したものだ。

「話があるんだ」

「????????とりあえず、聞こうか」

今はふざけている場合ではない。雄二もそれを察して、真面目な顔で明久の顔を向く。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「????????お前になにがあつたんだ?」

まったくだ。まあ、目的は制服じゃなくて、ラブレターの方だろうか。

「ああ、いや、その。えーっ????????」

さすがに、制服に入ってるラブレターが目的とは言えないようだ。

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやるっ」

受け入れた!?

「で、それだけか?」

呆れたように明久を見る雄二。

つと、こっからが本題だな。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「理由は?」

「理由は言えない」

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても」

雄二が顎に手を当てて考えこむ。

もしそれで戦争に負けたら、雄二が責められることになるだろう。

だがー

「頼む、雄二！」

「俺からも頼む」

明久と一緒に頭を下げる。

正直、俺達の頼みで雄二が得るものはない。それに対して、リスクだけは満載なんだ。雄二がこの頼みを受けなくても、反論は出来ない。

「????????条件がある」

「条件？」

「姫路と大地が担う予定だった役を、お前ら二人でやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる」

雄二が俺達の無理な頼みを聞いてくれた。

しかし、俺と姫路がやるはずだった役割を明久と????????か。

だが、やれないことはない。いや、

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「ああ！やってやろうじゃねえか！」

「良い返事だ」

ふつと口の端を上げる雄二

「それで、僕達はなにをしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラスの教室の出入り口は今の状態のままだ」

「?????????難しいことを言ってくれね」

第32話

この役割、俺と姫路でも厳しいというのに、それを明久とやれってんだから、かなり難しい。だが、やるしかないんだ。

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させる」

いつになく強い口調。どうやら失敗したら敗北に繋がるんだろうな。どうやって目的を達成する???????

「それじゃ、うまくやれよ」

考えこむ俺達を置いて、雄二が教室を出ようと立ち上がる。

「え?どこかいくの?」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

Dクラスというと、室外機の件だろうな。

「明久」

教室を出る直前、雄二はこちらを振り向かずにごう言った。

「確かに点数は低いが、秀吉やムツリー二のように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「????????雄二」

「うまくやれ。計画に変更はない」

そう言い残し、雄二は教室を後にした。

「僕の秀でている部分????????????????」

まだわかってないのか。しかたないな

「あるだろ。お前の召喚獣しかできないことが」

「僕の召喚獣にしかできないこと?」

もちろん、細かい動きとかそういうものではない。明久の召喚獣にしかできないこと、それは――

「物理干渉能力!」

「正解だ」

ふっと口の端が雄二のように上がる俺。

英語か。丁度い。

「明久！」

明久は話についていけず、呆然としていた。

「え！？な、なに？」

「人数は3人で行く！俺とお前と北斗。この三人でだ！」

時間はまだ少しあるが、急いだほうがいいだろう。

「それはいいんだけどさ、大地」

「ん？なんだ？」

「「その女の子のこと、後でたっぷりと聞かせて貰うからな！」」

「

????????????????今日の予報。試召戦争後カッターの嵐。

「さてと、ここからはガチだ明久」

さすがにここからさきはふざけられない。

「ああ、わかつてる」

俺と明久がすること、それは――

「召喚獣で勝負、だ」

これが、俺達の作戦だ。

第33話

「二人とも、本当にやるんですか？」

Dクラスに召喚獣勝負の立会人として呼ばれた遠藤先生が俺達に念を押し。

「はい。もちろんです」

「このバカは一度叩き潰さないとイケませんからね」

向かい合うのは俺と明久。

「でも、それならDクラスでやらなくても良いんじゃないですか？」

「仕方ないんですよ。コイツは>観察処分者<ですから。オンボロのFクラスで召喚したら、召喚獣の戦いの勢いで教室が崩れるかもしれないんで」

「もう一度考え直しては」

「いえ。やります。彼には日頃の礼をしないと気が済みません」

再三に渡って考え直すよう説得してくる遠藤先生に、明久が有無を言わせぬ口調で言い切る。

「ーわかりました。お互いを知る為に喧嘩をするというのも、教育としては重要かもしれませんがね」

大きく息をついてそう告げると、遠藤先生は俺達から少しだけ距離を取った。

「北斗。お前も下がってけ」

「うん。わかってる」

今この場にいるのは遠藤先生と俺と明久と北斗の4人。

北斗は勝負を見届けるってことになってるが、本当の目的は違う。

「試獣召喚っ！」

明久が召喚獣を出す。さて、俺も召喚獣を出さないとな。

「試獣召喚っ！」

俺の召喚とほぼ同時に俺の召喚獣目がけて駆けてくる明久の召喚獣。俺はそれをギリギリまで引きつけ、当たる直前で召喚獣を横に飛ば

せる。

壁を背にしていた俺の召喚獣がいなくなったことで、明久の召喚獣の拳は、壁にぶち当たる。

ドンッ！

「ぐーうっ！」

壁を殴り付けた召喚獣の痛みが明久にフィードバックする。

「ーんのおっ！」

またもや殴りかかってくる明久の召喚獣。

その攻撃も横に飛び、かわす。またもや明久の召喚獣の拳は壁を打つていた。

「つう?????つ！」

明久の顔が歪む。だが、心配なんかしてられない。これは、アイツが望んだことなんだから。

ふと時計をみると

現在時刻は午後二時五十七分。作戦開始まで後3分。

「明久、時間がないぞ」

先生には聞こえず、明久には聞こえる大きさでそう告げる。

「お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

遠くからBクラス代表の根本の声が聞こえてきた。

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

対するは聞き慣れた雄二の声。姫路が戦闘に参加できない分、雄二率いる本隊まで出動せざるを得なくなっただか。

「らあっ！」

明久の大振りの攻撃を避ける。

またしても明久の攻撃は壁へとぶち当たる。

「はア？ギブアップするのはそつちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

「そういうお前達も、昨日の転校生はどうした？姿すら見てないんだが？」

「けっ！どつちみちアイツなんかいなくても勝てたんだよ！」

「どうだかなあ」

「口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

「負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな」

「はああっ！」

四度目の攻撃。

この攻撃も壁に当たる。

「????????さつきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやってるのか？」

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「けっ。言ってる。どうせもくすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

「????????態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

「明久、そろそろだぞ」

「うん。わかってるよ」

北斗にも目配せをする。

北斗は黙ってうなづく。

「吉井君、神長君。二人とも何をしようとしているのですか？」

状況のわからない遠藤先生が俺達を交互にみる。

先生に怪しまれて召喚獣を戻される前に決着をつけられるかは明久しだいだ。

「おおおおおっ！」

これで失敗したら、この戦争の敗北に繋がる。アイツの拳に、俺達の運命がかかっている。

「あとは任せたぞ、明久、大地」

敵の本隊を引き付けた雄二が壁の向こうからよく通る声でそう告げた。

午後三時ジャスト。作戦開始だ。

「ぶちかませ、明久」

「だああーっしやあーっ！」

明久が渾身の一撃を壁にぶち当たてる。

ハナから目的はこのBクラスにつながる壁だ。俺と明久の勝負は壁を破壊させる召喚獣を呼び出すための方便に過ぎない。

「ーっぐううっ！」

全力で壁を5回も殴った明久の手は、血だらけだ。

だが、こんなことをできるのはお前しかない！

ドゴオッ

豪快な音をたて、Bクラスにつながる道が生まれた。

第33話（後書き）

とても中途半端になってしまいました。すみません。<>

第34話

「ンなっ!?!」

崩れた壁の向こうにある、驚いて引きつった根本の顔。

向こうの戦力はほとんど雄二達を追って教室から出ている。

今を逃したら勝利はない!

「くたばれ、根本恭二いーっ」

俺達三人は呆気に取られている根本に勝負を挑むために駆け寄った。

「おいまで!なんで一条がFクラスにいるんだ!?!」

「さあね!それよりも!Fクラス神長がー」

「Bクラス山本が受けます!試獣召喚!」

「くそっ衛部隊か!」

まだ教室に残っていた根本の近衛部隊がその行く手をふさぐ。

くそ!根本とは距離が開きすぎている!

「取り囲め!三人だが、二人の点数が以上に高い!用心しろよ!」

誰かがそんな事をいつてくれたおかげで、

俺達は教室にいた近衛部隊全員に囲まれた。

「は、ははっ!踊ろかせやがって!残念だったな!お前らの奇襲は

失敗だ!」

取り繕うように俺らを笑う根本。

確かに奇襲は失敗した。しかも、この状況は俺と北斗でも抜け出せるかどうかわからない。まさに絶体絶命だ。だが、目標は達成した。

ここで、急に話を変えて教科の説明をしよう。

各教科にはそれぞれ担当教師がいて、その先生によってテスト結果にも特徴が現れる。

例えば、数学の木内先生は採点が早い。

例えば、世界史の田中先生は点数の付け方が甘い。

例えば、今一緒にいる英語の遠藤先生は、多少のことには寛容で見

逃してくれる。

では、保健体育は？

保健体育は採点が早いわけでも、甘いわけでも、召喚可能フィールドが広い訳でもない。

保険体育の特性。それは、教科担当が体育教師であるがためのー

ダン、ダンッ！

出入り口を人で埋め尽くされ、四月とは思えないほどの熱気がこもった教室。そこに突如現れた生徒と教師。二人の着地音が響き渡る。エアコンが停止したので、涼を求める為に開け放たれた窓。

そこから屋上よりロープを使って二人の人影が飛び込み、根本の前に降りたつた。

そう、保険体育の特性は、担当教師が体育教師であるが為のー並外れた行動力。

「????????Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ?????!」 「????????Bクラス根本恭二に

保険体育勝負を申し込む」

「ムツツリイニイーツ」

「ー 試獣召喚」

「Fクラス 土屋康太 保険体育 441点

VS

Bクラス 根本恭二 保険体育 203点」

ムツツリイニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

第35話

「やったね！大地！」

終戦後、北斗が俺の側にきて、そんな事を言った。

「ああ、そうなんだが、いいのか？お前元Bクラスだろ」

北斗は一度（3日ぐらい）とはいえBクラスとして生活していた。

「んー、だって、ほとんどクラスの子と喋ってなかったしね。テストとか忙しかったから」

「肩入れはないってことか」

「ま、そういうこと」

そんな会話をしていた時。ふと気づく。

なんてでFクラスの奴らが攻撃をしてこない？

いつもならこの時点でカツターの二つや二つ飛んできているのに。

もしかして、俺のことはもう諦めてー

「????????いるわけがない」

?????????????????ですよね。

「まさかムツツリー二。お前まで敵に回るといつのか？」

正直、俺も友達を殴るのは気が引ける。（クラスメイトと明久と雄

二を除く）

「????????取引」

取引？なにと取引しようっていうんだ？

取り合えず、北斗には聞かれないほうがいいか。

「北斗。あつちでそろそろ戦後対談があるから、俺の代わりに聞いてきてくれ」

「?いいけど、大地は行かないの?」

「ああ、俺はコイツと少し話があるから」

そういつてムツツリー二の肩に手を置く。

「そう。わかった。じゃあなるべく早くすませてね」

そういつて、北斗は皆が集まっているほうに早足で向かった。

「んでムツリーニ、取引ってなんだ？」

内容によつては呑んでもいいんだが、と付け加える。

「????????お前が一条と一緒に住んでいるのは既に知っている」
土屋康太、恐るべし。

「えーつとだな、理由を言つと長くなるんだが????????」

流石に全部喋る訳にはいれないが、少しぐらいなら。

「????????事情は知っている」
「????????は？」

なんでコイツが事情を知ってるんだ？

ムツリーニは今日北斗と会つたばかりのはずー！

ここで、ムツリーニの特技を思い出す。

「盗聴か??????」

「????????少し違つ」

ん？少し違つつてどついうことだ？

「????????学園長室の前に仕掛けてあつた盗聴機に偶然そのこ
とが入つていた」

「それが盗聴つていうんだ！」

そついやこいつもバカだった。

「んで、だいぶ話がそれだが、取引つてなんなんだ？」

それた話を元に戻し、取引の内容を聞く。

「????????一条の私生活の写真を撮ってくれ」

「????????は？」

北斗の私生活の写真を俺が撮る？そんなことしたらきつと?????
???

1、写真を撮らせてと願う。

2、写真を撮らせてもらう。

3、俺が北斗の言つたことを聞くことになる。

4、死亡フラグまっしぐら。

「????????その写真と引き換えに、俺はFFF団の大地への罰
を取りやめるようにしよう」

????????どうする。ここはムツツリー二の取引に応じるべきが？
北斗には物でつりやすいし、何かあげればなんとかなるかもしれないし、それほど悪い条件でもない。

「わかった。その取引にのらせて貰う」

「????????交渉成立」

そういつてムツツリー二が俺にカメラを手渡す。

てか、常に持つてるんだな。

「んじゃムツツリー二、頼んだぞ」

「????????写真、忘れるな」

そういつてムツツリー二は雄二達の所に向かう。

「つと、俺もそろそろ行くか。」

だが、俺が行くのは雄二達の所じゃない。

俺が行くのは学園長室だ。

この前言つてた黒金の腕輪、あれを受け取りに行く。

このまえいろいろあって受け取りそこねたからなあ。

さてと、出来るだけ気づかれないようにいくか。ババアには黒金の

腕輪のことは誰にも言うなっていわれてるし。

俺は誰にも気づかれぬよう、注意しながら教室を出る。

「あれ、大地？どこにいくんだろ」

第36話

「入るぞ、ババア」

学園長室の扉を開けると、見慣れたババアの顔があった。

「????????あまり見慣れたくないんだがな。

「????????あんたは礼儀というものをしらないのかい？」

「あんたを敬う必要がないからな」

そういつとババアは「可愛くないガキだねえ」と呟く。

正直、ババアに可愛いといわれたら、嘔吐が止まらないだろう。

「んで、黒金の腕輪はどこなんだ」

これ以上このババアに時間を潰されるのは釈なので、本題に入る。

「そうだね。アンタに時間を潰されるのも釈だしね」

それはこっちの台詞だ。

「んじゃ、よろしく頼むさね」

そういつとババアは机から一つの箱と教科書ほどの説明書のようなものを取り出す。

「この箱の中に黒金の腕輪が入ってるのか？」

「そうさね。だけど、それは今のままじゃただの飾りに過ぎないさね。それをアンタが完成させるんだよ。こっちのマニュアルに書いてある通りにやってくればよっぽどの事がない限り失敗はしないだろうね。後は出来たらここに持ってきてくれればいいさね」

そういつとババアは黒金の腕輪の入った箱とマニュアルを俺の前に置く。

「いつまでに完成させればいいんだ？」

そういつと俺は机の上に置いてある箱とマニュアルを手取る。

「特に期限は無いさね。ただ、できれば夏休み前には完成させてもらいたいね」

夏まで、か。それならまだまだ時間はあるし、あせらなくて大丈夫だな。

「さ、渡すものも渡したんだ。さつさとできてきな」

お前が呼んだのに出てきますけとは酷いもんだな。

「んじや、帰るぞ」

「あ、やばい」

学園長室を出ようと扉の近くにいくと扉の向こうから聞きなれた声が聞こえてきた。

まさか???????

ババアはまだきずいてないようなので、少し早足で扉まで行き、その扉を開けるとそこには――

「あ、大地。偶然だね」

「ああ、そうだな」

北斗がいた。たぶん、全部きいてただろうな。

「なあ北斗、さっきここに来たのか」

「うん。そうだよ」

「じゃあ盗み聞きはしてないんだな？」

「私がそんなことする訳ないじゃん」

「この箱に黒金の腕輪が入ってるんだが」

「見せて見せて！」

「やつぱ聞いてたんじゃねえか！黒金の腕輪のことはお前にも話さないぞ！」

「しまった！私としたことが！」

まんまと引つかかる北斗。これはこれでコイツの良い所かもしれない。

「だけどいまは――」

「あのなあ北斗。この話は絶対に誰にも話すなよ」

「うん。わかってるよ」

「それならいいんだが」

「一応誰にも言うなどは言われてたけど、聞いちゃったもんは仕方ない。」

「それよりも大地、早く帰ろうよ！」

「んあ、そついやもうそんな時間か」

あまり長くは喋っていなかったが、今は既に放課後。ほとんどの生徒は下校してるだろう。

「んじゃ帰るかー」

何気なくポケットに手を突っ込むと、そこにはカメラがあった。そついや、ムツツリー二と取引をするために、このカメラで北斗を撮つてくれって頼まれたんだよなあ。

今の内に聞いてみるか。

「なあ、北斗」

「ん？何？」

「家に帰ったら、その????????写真、撮らないか？」

「え？どうして？」

まあ、当然の反応だよな突然こんなことを言われても。

「まあ、いいだろ。写真ぐらい」

適当にごまかしておく。ムツツリー二と取引する。なんていったら撮らせてくれないかもしれないしな。

「ま、いいよ！撮ろうよ写真！二人で！」

ん、二人で！？

まいったな。俺は写る必要ないんだが???????

「大地????????二人で撮るのは嫌なの？」

北斗が涙目で俺の事を見つめる。

こんな状態で嫌なんか言える訳ないよな???????

「いや、そついう訳ではないんだが??????？」

「それじゃ、二人で撮ろうね」

涙目から一転し、いつもの笑顔に戻る北斗。

さて、どうしたものか。どうやって北斗の写真を撮ろうか??????
???

「それじゃ、早く帰ろうよ！」

そついつて北斗が俺の腕をとって走りだす。

ま、後で考えればいいか。

今は北斗という時間を大切にしたい。写真のことは後で考えればいいか。

俺はそのまま北斗に引っ張られながら、学校を後にした。

第36話（後書き）

感想を書いて頂けると嬉しいです。

第37話

「うう????????なんで意地悪するの?」

涙目で北斗が俺にそう問いかける。

「いや、その、すまん?????」

どうしてこんなことになったんだか??????

今から大体30分前の事だ。

「なんか面白い番組やってないかな」

そういつて北斗がチャンネルを回していると、

「きゃあああ!」 テレビ

ん、これは確か、「本当にあつた怖い話」か。今日やってたーん?

ガクガクガク

「おゝい北斗。何やってるんだ?」

北斗の方に目をやると、椅子から降りて、体を丸めていた。

「え!?あ、いや!こ、これは、その?????!」

あ、さてはコイツ??????

「怖い奴が苦手なのか?」

からかうように、微笑を浮かべて、そういつと、

「な!?何をいつてるの大地!私は怖い話なんてちつとも苦手じゃないんだからね!」

あー。やつぱり苦手なんだ??????

ここはもつとからかつておこつ。こんな北斗、今度はいつ見れるかわからないしな。

「んじゃ、このままこの番組みていいんだな?」

「え??????」

そのまま北斗の表情が固まる。

「そ、これはだめだよ!だって、ほら!私他にみたい番組あるし!」

「んじゃ、俺はこの番組が見たいな」

「またもや北斗の表情が固まる。」

「北斗って本当に怖い駄目なんだなあ。」

「じゃあ、さ。大地の側にいてもいい？」

「ん。それぐらいならいいぞ。」

「そういうと、北斗は体を丸めたまま、こちらに向かってくる。」

「????????正直、俺にはこの光景のほうが怖い！」

「うう、本当に見るの????????」

「今にも泣き出しそうな顔で俺を見る北斗。」

「さすがにそろそろ可愛いそうになってきたな。」

「いや、もう他のチャンネルにしてもいいぞ。」

「そういうと、北斗は驚いた顔俺をしながら、」

「え?だって大地、この番組が見たいって????????」

「といった。」

「やれやれ、まだきずいてないのか。」

「それはな、お前がどんな反応をするか見たかっただけなんだよ。」

「そういうと北斗はなぜか悲しそうな顔をした。」

「せつかく抱きつけると思ったのに????????」

「ん?なんか言っただか?」

「あ、なんでもないよ????????」

「そうか、ならいいんだが。」

「そんな会話の後で、北斗はチャンネルを変えて、みたいといっていた番組を見ているんだが、んで不機嫌そうなんだ?」

「おゝい、北斗?」

「????????????????」

「返事が帰ってこない。こりゃ完全に怒ってるあ。どうすれば機嫌を直してくれるだろうか????????」

「なあ、北斗。」

「????????????????」

「なあ、北斗。」

「????????????????」

「キス、するか？」

ガツ！

「お、おい！？大丈夫か！？」

いきなり頭をテーブルに打ち付けた！？

何！？いつもは自分からいつてるけど、押されるとダメってことか！

「あ、あの、大地?????そ、その?????」

顔を真っ赤にしながら、北斗が喋る。

なんか、言ったこっちもすんごい恥ずかしくなってきた。

「あー北斗。心配するな。今は冗談だから」

「え？冗談？それって嘘ってこと？」

「ああ、そうだ」

自分の顔も真っ赤になってそうで、北斗の方をみないで返事をする。

「うう?????なんで意地悪するの？」

そして現在に至る。

ん、なんか、泣いてないか？

「う、うう」

あ、本当に泣き出した。これどうすればいいんだ？

「あーっと、その、いつたいたいどうしたんだ？」

「?????????本怖」

ん？本怖？どつかで聞いたような?????????

「ああ！さつきやってた本当にあつた怖い話か！」

なるほど、美華もそれを見て、怖くなって家に逃げてきたというわけか。

「それで、怖くて家にきたのか？」

無言で首を縦に振る美華。こりや相当だな。

「あー。家の鍵は閉めてきたのか？」

この質問にも返事をせず、首を縦に振る。

ん？ここまで怖がつてるのに、鍵を閉めてきた？

「?????????さつき、みちやったの?????????」

「ん、みちやった？何をみたっていうんだ？」

「?????????幽霊」

「幽霊つて?????????」

いくら怖いからって、幻覚を見るほどになるとはな。この状態の美華を一人にはできないな。

「あー美華。今日は家に泊まってけ。北斗にも話しておくから」

「?????????うん。ありがとう」

おい。もしかして、本当にいるのか？その、幽霊が?????????とりあえず、俺は美華を玄関からリビングに連れていく。

その後、北斗に事情を話すと、北斗は美華が泊まることに賛成してくれた。

その後、三人で雑談をしていると、

ピンポン

またインターホンが鳴った。

「とりあえず、出てくるな」

「「いつてらっしやーい」「」

????????なぜ楽しそうに俺を送りだす。

「どちらさまですかーっつてうわあああ!」

扉を開けると、そこには息を切らしてはあ、はあ、と呼吸を荒くしている明久と雄二がいた。

「大地????????!頼む!今日だけ泊めてくれ????????!」

「お願い!僕も泊めて!」

「な、なんだお前ら!?いつたいなにかあつたんだ!?!」

「おい大地!とりあえず中に入れてくれ!」

「ああ、いいんだが????????」

どうしてそんなに慌てているんだろうか?

「しゃあ僕も!あ!大地!鍵はきちんとして、チェーンもつけておいてね!」

そういつて俺の家に上がりこむ友人二人。

とりあえずいわれた通り鍵とチェーンをかえる俺。その後、皆が集まっているリビングにいくと????????

「明久、雄二?んなとこに立ってないでさっさと進め」

そういつても、まったく動かない二人。

「?????????んで」

ん?なにかいつたか?

「?????????なんで女子が二人もいるんじゃあー!」

あーそういや北斗と美華がいたなあ。

説明面倒だなあ。

「まあ落ち着け明久。てか、雄二はなんで立ち止まってんだ?」

「い、いやなんでもない?????????ガタガタガタ」

なんでもないならそんなふうに震えないだろう。

「まあ明久。女子がここにいるわけはだなー!」

第39話

「?????????なんか、ごめん」

「いや、いいんだ」

明久になぜ北斗と美華がいるのか説明をすると、明久が申し訳なさそうに謝る。

「そんな理由があるとは思わなくて、つい大地を殺そうとしちゃって?????????」

「ちよつとまで。お前はつい人を殺すのか」

明久もやはりFクラスの一員だ。

「ねえ、雄二さつきからなんでそんなに震えてるの？」

「そういやそうだな。リビングに驚くものでも置いてあつたか？」

「いや、そういう訳じゃないんだが?????????なあ明久。俺の見間違いかもしれないんだが。一条って、さつき見た奴にいてないか？」

ん、さつき見たやつ?そういや、雄二達がなんで家にきたか聞いてなかー?」

「おい明久。なんでお前まで震えだすんだ？」

雄二の話を聞いて、北斗のことを見た明久も震えだす。てか、北斗がなにかしたのか？」

「ねえ、大地?????????」

「なんだ？」

「信じてくれないかもしれないけど、さ。実は僕達、幽霊を見てきたんだよ?????????」

「は？」

それと北斗と何が関係あるんだ？」

「明久じゃ説明不足になる可能性があるから、ここからは俺が話す」
そういつて、少しまを置いてから雄二が喋りだす。

「ん、あれは明久か？」

現在時刻は7時前後。まさかこんな時間まで指導を受けていたって
いうのか？

「おい明久！」

俺はコンビニを出て、明久に声をかける。

「ん？あれ？雄二。こんな時間にどうしたの？」

「いや、まあ、親が旅行に行った、とだけ言っておこう。それとー
ー」

俺が帰った時、玄関に、「旅行にいつてきます 4〜5日ぐらいで
帰るから、がんばってね」と無責任な張り紙がしてあった。

息子に相談もなく勝手に旅行に行くのはいい。だが、

「家の鍵がないんだ????????!」

まさか今日に限って家の鍵を忘れるとは思わなかった！俺はこのま
ま野宿になるのか?????!

「ふーん。それじゃ、僕の家泊まってく？」

明久がそんな事をいいます。

「いいのか？」

「うん。いいよ。二人のほうが楽しいし」

まあ、野宿よりはましかもしれないし、ここは明久の善意に感謝ー

「あ、もちろん有料で」

した俺がバカだった。

「ん、あの人達見かけないな??????」

「それがどうした？」

今、俺達は明久のマンションの手前に来ている。そのマンションの

入り口に、少し若い感じの夫婦がいた。

「あの、どうかしましたか？」

明久がその夫婦に話かけー！？

俺は明久が話かけた夫婦をもう一度よく観察する。

「あ、あああああ！」

驚きのあまり、かなり大きな悲鳴をあげてしまった。

やばい！この人達はマジでやばい！

「うわ！？どうしたのさ雄二！」

明久が驚いて俺の方を向く。

俺はこの瞬間に、明久にアイコンタクトで伝えた。

「その人達の足下を見ろ！」と。

それを読み取った明久が、その人達の足下を見て、一瞬で青ざめた顔になる。そして再度俺の方を向き、今度は明久の方から、

「逃げるぞ！」

と、アイコンタクトを送ってきた。

作戦開始まで5・4・3・2・1・いー

「ッダツシュ！」

明久と一緒に階段を駆け上がる。とにかく全力で。今持てる力全てを出して階段を駆け上がる。

「ねえ雄二！なんであの人達足が無かったの！？」

そう。さきほどみた人？達は足がなかったんだ。ただひとついえることは????????

「幽霊だからだ！」

やはりこれしかでてこない。

「ええい！認めない！僕は認めないぞ！」

「んなこといってないで、この近くに知り合いは居ないのか！？」
知り合いがいるなら、一旦そこに非難したほうが安全だろう。

「えっと、この近くにはたしか????????あ！」

「知り合いがこの近くにいるのか！？」

「うん！雄二もよくしってる人がね！」

それはとても助かる。

「そんで、そいつは誰なんだ!？」

「大地だよ!」

第40話

「んで、現在に至る」

「なるほどな」

「あれ？大地は信じてくれるの？」

「まあ、な」

いつもなら信じなかっただろうが、美華も幽霊を見たっていったし、明久達の怖がり方からして本当の話と見て間違いないだろう。それより、さっきの話できになったことがひとつあった。

「なあ雄二。その幽霊って、夫婦でいたんだな」

「ああ。そうだが」

「それなら、北斗に似てるってのは、二人と似ているってことなのか？それとも夫婦の内の一人と似ているってことなのか？」

「二人に似ているって感じだったな」

「そうか????????」

となると????????

「だが、そんなはずは????????」

こんな事が本当にあるとは思えない。だけど、可能性はある。

「どうしたの？大地」

「いや、なんでもない????????二人も疲れただろう。早くリビングにー」

ピンポーン

そんな時、玄関のインターホンが鳴った。

「すまん。ちよつと出てくるから、リビングにいつててくれ」

そう告げて、俺は玄関に向かう。

「どちらさまでー！？」

俺は扉を開けて、自分の目に入ってきた光景に目を疑った。

「は、はははあ????????」

そこには、雄二達の言っていた、足のない幽霊夫婦が立っていた。だが、俺が驚いたのは、そこじゃない。

「北斗の、両親????????」

それは、確かに北斗の両親だったのだ。

「君は、神長君だね。私達のこんな姿を見ても驚かないのかね?」

北斗の父親が、俺にそんなことを聞いてくる。

「いや、正直心臓が止まりそうだ」

そういうと、夫婦揃って苦笑いする。

「まさか、君に最後に見せる姿が幽霊になった姿になるとは思わなかったよ」

ハハハ、と笑う北斗の父。いや、もう笑い事じゃないだろ??????

「本当に冷静なのね。前とまったく変わってないわ」

今度は北斗の母が口を開く。北斗の両親は幽霊になっても、お喋りが好きなんだな。

「それより、北斗を呼んできた方がいいですか?二人とも北斗に会いにきたんでしょう?」

俺が北斗を呼ぼうと、二人に背を見せようとした時、

「いや、いいんだ」

「私達は、あの子に会う資格なんてないのよ????????」

「????????????????え?」

この人達は、北斗に会う気がない?それはどうしてー!

「私達は、あの子が、遠くの学校に行って一人暮らしするのを心配して、近所の学校に入れたっていうのに、結局あの子を一人にしちやっただの」

そこまで言って、北斗の母は話すのを止める。かわりに北斗の父の方が口を開く。

「だから、今日は君にお礼をいいにきたんだ」

「????????????????え?」

それじゃ、この人達は、北斗じゃなくて、俺にあいにきたっていうのか？

「娘を、たすけてくれて、ありがとう」

「本当に、ありがとう????????」

「????????ざけるな????????」

「「え?」」

「ふざけるな!」

俺の出した大声に驚いて、二人が怯む。

「あんたらは北斗の親だろ!? 北斗と会うしかくがあるないなんて関係ない! 今北斗がいるのに、すぐ側にいるのに! それでもあんたらは声をかけないっていうのか!」

なんで自分がこんなに大声を出したのかわからない。でも、この人達は間違ってる。それだけはわかった。

「だが、私達があのに会ってしまえば、またあの子を悲しませてしまう????????」

「そんな心配してんじゃねえよ! 北斗が後でこの話を知ったらどくなると思うんだ! あんたらは北斗のすぐ近くにいたのに、北斗に会わなかったって事になるんだぞ!? それこそアイツを悲しませることになるんじゃないのか!」

「それはそうだが????????」

「いいから、そこでまっててくれ。今、呼んでくるから」

やっと冷静さを取り戻した俺は北斗を呼ぼうと、後ろを向いた時、

「大地、何をやってー!」

そこには、北斗が居た。

第41話(前書き)

なんか幽霊じゃなくて普通の人と話している感じがしますが、き
しないでください^^;

第41話

「お母さんに、お父さん????????」

北斗が、恐る恐る言う。

「ああ、そつだ。お前の両親だ」

「でも、お母さんとお父さんはもう????????!」

「だから、これは幽霊なんだ」

「嘘????????なんで????????????????」

「北斗?????????」

「いやああああ!」

「北斗!?!」

北斗がその場に、膝から崩れ落ちる。

俺はあわてて北斗を助けにはいる。

?????????????????俺は、本当に北斗を両親と合わせてよかつたのか?

会わせたせいで、現に北斗はショックを受けている。

俺がやったことは、ただ北斗の心を傷つけただけじゃないのか?

そんな不安が頭の中を駆け巡った。

俺は?????????俺は?????????!

「大地?????????」

「?????????????????北斗、すまない」

謝る。今、俺はそんな言葉しか出てこなかった。

「私、怖い?????????」

「怖い?」

「うん。お母さんとお父さん達のことを思い出すと、いつか、大地も私の前から消えちゃいそつで、とつても怖い?????????」

「北斗?????????」

俺は北斗を強く抱きしめた。

「俺は突然消えたりなんかしない。俺はお前の側にいる。これから

も、ずっと。そう約束したろ?」

「うん。そうだよね????????」

北斗が顔を上げる。

「きちんと、両親に挨拶してこい。これが、本当に最後の会話だ」
俺はそれ以上何も言わずに、北斗を立たせる。

「北斗????????」

「お父さん、お母さん????????」

「良い、友達を持ったな????????」

「うん????????!いい、友達、だよ!」

涙声で北斗がそう言った。

「これから、いろいろあると思うけど、頑張るのよ」

「うん????????!がんばる????????!」

「お母さん達は、いつも見守っているから」

「うん????????!うん????????!」

「それじゃあ、元気だな」

そういうと、北斗の両親の体が徐々に消えていく。

「神長君。娘を、幸せにしてやってくれよ」

「え!?あ!はい!」

消える直前に、そんな事をいわれて、咄嗟に返事をしてしまった。

し、幸せにしてやってってくれて、まさか????????!

って、んなこと考える必要ないか。

「さてと、皆まってるだろうし、そろそろ戻るか」

俺が玄関から出ようとした時、

「大地!」

「ん?なんだ?」

振り返ると、北斗が顔を真っ赤にしながらも満面の笑みで、

「これからも、ずっと一緒だからね!」

そう言つて北斗は、俺の横を走ってリビングに向かった。

「????????心配しなくても、ずっと一緒だったの」

俺は北斗に聞こえないぐらいの小さな声で、そう呟いた。

第42話

「ーとまあ、そういうことだ」

俺と北斗がリビングに戻ると、三人から質問せめにあつた。

「ふーん。なるほど。つまり、俺達が見た幽霊は一条の両親で、もうその幽霊は成仏した。ってことだな」

「まあそんなところだ」

「でもさ、本当にこんなことがあるんだね。僕、幽霊を見たの初めてだよ」

そりゃ、このばにいる全員そうたる。

「まあ、これで幽霊話も解決したんだ。お前ら、さっさと帰れ」

現在時刻は9時少し前。かなり遅い時間だが、全員このアパートだから、普通に帰れるだろ。

「そんな連れないこというなって。今日ぐらいは泊めてけ」

「んー」

「大地君。今日ぐらいは泊めてよ!」

「うーむ????????????」

「そうだよ!今日は僕もとめー」

「お前は帰れ。今スグ帰れ」

「僕だけお願いするまえに断られたんだけど!」

「んじゃ大地。今日は泊めてもらうぞ」

「私も!」

「へいへい。かつてにしてくれ」

「なんか皆僕がいないみたいに会話を進めてるんだけど!?僕を無視しないで!」

まったく?????????しかたないな

「明久も泊めてやるから、もう騒ぐな」

「え!いいの!」

これ以上騒がれたら、隣のから苦情がくるかもしれないし、明久も

泊めてやるぞ。

「あーっと。んじゃ、美華は北斗の部屋で寝てくれ。雄二と明久は客間に寝てくれ。布団は出しておくから。?????????????????美華と雄二の分だけ」

「僕の布団は!？」

明久がまた騒ぎ出した。

「家には布団は4組しかないからな。床が嫌なら雄二の布団に入れてもらえ」

「何気持ち悪いこといつてるのさ大地!僕が雄二と一緒に寝るなんて????????????????うぷ」

明久が今にも吐きそうな顔になる。????????????どんな事を想像したんだか????????????????????

「気持ち悪いのはこっちだ!てめえは硬い床で寝てる!」

あー雄二も騒ぎだした。こうなると止めるの面倒なんだよなあ????????

「それじゃあさ、吉井君は大地のベットで寝たら?」

??は?それじゃ、俺の寝る所が無くなる。

「それで、その????????????大地は、私と????????????一緒に布団で????????????」/ / / / / /

北斗が顔を真っ赤にしながらそんな事を言い出す。

俺と、北斗が一瞬の布団で寝るつて????????????つてやばい!

「雄二!包丁!」

ここには明久がいた!んなことしたら夜殺されるに違いない!

「まあめて明久。今のはほんの冗談だろ一条」

「え?そうなの一条さん」

雄に関するが明久を止めに入ってくれる。後は北斗が嘘といえばこの話は丸く収まる????????!?

「いや?????????冗談じゃなくて、本当?????????」

何いつてくれてんだ!

「明久ああああ！」

「雄二いいいい！」

「殺るぞおおおお！」

「うおおおお！」

いきなり目の前に出てきた拳を間一髪で避ける。

コイツら?????。俺を本気で殺す気だ??????

「落ちて着け雄二に明久！別に俺は北斗と寝たりはしない！」

雄二達から距離をとり、必死に説得を心みる。

正直、この状態の二人を相手にするのは厳しすぎる。

「これはなああ。一緒に寝るか寝ないかの問題じゃねえんだあああ
?????」

怖えええ！幽霊なんかより遙かにこええ！

「僕たちはああ、そんなことを本気で言う女子がいることが気に入らないんだああ！」

そういうなり、一瞬で俺の懐に入る明久。

これ本当に人間の動きか！?

慌てて明久から距離をとるも、雄二に先回りされる。

「つて！お前ら本当に人間かよ！」

雄二の動きも、明久の動きも、人間の限界を超えてる気がする！

「嫉妬の力は不可能を可能にするんじゃないやああ！」

「つつつつ！」

雄二の一撃をまともに喰らい、吹っ飛ばされる。これ、骨折れるんじゃないか？

?????向こうが本気なら、こつちも本気でいくしかないか

「あゝあ。お前ら?????どうなっても知らねえ?????ぞ?????」

急に背後にとつともない殺気を感じ、その殺気から離れるように後ろに飛び、殺気の源を確認する。

「美華?????」

そこには、美華が立っていた。?????バカでかいハンマーを

持つて。

「ま、まで、俺は何もしてないだろー」

「大地君のーバカーー!」

俺はその一撃で、気を失った。

第43話

「んんっ????????????????????」

目が覚めると、そこは俺の部屋だった。

俺は確か、リビングで気を失ったはず?????????

「って誰かが運んでくれたんだよなあ」

そんなことをいいながら、部屋の灯りをつけ、時間を確認すると、時計は丁度三時を指していた。

となると、俺は6時間近く気を失ってたのか。

「ったく、美華のやつも加減をしれって????????の?????????」

ベットから起き上がり、部屋の隅を見ると、そこには、シーツにくるまった北斗がいた。

「おい。北斗」

一応声をかけてみるが、返事はなかった。

「完全に熟睡してるな????????」

北斗がなんでここに寝てるかは知らないが、このままにしておくのもなんだし、一応俺のベットに寝かせておこう。

俺はシーツごと北斗を抱えて、ベットに寝かせる。

「俺はどこで寝るかな????????」

正直、完全に目は覚めているが、明日からはまたテスト地獄になる。もしテストの時に寝ると、点数がなくなる。そんなことは、絶対に避けたい。

「つつつても、寝る場所がないしなあ????????」

さて、本当にどうしたものか?????????

多分明久達は泊まっているだろうから、布団はもうない。

となると、俺はソファで寝るしかない、か。

他に寝れる場所も無いので、リビングに移動しようとしたとき、

「あれ?大地。起きたの?」

不意に後ろから声をかけられた。

どうやら、北斗も起きてしまったらしい。

「まあ、な」

「そう。よかった????????とここで、どこにいくの?」

俺が部屋のドアの前にいたためか、北斗がそんなことを聞いてくる。

「リビングに行こうと思ってな。他に寝る場所もないし」

「え?????????リビングで寝るの?」

「ああ。あそこならソファもあるし、床で寝るよりはましだからな」

「ねえ、大地?????????」

「ん?なんだ?」

「一緒に、寝よ?」

「はい?????????????????」

確か、俺はその台詞のせいで気絶したんだが?????????

「あ、いや、その????????大地が嫌じゃないならでいいんだけど?????????」

恥ずかしそうにうつむく北斗。

でもなあ。一緒に寝たなんてことが美華達にバレたら、今度こそ本当に殺されるだろう。

「美華ちゃん達のこと気にしてるの?????????」

北斗にそういわれ、言葉に詰まる。

?????????凶星です。

「そつだよね?????????。美華ちゃん達にバレたら今度は本当に殺されちゃうかもしれないし、しかたないよね?????????」

北斗が寂しそうにそういう。

?????????美華達が起きる前に俺達が起きれば、なんとかなるか?????????????????」

「お前は、いいのか?俺と一緒に寝ても」

「?????????????????え?」

北斗が驚いたような顔になる。

そりゃそうだ。俺も自分で言った言葉に驚いてるんだから。
「あ。うん！私は大地と一緒に寝たいれすう????????」
ん？れす？

なんか言葉遣いがおかしかったような????????

「ふにゃあ????????」

なんか、目がとろけてるような????????

まるで酔ってるみたいに????????つてまさか！

こないだ仕送りに入ってたチューハイでも飲んだのか!?でも、チ
ューハイなんてどこにも????????

「あ????????」

部屋の隅をに目をやると、そこにはチューハイが4本置いてあった。
?????????どんだけ飲んでんだ。

「ほらあ、はやくきてよう、だいちい」

そういつて俺の腕を掴む北斗。

なんだ!?掴む力が半端じゃないぞ!?

「それ〜」

「うおつと!」

掴まれた腕を思いつきりひかれ、ベットに寝かされ、北斗の抱きマ
クラにされーって!

「は、離せ北斗!いろいろとまずい!」

「む。私じゃ不満だとゆうのれすか?」

そういうわけじゃない!いろいろ当たってるから!

「とりあえず本当に離れてくれ!本当にヤバいんだ!」

主に俺の理性が!

「スウ????????スウ????????」

「ん?北斗?」

「スウ????????スウ????????」

あれ?寝ちやつた?力を入れたまま?

北斗は寝ているというのに、俺は北斗の腕から抜け出せなかった。

神は俺にこのまま朝を迎えろというのか??????

「寝れるわけ?????ねえよ?????」
俺は北斗に抱きつかれたまま、朝を迎えることとなった。

俺に抱きついて、顔を俺に近づけている北斗。

????????????????この時点で弁明なんて無理だ?????????
?!

「????????????????大地君」

「????????????????はい」

「ヒモ無しバンジー。やってみたいよね?」

死ぬ!間違はなく死ぬ!

「まてまてまて!それじゃ俺は間違はなく死ぬだろ!?!」

まだやり残した事が沢山あるんだ!

「?????????それじゃ、はい」

そういつて美華に渡されたのは、

紙とペン?

「遺書だけは書かせてあげる?????????」

「まて!お前は俺を殺すことに躊躇いはないのか!?!」

なぜだ。今の美華からは、とてつもない殺気しか感じない。

こうなつたら?????????!

「美華!頼むから話を聞いてくれ!」

「?????????1秒だけね」

「実はー!つて短すぎるだろ!?!一秒つてなにも言えねえよ!」

「それじゃ、一分上げる?????????」

一分か?????????少し厳しいがなんとか説明できるか。

「これはな、北斗が酔っぱらってしたことなんだ!俺が北斗に寝て

くれつて頼んだ訳じゃない!」

頼む!これで通じてくれ?????????!

「え?そうなの?」

通じた!?!かなりはしょつたのに。

「てつきり大地君が北斗ちゃん寝込みを襲つたのかと?????????

」

「ちよつとまて。お前は俺をどんな人間だと思つてたんだ?」

俺はそんな明久みたいな変態じゃない?????????!

「ま、そういうことにしといてあげる。ま、今度こんなことがあつたらら????????」

目が????????怖い????????????????????

「もうこんなことは二度と起こさないと誓います!」

お仕置き内容を聞くのを恐れ、先に誓いをたてる。

「そう。それならいいの。それより、早くご飯作つてよ!」

よかった。いつもの美華に戻つた?????????

「わかつた。けどちよつとまってくれ。今北斗を起こすから」

そついつて北斗を揺さぶる。すると、北斗は俺を捉えていた腕を外した。

やつた?????????!やつと自由だ!

俺は解放され、ベットからでようとすするも、また北斗に腕をつかまれる。

「北斗?????????」

なぜだろう。嫌な予感しかしなない?????????

「?????????おはようのチュー!。まだ?」

「おいで、大地君?????????」

「?????????????????はい」

その後、北斗が起きて止めてくれるまで、俺は地獄のような拷問を受けた。

第45話

「さて、明久、大地。今日からまたテストだ。がんばれよ」
美華に拷問を受けていた俺の気持ちも知らずに雄二がそんな事をいう。

朝の時点で疲れきっているというのに、これからテストか?????
???

「うう、そうだった????????」

明久が心底嫌そうな顔をする。

「明久、諦めろ。目標がAクラスである以上、減っている点数のままじゃ勝ち目はない」

俺もかなり点数が減っている。だから、今回は真面目にテストを受けないと、Aクラスには勝てないだろう。

????????????????美華もいるしな。

「へー。Fクラスの目標はAクラスなんだね」

「ああ。そういえば、神崎はAクラスか」

「そうだよ。でもね、一つ言っておくよAクラスは、坂本君達じゃ絶対に倒せないよ」

俺達がAクラスには勝てない?

まあ、普通に考えればそうだろう。

だがー

「Fクラスは、普通じゃないんでな」

「だな。確かにFクラスは普通じゃないな」

俺の言葉に、雄二が共感する。

「ふふ。その自信がいつまで続くか楽しみね。あ、私今日日直だからさつきに学校に行くね」

そういつて美華は俺の家を後にした。

「さてっと。俺達もそろそろ準備するか」

「ん、そうだな」

今の時間は7時を少しすぎたというところだ。

いつもはんな時間に起きてすらいないんだが??????

「そういえば、一条さんは?」

「ああ。そういえばいないな。どこにいるんだ?大地」

「ああ。北斗はまだ寝てるぞ」

本当はもう起きてるけど、美華を止めた時に自分が何をしてたか聞いて、顔を真っ赤にして布団にくるまっていて。なんて言えない。

「いや、それならいい。無理に起こさなくて大丈夫だ」

「それならいいんだが」

その後、俺達は北斗が部屋から出てくるまで学校へいく準備をして出てきて、北斗の準備が終わった所で皆で登校した。

登校中も北斗の顔が真っ赤だったせいか、俺は雄二と明久にちよくちよつく臍を蹴られた。

そして、補充試験を終えた二日後の朝。

いよいよAクラス戦を残すのみとなった俺達は、作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

壇上の雄二が、みたことがないほど素直に礼を言う。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」
「なんだか、本当に雄二らしくない。だが、ここまで素直にいわれると悪い気はしない。」

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ!」

「おおーっ!」

「そうだーっ!」

「勉強だけじゃねえんだーっ!」

最後の勝負を前に、皆の気持ちは一つのようだ。

認めるのかよ!?

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう?まともにもやりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

だが、俺達はこうして勝ち進んでいる。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない」

最初は勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いてきた雄二の言葉だ。無理な話に思えても、否定する人間はもうこのクラスにはいない。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

「「「おおおーっ!」「」」

クラスの士気が最高に達してた。そんなとき、

「あー二年Fクラス、神長大地。至急、学園長室に来なさい。繰り返します。二年Fクラス、神長大地。至急、学園長室に来なさい」

なんだ!? 皆の視線がかなり痛い!

「?????????????何をやらかしたんだ?」

雄二が不満気な顔で俺を見る。

士気が下がったのは俺のせいじゃないぞ!? 放送を入れたババアがいけないんだ!

「もういい!俺はもう行く!」

教室から出る時まで、皆の視線はとても痛かった。

「んで、なんで俺を呼び出しやがったんだ?????????」

ババアを睨みつけながら、ババアが俺を呼びだした理由を聞く。

「アンタに開発をたのんだ、黒金の腕輪、あるだろ？」

「ああ。まだ半分も完成してないがな」

本当はまだほとんどやってないがな。

「そうかい。ならよかつたよ」

ん？何がよかつたんだ？

「実はね、あなたにはその腕輪を夏休み前に作ってくれって言ったんだけどね、それを、少し早めてもらいたいのさね」

「????????いつまでに作ればいい？」

「そうさね????????清涼祭の少し後、といった所かね」

清涼祭。それは文月学園の文化祭の名前だ。

そうか。清涼祭の少し後か。それなら今からでもなんとかなるな。

「まあ、いいだろう。ところで、黒金の腕輪をどうするつもりだったんだ？」

製作者として、これは知っておきたいところだ。

「決まってるさね。それを優勝商品にして、大会をやるさね」

大会????????か

「アンタも参加出来るけど、参加するかね？」

つまり、俺は自分で作った腕輪を使うためには、その大会で優勝しないといけないってことか????????

「????????ルールは決まってるのか？」

「いいや。まだ何も決めてないさね」

ふざけてるのかこのババア。

「はあ????????」

「なんでため息をつくかね????????まあいいよ。もうこっちの用は済んだからさっさと出ていきなクソガキ」

自分からよんどいてこの態度。本当にイラつくなこのババアは????????

「はいはい。いわれなくても出ていくっつーの」

あ、そういえば。

「その大会。俺も出させてもらっぞぞ」
「そっぴい残し、俺は学園長室を後にした。」

第47話

「では、両名共準備は良いですか？」

今回はAクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

雄二たちは俺がババアの所に行っている間にAクラスに宣戦布告にいき、一騎打ちとはいかなかったが、7対7と言うことで勝負をのんだらしい。

なぜ7対7か。それは、こちらに俺や姫路。北斗がいるから、5対5を避けたかったからだろう。

「ああ」

「?????????問題ない」

試召戦争の会場はAクラス。こっちの方が広いし、腐った畳のFクラスじゃ締まらないしな。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くわよっ」

向こうは秀吉の姉、確か????????木下優子、だったか。

対するこちらは、

「ワシがやるっ」

その弟、秀吉だ。

これは面白い姉妹対決がー

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

なんだ？Cクラスの小山がどうしたっていうんだ？

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

秀吉の身に危険が迫ってる。そんな気がする。

「姉上、勝負はーどうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなっ??
?????!」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測してー
ーあ、姉上っ！ちがつ?????????!その関節はそっちには曲がら
なっ?????????!」

ガラガラガラ

扉を開け、木下が戻ってくる。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりに人を出してくれ
る？」

「い、いや????????。ウチの不戦敗でいい????????」

にこやかに笑いかけながらハンカチで返り血を拭う木下。さすがに
雄二もなにもいえないか。

「そうですね。それではまずAクラスが一勝、と」

高橋先生がノートパソコンを操作すると、壁一面の大きなディスプレイ
レイに結果が表示された。

「Aクラス 木下優子 生命活動 W I N

V S

Fクラス 木下秀吉 生命活動 D E A D

まだ生きてます、とは突っ込めなかった。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは佐藤美穂か。対するこちらは、

「よし。頼んだぞ、明久」

「え!?僕!?!」

ここで明久を使うか???????

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

「ふう????????。やれやれ、僕に本気を出せってこと?」

「ああ。もう隠さなくていいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

明久って、なんか凄いとこあつたか?

「おい、吉井って実は凄いヤツなのか?」

「いや、そんな話は聞いたことないが」

「いつものジョークだろ?」

Fクラスからそんな声が聞こえてくる。

「吉井君、でしたか?あなた、まさか???????」

「あれ、気づいた?ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

「それじゃ、あなたは???????!」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕

明久がこの場にいる皆に向けて言葉を告げる。

「――左利きなんだ」

「Aクラス 佐藤美穂 物理 389点

VS

Fクラス 吉井明久 物理 62点

第48話

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

「????????自業自得だと思う」

「よし。勝負はここからだ」

「ちよつと待った雄二！アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？何ソレ？食えんの？」

明久にたいする信頼なんてそんなものだろう。

「では、三人目の方どうぞ」

「それじゃ、私がいくな」

そういつて前に出たのは北斗だ。対するAクラスは――

「僕が行こうかなあー」

あれは????????まさか！

「雄二！あれは?????????!」

「ああ！間違いない????????」

「「内藤君だ！」」

内藤君は、一年の頃に噂を聞いたただけだった。その噂とは、可愛らしい外見なのに、話すことほとんどが内容規制のかかる内容だったことだ。

「あれがあの内藤君か????????」

正直、どんな事になるか、予想できない。

「君、確か一条ちゃんだよな？」

「あ、はい。そうですか？」

「君は何カッブ？」

やっぱり最初から下ネタかよ！

「ふえ!?あ、えつと?????????Cくらい?????????かな」

「お前も真面目に答えるな！」

「それじゃ、一条ちゃんは今もうピーとかガーーーとか、ピーをつかってガーーーとか????????」

「コイツ、本当に下ネタばかりだな??????」

「もういやああああー！ー！」

「おい、北斗!？」

北斗が内藤君の話を聞いて、顔を真っ赤にして教室から飛び出した。つて、これじゃあこの試合はどうするんだ？

「もう、一条ちゃんつてば、まだピーとかビビーとか聞いてないのに????????」

「お前はもう一緒喋るな！」

内藤君?????????!なんて恐ろしい子なんだ??????

「それで、この戦いはどうするの?相手がいなくなっちゃったけど?」

ここで負けを認めると、ウチはもう負けることが許されなくなる。どうする????????

「????????今回もウチの不戦敗でいい」

「そうですか????????わかりました」

そういつてノートパソコンを操作する高橋先生。

「Aクラス 内藤 光 耐性 WIN

Fクラス 一条北斗 耐性 LOSE

何に対する耐性だ、とは突っ込めなかった??????

「さて、次はどなたが行きますか？」

「俺が行こう」

もうこれから俺達は負けられない。

ムツッリーニは保険体育なら安心だ。姫路もなんとかなるだろう。

だから、俺がー

「それじゃ、私が相手するよ。大地君」

俺が美華に勝てるかどうかにかかっている。

「科目はどうしますか？」

俺達はまだまだろくに科目を選んでないから、俺が選んで大丈夫だろう。
「数学でお願いします」

「わかりました。では、召喚を開始してください」

「試験召喚！」

合図とともに出てくる召喚獣。点数はまだ表示されていないようだ。

「大地君。数学にして、本当によかったの？」

「数学は俺の得意科目だ」

「そう。それならいいんだ。けどどね??????」

少し間を置いてから、美華が口を開く。

「数学が得意なのは、大地君だけじゃないよ」

「Aクラス 神崎美華 数学 649点

VS

Fクラス 神長大地 数学 624点」

「?????????!」「」

この場にいる全員が驚きの声を上げる。

まあ、600点台の点数なんて、見るのは初めてだろうな。

それよりも??????

「やっぱりお前はすごいな?????」

「そう?でも、誉めても手加減はしないよ?」

「手加減してもらわない必要はないってーの!」

そう言っている間に、召喚獣を相手に攻撃できる間合いまでつめさせる。

「挨拶代わり!」

そして、太刀を引き抜き、攻撃にかかるが、

「残念。惜しかったね」

美華の召喚獣は俺の一撃を一本のソードで止めた。

「そう甘くはない、か」

俺は召喚獣を一旦相手から遠ざけさせる。

さて、ここからどうするか??????

「こないなら、こっちからいくよ!」

「????????くつ！」

俺と同じように一瞬で間合いを詰める美華の召喚獣になんとか反応し、攻撃を太刀で受ける。

「????????もう、出し惜しみはしない????????」

もう、美華には全力でやるしかないようだ。

「炎斬」

キーワードを口にすると、俺の召喚獣の太刀に、炎が纏わりつく。

「それが大地君の腕輪の能力か。なら、私も見せてあげるよ」

美華の腕輪の能力か。発動されるとやっかいだが、かなり距離を開けられているし、ここは大人しくしているしかない。

「光星」

第49話

美華が腕輪の発動させる。

すると、召喚フィールド全体から、何かが降ってくる。

あれは???????

「星、か??????」

フィールド全体から降ってきた物は星だった。

「そうだよ。「光星」の能力は、フィールド全体に星を落とすだよ。さすがにこれは大地君でも回避できないんじゃないかな?」

「確かに、回避できないかもしれないな。ただー」

少し間を置いてから、俺は言葉をつなげる。

「落とせる位置をコントロールできるなら、な」

そついうと、美華の表情が一瞬にごった。

「凶星、か」

「?????????なんでわかったのかな?」

「腕輪の能力は万能じゃない。どんな能力にでも弱点はつきものだ。

俺の能力にも、な!」

話終わると同時に召喚獣を右にずらす。

星が落ちてきたからだ。

「残念。やっぱ簡単には当たってくれないか」

「当たり前だ!」

今度はこつちの番だ。

俺は召喚獣を美華の召喚獣に接近させる。

途中、ちよくちよく星が落ちてきたが、当たりはしなかった。

「終わりだ!」

俺は召喚獣に炎を飛ばさせる構えをとる。しかしー

「残念。ここは私の間合いだよ」

「ーっつ!」

突然召喚獣の真上に、星が落ちてくる。

回避は、できない！

「くっそおおおお！」

俺は炎を美華に飛ばすのをやめ、狙いを星に変える。
なるべく、炎を節約してー！

ボン！

少量の炎で星を砕くことには成功した。だが、ここは一旦離れるべきだ。

「んーここまでか」

「何がここまでだと？」

「腕輪の能力かな。今ので最後だったみたい」

フィールドを見ると、もう星は降っていなかった。

「なるほど、星の数にも限りがあるってことか」

これも弱点の一つなのだろう。

「そうだよ。だけどね、この能力は、星を全て使った後が本番だよ」

「何をいつて????????」

「メテオ」

その言葉と同時に、当たりに散らばっていた星が、召喚フィールドの上の方に集まり、一つになっていく。

まさか??????

しばらくすると、地面に星は無くなり、上のほうで一つの星となった。

「避けられるなら、やってみてよ！」

星の集合体が俺の召喚獣めがけて降ってくる。これはどこにも避けようがない。

だからー！

「????????迎え撃つ」

この星を砕くには、全ての炎を使うことになるだろう。

俺は召喚獣に炎を飛ばす姿勢をとらせる。

「いつけええええ！」

俺は、召喚獣に全ての炎を飛ばさせる。

ドオン！

星と炎がぶつかった衝撃で、かなりの音がでる。

しばらくすると、星が土煙を上げながら崩れていく。

「前が見えないよ????????」

それは俺も同じだ。だが、俺の召喚獣は、最初からある方向をむかせていた。それは――

「終わりだ。美華」

「????????????????え?」

俺の召喚獣の太刀が、美華の召喚獣の胴体を、鎧ごと貫く。

そう。俺は最初から召喚獣に美華の召喚獣の方をむかせていた。

それは、美華の召喚獣は腕輪を使っている時、一步も動いていなかったからだ。確信はなかった。もし動けるのであれば、俺は美華に倒されていただろう。

「えー????????勝者、Fクラス、神長大地」

これで、まずは一勝だ。

第50話

「では、五人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

こちらの五人目はムツツリー二。

Aクラスはからは、

「それじゃ、僕が行こうかな」

誰だ？あまり見たことがないな。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

なるほど。だからあまり見たことがないのか。

「教科は何にしますか？」

高橋先生がムツツリー二に尋ねる

「……………保健体育」

ムツツリー二の唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤がムツツリー二に話しかける。転校生だから、ムツツリー二

の実力を知らないのか？随分と余裕みたいだが。

「でも、ボクだっけかなり得意なんだよ？キミとは違って、実技で、

ね」

内藤君の女版みたいだな。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良

かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

工藤が明久に問題発言をする。やっぱり内藤君の女版であってるな。

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強な

んて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

本当のことだからしかたない。

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試獣召喚っと」

「……………試獣召喚」

二人に似た召喚獣が、それぞれの武器を手に持って出現する。ムツツリーニはBクラス戦でも見せた小太刀の二刀流。一方工藤は、

「なんだあの巨大な斧は!？」

工藤の武器は、巨大な斧。腕輪も装備しているようだし、400点は取っているってことか。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤が艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

巨大な斧に電光をまとわせ、かなりのスピードでムツツリーニの召喚獣に詰め寄る。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん」

そして、豪腕で斧を振う。このタイミングじゃ、避けられない。

「ムツツリーニっ!」

斧が召喚獣を両断する

「……………加速」

と思った直後、ムツツリーニの腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレた。

「……………え?」

相手の戸惑う顔。俺も正直驚いている。なぜなら、ムツツリーニの召喚獣が相手の射程外にいるからだ。

「……………加速、終了」

ボソリと、ムツツリーニがつぶやく。

一呼吸置いて、工藤さんの工藤さんの召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

「Aクラス

工藤愛子

VS

Fクラス

土屋康太

保健体育

446点

VS

572点

「強いな。明久の総合科目並の点数じゃないか。」

「Bクラス戦のときは出来がイマイチだったらしいからな」

驚いている明久に説明をする雄二。本気を出せばこんなに凄かったのか。

「そ、そんな……！この、ボクが……！」

工藤が床に膝をつく。相当ショックを受けているようだ。

「これで三対二ですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進める。俺と美華が戦った時は、点数が高かったから驚いたのか。

「あ、は、はいっ。私ですっ」

Fクラスからは姫路。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスからは、久保利光。

「やはり来たか、学年次席」

そう。彼は学年次席。

だが、それは振り分け試験を姫路や俺が受けられなかったため、今は、久保の上に俺と姫路と美華がいるため、実際は学年次席ではない。

「ここが一番の心配どころだ」

雄二が心配するのには理由がある。

久保の実力は姫路とほぼ互角。総合科目の点数差にして20点程度しかない。姫路が連戦で疲れている今、負ける可能性も出てくる。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

久保が科目を選択する。

「ちよつと待った！何を勝手に

構いません」

「姫路さん？」

クレームをつけようとする明久を姫路が止める。

「それでは……」

高橋先生が前と同じように操作を行う。

それぞれの召喚獣が呼び出されて
一瞬で決着がついた。

「Aクラス	久保利光	VS	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	VS	4409点	

」

第51話

「マ、マジか!？」

「いつの間にこんな実力を!？」

「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ!？」

至る所から驚きの声があがる。

姫路がこの短期間で、ここまで点数をあげてくるとはな。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなっただい?」

久保が悔しそうに姫路に尋ねる。つい最近まで拮抗していた実力がいつのまにか離されたんだ。気になって当然だろう。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

Fクラスが好き、か。こんな頭の悪い男だらけのFクラスが。

だけど、俺もFクラスが好きかもな。

「これで二対二です」

高橋先生の表情にも若干の変化が見られた。姫路の急成長に驚いたのか、それとも、FクラスがAクラスと渡り合っていることに戸惑っているのか。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは霧島翔子。

そして、ウチのクラスからは当然、

「俺の出番だな」

坂本雄二。コイツしかいないだろう。

「教科はどうしますか?」

霧島が雄二に負けるわけがないと思っているのか、Aクラスの皆は

特に騒いだりしない。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の宣言で、Aクラスにざわめきが生まれる。

「上限ありだつて？」

「しかも小学生レベル。満点確實じゃないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ……」

これで俺たちに可能性が出てくる。勝利の可能性が。

それがわかったからこそ、Aクラスの皆はざわついている。

「わかりました。そうなる問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

一度ノートパソコンを閉じ、高橋先生が教室を出て行く。

「雄二、あとは任せたよ」

明久が雄二の手を握る。

「ああ。任された」

雄二も明久の手を強く握り返す。

俺も二人に近づき、

「がんばれ、よ」

そう呟いて、元の位置にもどると、そこには内藤君戦の後、姿を見えていなかった北斗がいた。

「どこいったんだ？」

「……トイレ」

嘘だな。まあ、これ以上聞くのはやめよう。かわいそうだし。

「それより、これが最後なんだよね？」

「ああ。そうだ」

「坂本君は勝てるの？」

「わからない。けど、俺たちにできることは、アイツを信じて、待つことしかない」

「そうだよな。弱気になっちゃだめだよな！坂本君が勝つって、信じてなきゃ！」

そういつて北斗は、雄二の元に駆け寄った。

さあ、泣いても笑っても、これが最後の勝負だ。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

戻ってきた高橋先生がクラス代表二人に声をかける。

「……はい」

短く返事をし、霧島が教室を出ていく。

「じゃ、行ってくるか」

「はい。行つてらっしゃい。坂本君」

「ああ」

姫路に送り出され、雄二も戦場に向かう。

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

高橋先生がモニターを操作すると、壁のディスプレイには視聴覚室の様子が映し出された。

先に霧島が席に着き、続いて雄二がやってくる。

「では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です」
画面の向こうで日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置いた。

「不正行為は即失格になります。いいですね？」

「……はい」

「わかっているさ」

「では、始めてください」

二人に手によって問題用紙が表にされる。

「大地……」

「心配するな。雄二なら大丈夫だ」

「でも、あの問題が出てこないと……」

「確かに、延長戦になったら負けるだろう。けど」

「もし、出てたら」

「ああ」

もし出ていたら、俺達の勝ちだ。

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が映し出される。

<次の()に正しい年号を記入しなさい。>

()年 平城京に遷都

()年 平安京に遷都

流石は小学生レベル。簡単な問題ばかりだ。

これなら出ているか？

()年 鎌倉幕府設立

()年 大化の改新

……きた！

「よ、吉井君っ」

「うん」

「これで、私たちっ……」

「うん！ これで僕らの卓袱台が」

「『システムデスクに！』」

揃ったFクラス皆の言葉。

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」
「うおおおつ！」
教室を揺るがすような歓喜の声。

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

<Aクラス 霧島翔子 97点>

VS

<Fクラス 坂本雄二 53点>

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

バカテスト 1 問目 (前書き)

やるつやるつと思つて結局やり忘れてましたw
いまさらですが、十話間隔でやっていきたいと思います。

バカテスト 1 問目

問1 (古典)

「やんごとない」の意味を書き記しなさい。

姫路瑞希 神長大地の答え

『高貴である』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『やることない』

教師のコメント

土屋君にしてはまともな解答ですが、残念ながら不正解です。

吉井明久の答え

『ヤバくない?』

教師のコメント

ヤバいのは君の頭です。

問2 (現国)

『「行く」の尊敬語を書き記しなさい』

一条北斗の答え

『いらつしゃる』

教師のコメント

正解です。他に「おいでになる」「や」「お越しになる」「などもありませんね。」

土屋康太の答え

『行ってらっしゃいませ。ご主人様』

教師のコメント

最近メイド喫茶にでもいったのでしょうか？今度先生も
な
んでもありません。

吉井明久の答え

『逝く』

教師のコメント

勝手に殺さないでください。

問3 (科学)

有機物を燃やすとなんとという物質が発生しますか。二つ書き記しな
さい。

神崎美華の答え

『二酸化炭素・水』

教師のコメント

正解です。特にコメントはありません。

土屋康太の答え

『金・銀』

教師のコメント

君は錬金術師ですか？

吉井明久の答え

『情熱・勇気』

教師のコメント

不正解ですが、先生はこの答えは嫌いじゃないです。

問4（科学）

原子番号が同じで、原子核内の質量数が異なるものを互いになんと言つか答えなさい。

神長大地の答え

『同位体』

教師のコメント

正解です。他にアイソトープなんていう呼びかたもあります。覚えておくと良いでしょう。

内藤 光の答え

『ソープランド』

教師のコメント

そんな単語がどこから出てきたのか気になります。後で職員室にきなさい。

吉井明久の答え
『わかりません』

教師のコメント
正直ですね。後で内藤くんと一緒に職員室にきなさい。

問5（古文）

「内の口語訳を記せ。

『「切に」物思へるけしきなり』

姫路瑞希の答え

（ひたすら）物思いしている様子。

教師のコメント

正解です。特にコメントはありません。

島田美波の答え

（切断したいと）物思いしている様子。

教師のコメント

……………怖いです。

第52話 Aクラス戦 閉幕

「四対三でAクラスの勝利です」

視聴覚室にやってきた俺らに対する高橋女史の締め台詞。

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！歯を食いしばれ！」

「吉井君、落ち着いて下さい！」

姫路が後ろから明久に抱きつき、止めにかかる。

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと」

「いかにも俺の全力だ」

「威張るところじゃないだろ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしようが！」

「それについては否定しない！」

「しないじゃなくて出来ないだろ？」

「それなら、坂本君を責めちゃだめですっ！」

「くっ！何故止めるんだ姫路さんに美波！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

「それにな、負けたのは雄二だけじゃなくて、秀吉やお前、北斗だつてまけてるんだ。勝ったやつが文句いうならまだしも、負けた奴が文句言うのはおかしいぞ」

そういうと、明久が静かになった。

よしよし。じゃあ……

「歯食いしばれよ？雄二……」

「さて！明久ならまだしも、お前にやられたら本当に死ぬ！」

「そうだよ大地！冷静になつて！」

北斗が必死で止めにかかる。

クソっ……命拾いしたな！雄二！

「……でも危なかった。雄二が所詮小学生程度の問題だと油断して
いなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

キツパリといいやがった。

「……ところで、約束」

ん？約束？なんのことだろうか？

「……………！（カチャカチャカチャ）」

「ムツツリーニ、僕も手伝うよ」

後ろの馬鹿共はなぜカメラを用意している。

「わかっている。なんでも言え」

何でも言えつてことは、もしかして、この戦争で負けたら、何で
も言うことを聞くとか、そういう約束をしたのか？

「……それじゃ」

霧島が姫路に一度視線を送り、再び雄二に戻す。

そして、小さく息を吸って、

「……雄二、私と付き合つて」

と言い放った。

……………は？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

どういうことだ？霧島は女子が好きな同性愛者じゃなかったのか
？。

「その話は何度も断つただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」

つまり、霧島が異性に興味がないっていう噂は、一途に雄二を思っていた結果ってことか。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱりこの約束はなかったことに

ぐいつ　つかつかつか

霧島は雄二の首根っこを掴んで教室を出て行った。

「……」
「……」
「……」

教室にしばしの沈黙が訪れる。

あまりに予想外の出来事に言葉が出ない。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

呆然としていた俺らに野太い声が掛かる。

声のしたほうを見ると、そこには生活指導の鉄人が立っていた。

「あれ？西村先生。僕らになんか用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補修についての説明をしようと思っ
てな」

え？我がFクラス？

ってことは、まさか……！

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『なにいつ!』』』』

クラスの男子全員が悲鳴をあげる。当然俺も。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』といつても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからと言って、ないがしろにしていいものじゃない」

まあ、雄二が必要最低限の知識さえ持っていれば勝てたかも知れないしな。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》と《A級戦犯》だからな」

あらら。鉄人にさらに念入りに監視されたら、あいつらの学園生活は地獄かな。

「そうは行きませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活をすごして見せます！」

「……お前らには悔い改めるという発想はないのか
まったくもってその通りだ。」

「とりあえず明日からは授業とは別に補修の時間を二時間設けてやる」

二時間か、面倒だなあ。

やっぱり鉄人から逃げるには、三ヶ月後にまた試召戦争で勝つしかないか……

「……………大地」

「お？」

そんな事を考えていると、突然後ろから声をかけられた。

「ムツツリーニか。どうしたんだ？」

「……………取引」

取引？なんのこと……

「あ……………」

いろいろありすぎて忘れてた。ムツツリーニと俺の身の安全と北斗の写真を取引しようって言われてた。

「……………交渉決裂」

ムツツリー二が懐からカッターを取り出す。

くそ……………！かくなるうえは！

「待つんだムツツリー二！」

俺はそういつて、懐から一冊の本を取り出す。

「これをやるう」

俺がムツツリー二に渡した本。それは、今日偶然学校にもってきていた俺の丸秘コレクション（エロ本）だ。

「……………交渉成立」

ムツツリー二が鼻血を出しながら俺の丸秘コレクションを自分の懐に入れる。

さらば……………！俺の丸秘コレクション！

「……………大地？」

北斗が後ろから声をかけてくる。なんか、嫌な予感が……………

「今日家に帰ったら、ああいう本全部捨てるからね」

俺の、コレクションを？全部？

「ま、まて！それだけはやめてくれ！」

「駄目だよ？大地にそういう本は要らないから」

そういつてスタスタと歩き出す北斗。

「ま、まてつて北斗！いや、まててください！」

必死に北斗を追いかける俺は、とても惨めだと自分でも思った。

オリキャラ説明会ー（前書き）

一巻の話が終わったので、説明会を開きまーす。
（復習ふくむ）

オリキャラ説明会――

神長大地　A B型　誕生日　10月29日

文月学園の2年生。Fクラス所属。一人称は俺。性格は冷静沈着だが、たまに明久化する時がある（主に異性絡み）。明久たちと出会う前、地元ではかなり評判が悪く、雄二よりも喧嘩っ早かったが、現在はその面影はない。喧嘩の実力は鉄人が認めるほどである。中学生時代の友達、一条北斗の事が好きであるが、両思いであるにも関わらず、付き合っていない。振り分け試験当日に寝坊して、振り分け試験を受けそびれたために、Fクラスに所属している。学力はその気になれば教師と同等の点数を取れる。得意科目の数学においては、600点台を叩きだす。しかし、一年の頃はテストを真面目に受けていなかったため、その実力は一部の者しかしらなかった。二年生になってからは、試召戦争のために、テストを真面目に受け初め、Bクラス戦の時に、総合科目で学年主席を遙かに上回る点数を見せつける。両親とは別々に暮らしている。現在は一条北斗と二人暮らし。家事全般はこなせる。料理の腕前もかなりのもの。大地の父親は学園長が主任をやっていた研究所の役員だったが、ある事件をきっかけに、研究所を去ることになってしまう。大地はそのことに関して、「アンタは何も悪くない」と学園長に言っているが、学園長はまだ責任を感じている。大地の腕輪の能力、「炎斬」は、大地の父親が考えていたものである。

神崎美華　A型　誕生日　6月27日

文月学園二年生。Aクラス所属。二年の初めに文月学園に転入してきた大地の従兄弟。

一人称は私。性格は明るく、誰とでも仲良くできる感じだが、大地がなにかをしでかすと、お仕置きをする。(その時の記憶は欠けるらしい) 両親が不在のため、大地の家に一時的に預けていたが、両親が同じマンションに部屋を取ったために、現在はそちらに住んでいる。姫路の料理の破壊力を知るただ一人の女子。大地と互角に戦えるほどの点数の持ち主。得意科目の科学においては、大地すらも遙かに上回る実力の持ち主。ただし、かなりウブなため、保険体育の点数はFクラス並。そのため、総合科目では、大地にかなりの差をつけられている。召喚獣の装備、腕輪の能力については、前回のオリキャラ紹介参照。

一条北斗 A型 誕生日 4月21日

文月学園二年生。Fクラス所属。一人称は私。性格は至って普通な女の子。Fクラスでは秀吉につぐ常識人。地元に住たころの大地の数少ない友達。大地には中学生時代から恋心を抱いていた。文月学園に転入し、大地も自分の事が好きだとわかったのだが、付き合っ
てはいない。両親が他界してしまったため、地元を離れ、大地に会いに文月学園に転入する。転入当初はBクラスだったが、大地が学園長に頼み込み、もう一度振り分け試験を行ってもらい、Fクラス所属となる。最初は大地と同じマンションに住むはずだったが、現在は大地と一緒に住んでいる。家事は全て大地がやっているため、北斗は家事などの能力は一切ない。ただ、料理の腕は確かで、たまに大地の代わりに料理をすることがある。美華とは違い、ある程度は変態的な用語に耐えられるが、内藤君には勝てなかった。学力は久保と同じぐらいのもの。得意科目は日本史、世界史。召喚獣の装備は弓道着に弓と、腰に小太刀。腕輪の能力は「百矢」ひゃくや弓から無数の矢を放つというものである。

内藤 光 AB型 誕生日 8月4日

文月学園二年生。Aクラス所属。一人称は僕。純粋な変態。一年の頃から変態という噂が学年中に広まるほどの変態。北斗との戦闘において、変態的用語を連発し、北斗を戦闘不能にさせるほどの変態。その変態さとは裏腹に、学力は余裕でAクラスにはいれるほどのもの。ただし、頭の中が変態で構築されているため、テストで危ない回答をするため、しょっちゅう職員室に呼び出されている。見た目は可愛い顔で、髪型は一般的な髪型より少し長めくらいで、色は茶色。召喚獣の装備は、死神の用な死装束にサイズ。腕輪の能力は「鎌鼬^{かまいたち}」サイズを降り、そこから無数のカマイタチを出し、相手をやつぎさにするというもの。

第53話 清涼祭編 開幕

「……雄二」

「なんだ？」

「……「如月ハイランド」って知ってる？」

「ああ。今建築中の巨大テーマパークだろ？ もうすぐプレオープンっていう話の」

「……とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

「廃病院を改造したっていうアレか？ 面白そうだな」

「……日本一の観覧車とか」

「おお、相当デカいみたいだな。聞いた話だけでも凄そうだな」

「……世界で三番目に早いジェットコースターも」

「早い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするってヤツか。どんなモンなのかわからんが、考えるだけでワクワクしてくるな」

「……他にも面白いものが沢山ある」

「それは凄いな。きつと楽しいぞ」

「……それで、今度そこがオープンしたら、私と」

「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そこまで行きたいならー」

「……うん」

「今度友達と行ってこいよ」

「……握力には自信がある」

「ぐあああっ！アイアンクローはよせっ！」

「……私と雄二、二人で一緒に行く」

「オープン直後は混みあっているから嫌ぐぎゃあっ！」

「……それなら、プレオープンチケットがあつたら行ってくれる？」

「プ、プレオープンチケット？ ケホッ、あれは相当入手が困難らしいぞ？」

「……行つてくれる？」

「んー、そうだなー、手に入ったらなー」

「……本当？」

「あーあー。本当本当」

「……それなら、約束。もし破つたらー」

「大丈夫だつての。この俺が約束を破るようなヤツに見えるか？」

「ーこの婚姻届に判を押してもらつ」

「命に代えても約束を守ろつ」

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

俺たちの通う文月学園では、新学年最初の行事である「清涼祭」の準備が始まりつつあった。

お化け屋敷の為に教室の改善を始めるクラス。焼きそばの為に調理道具を手配するクラス。この学校ならではの「試験召喚システム」について展示を行うクラス。学園祭準備の為にLHRの時間は、どの教室を見ても活気が溢れている。

そして、我らがクラスはというとー

「こいやあ！大地い！」

「ふっ！お前に俺の球が打てるか！」

「大地の球なんて、場外確実だね！」

準備もせずに、校庭で野球をして遊んでいた。

「お前なんか簡単にうちとれるさ！」

「言ったな！？こうなれば意地でも打つてやる！」

ザツとマウンドを均し、ミットを構えている雄二のサインを待つ。

「次の球は」

雄二のサインがきた。まず最初は、球種の指示がくるようになって

ている。

「ストリートを」

ストリートか。となると、一球目は様子見ではずすといったところか？

「明久の頭に、全力で」

……なるほど。かなりの確な指示だ。さすが元神童。

雄二のサインに頷き、大きく振りかぶり、球を全力で投げようとした時。

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「げっ！鉄じー！」

鉄人のいきなりの怒鳴り声で、手元がくるい、その球は――

「ふくおおおおお！」

雄二の股間にヒットした。

「大地……！俺に何の恨みが……！」

我らがクラス代表は、股間を抑えながら、地面に倒れ込んだ。

「吉井！貴様がサボりの主犯か！」

倒れている雄二などお構いなしに、明久との鬼ごっこを始める鉄人。

「ち、違います！どうしていつも僕を目の仇にするんですか！雄二です！野球を提案したのは、クラス代表の坂本雄二です！」

確かに、学園祭の出し物を決める時間に野球を提案したのは雄二だが――

「今雄二は使い物にならんぞ」

股間を抑えながら倒れこんでるからな。

「くそっ！なんて使えない男なんだ！」

「とにかく全員教室へ戻れ！この時期になってもまだ出し物が決まってるなんて、うちのクラスだけだぞ！」

魂まで響きそうな鉄人の恫喝が響き、俺たちは小汚い教室へと連れ戻されてしまった。

第54話

「さて。そろそろ春の学園祭、「清涼祭」の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだがー」

復活した我らがFクラスの代表の坂本雄二がそんは宣言をしてきた。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として大地を任命する。大地に全権を委ねるので、後は任せた」

「おい待てコラ」

「ん？ 何が不満なんだ？」

「不満だらけだろうが！普通そういう役はクラス代表の雄二がやるべきだろ！それに百歩譲って、それを雄二以外の誰かがやるとなったら普通多数決とかならうが！」

いきなり「後は任せた、大地」なんて言われてもできる訳ない。

……まさか、

「お前、さっき股間にボールを当てた事、まだ恨んでんのか？」

「いいや。違うな」

「ん？じゃあなんでー」

「俺はただめんどくさいだけだ」

……きつぱりといいやがった。

「と言う訳で、後は任せた」

「んな少年漫画みたいな笑顔で言うな！」

動機が不純なのに、どうしてここまで笑顔なのだろう。

「つか、なんで俺なんだ？姫路や島田じゃだめなのか？」

他にも実行委員をできそうな奴がいるのに、どうして俺なんだ。

「そう言えば、まだ話てなかったな。姫路と島田は召喚大会に出るんだ」

「ほお。召喚大会か。学校の宣伝みたいなものなのに、物好きなもんだな」

俺だつたら、絶対に参加しないだろうな。ババアの宣伝に手を貸すなんて絶対に嫌だし。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけど。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言うてきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだつて。「Fクラスのことをバカにされたんです！許せません！」って怒ってるの」

「姫路が怒るなんて珍しいな」

怒ってるところなんて、見たことがないな。

「だって、皆のことを何もわかってないくせに、Fクラスつていう理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」

俺もFクラスはバカの集まりだと思ってるなんて言えない。

「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうつてワケ」

それなら、確かに親を見返すことはできるだろうけど、優勝は難しいだろうな。

「まっ、そういうわけで、姫路と島田は実行委員はできないんだ。

だから大地。頼んだ」

「断る。一人でそんな面倒な事できるか」

俺はのんびりと寝ていたんだ。

「しかたないな。じゃあサポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろう？」

二人で、か。それならめんどくさいことは副委員にやらせればいいか。

「ま、それならいいか」

「うし。んじゃ、皆、副実行委員の候補を挙げてくれ。その中から大地が二人選び、決選投票をしてもらう」

雄二がそう言つと、教室内からちらほらと推薦の声が挙がる。

「吉井が適任だと思う」

「やはり坂本がやるべきじゃないか？」

「姫路さんと結婚したい」

「ここは須川にやっってもらった方が」

なんかまた一人姫路にラブコールを送ってたヤツがいたな。

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

そう言っつて明久に一票投じたのは、俺の友達、秀吉だ。

「秀吉。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな。なんて」

「それは他の皆だっつて同意見じゃ。ならば適任の者にやっってもらった方が良いじゃろう？」

「むう……。それはそうだけど……」

秀吉に正論を言われ、静まりこむ明久。

「よし。じゃあ大地。今拳がった連中から二人を選んでくれ」

「あいよ」

ある程度候補が拳がったところで、俺はボロボロの黒板に名前を書き始める。

第55話

「候補1 吉井」

ここはまず吉井だろう。そして二人目は、

「候補2 明久」

明久に決まっている。

「さて、この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに大地の候補の挙げ方はおかしいと思わない？
こういう面倒な役は明久に回すしかないからな。」

「どうする？ どっちが良いと思う？」

「そうだなあ……。どちらもクズには変わりないんだが……」

「こらあっ！ 真面目に悩んでるフリをするんじゃない！ あと、
平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズ
だ！」

明久がクズなのは本当のことだから仕方ない。

「とにかく、お前が副実行委員になったんだ。さっさとでてこい」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ
……」

「んじゃ、後は任せたぞ。ふあ……」

明久と入れ替わりに自分の席に戻る雄二。本当にやる気がないんだな。

「さてと、俺は議事進行をやるから、明久は板書を頼む」

「ん。了解」

「んじゃ、クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してくれ」

俺がそう告げると、数人が手を上げた。さて、誰の意見から聞こうか……

「んじゃ……ムツツリーニ」

「……………(スクツ)」

俺が最初に指したのは、俺の友人、ムツツリーニだ。まあ、コイ

ツが提案する出し物なんて決まってると思うがな。

「……………写真館」

……………本当に予想通りだよ。

「ま、一応意見だから書いておけ」

「あいよー」

「候補1 写真館>秘密の覗き部屋<」

さて、次はー

「んじゃ、横溝」

「メイド喫茶ーと言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶？」

「ああ。別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」

なるほど、中身はただの喫茶店だが、きている衣装が違うってことか。

「斬新ではあるな」

「憧れる女子も多そうだ」

「でも、ウェディングドレスって動きにくくないか？」

「調達するのも大変だぞ？」

「それに、男は嫌がらないか？ 人生の墓場、とか言うくらいだしな」

横溝の意見に、クラスの中が少しざわめく。

「おい明久。ボーとしてないで今の意見を黒板に書け」

「あ、うん」

「ウェディング喫茶>人生の墓場<」

「さて、他に意見はーはい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

そう言いながら、須川が立ち上がる。

「女子にチャイナドレスでも着せようっていうのか？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからわかるように、こと「食べる」という文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というのはー」

こりゃ完全にスイッチ入ったな。面倒だし、無視していいか。

「明久、書いてくれ」

「あ、うん」

返事をしたのはいいが、明久は止まったままだ。

「どうした明久。早く書いてくれ」

「りよ、了解」

「中華喫茶>ヨーロッパアンく」

「おい明久。お前頭に残った単語だけ書いてないか？」

俺の言い終わると同時に、教室の扉がガラガラと音を立てて開き、筋骨隆々のごつい体とれに見合った顔を持つ男が現れた。

第56話(前書き)

文字数制限で、中途半端になってしまったので、後書きにも書いてあります。

第56話

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

先ほど俺たちを教室に連れ戻してくれたFクラス担任、鉄人こと西村教諭だ。

「今のところは、黒板に書いてある三つが候補です」
俺がそういうと、鉄人が黒板に目をやる。

「候補1 写真館>秘密の覗き部屋<」

「候補2 ウエディング喫茶>人生の墓場<」

「候補3 中華喫茶>ヨーロッパアン<」

「……補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」

やべ！明久のせいで補習の時間が伸びる！

「せ、先生！ それは違うんです！」

「そうです！ それは吉井が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカなわけじゃありません！」

補習の時間を増やされたくないために皆が必死に抗弁する。

……明久を売って。

「馬鹿者！ みつともない言い訳をするな！」

鉄人の一喝で、思わず背筋が伸びる一同。

やはり鉄人と言えども、教師は教師。クラスメイトを売る行為は許せないのか。

「先生はバカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

度肝を抜かれたよ。

「まったくお前達は……。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういうった気持ちすらないのか？」

溜息まじりの鉄人の台詞。それを聞いて、クラスの皆の目が輝きだした。

「そうか！ その手があったか！」

「なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！」

「いい加減この設備にも我慢の限界だ！」

一気に活気づく教室内。そりゃそうだ。設備に不満があつて試召戦争を初めたのに、当初の設備よりも更にランクの低い設備で我慢なんてできるはずがない。

「み、皆さんっ！ 頑張りましょう！」

ん、珍しいな。姫路がやる気を見せるなんて。流石に姫路でもこのクラスの設備に不満があつたのか。

「出し物はどうする？ 利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？」

「いや、初期投資の少ない写真館の方が」

「けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ」

クラスの中に活気が溢れ、色々な意見が飛び交い始める。

「中華喫茶ならはずれはないだろう」

「それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？」

「ウエディング喫茶はどうだ？」

「初期投資が大きすぎる。たった二日間の清涼祭じゃ、設けは出ないんじゃないか」

「リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ」

皆がやる気になったのはいいが、全然まとまりがないな。

「お化け屋敷とかの方が受けると思っ」

「簡単なカジノを作ろう」

「焼きとうもろこしを売ろう」

「やっぱり一回黙らせた方がいいな。」

「これから一言でも喋った奴は喉笛を引き裂く」

しゅん……

「うし、んじや、これ以上意見が増えると面倒だから、さつき拳が
った三つから決める。やりたいものに拳手してくれ。まず、写真館
ー」次、ウエディング喫茶ー最後、中華喫茶

「挙げられた手の本数を数える。そして、その結果はー」

「んじや、Fクラスの出し物は中華喫茶にするぞ。全員協力しろよ」
かなりの接戦だったが、数票差で中華喫茶が勝利を収めた。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」
と、須川が立ち上がる。

「……………（スクツ）」

「それと、何故かムツツリー二も立ち上がる。

「ムツツリー二、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

中華料理が紳士の嗜みなんて話聞いたことがない。

「んじや、厨房班とホール班に分かれてもらう。厨房班は須川とム
ツツリー二のところ、ホール班は明久のところについてくれ」

明久をホール班長にしておけば、もしかしたら姫路もホール班に
入るかもしれないという可能性にかける。だが、

「それじや、私は厨房班にー」

現実には甘くなかった。

くそ……………やはりそうきたか！これじゃ中華喫茶じゃなくて殺人
喫茶になっちまう！

「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

平気で厨房班に入ろうとした姫路を明久が止めにかかる。

「よくやった明久！」

明久にアイコンタクトで礼を言う。てか、寝ているはずの雄二が
小刻みに震えているのは気のせいか？

「え？吉井君、どうして私はホール班じゃないとダメなんですか？」
中華喫茶じゃなくて殺人喫茶になるからとは言えない。

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客様さん
に接した方がお店として利益が痛あつ！み、美波！僕の背中

サンドバックじゃないよ!？」

「か、可愛いだなんて……。吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ」

ホールだけで頑張ってください。

第56話（後書き）

「アキ。ウチは厨房班にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

「……………」

「それじゃ、私も厨房にしようかな？」

「北斗。お前も可愛いんだから、ホールでお客さんと接してくれ」

「大地がそういうなら……………」 / / / /

「……………」

「それなら、ワシは厨房にしようかの」

「秀吉、何をバカなことを言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎやああっ！ み、美波様！ 折れま
す！ 腰骨が！ 命に関わる大事な骨が！」

「……………ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……………それが、いいと、思います……………」

こんなドタバタな状態で、俺たちの人並みの生活が懸かった学園祭は幕を開けることになった。

第57話

「入るぞ、ババア」

帰りのHRも終わり放課後。俺は一つの箱を持って、学園長室に入る。

その箱の中身はもちろん、黒金の腕輪だ。

「なんだいクソガキ。アンタの方から来るなんて珍しいじゃないか」
「まあな。んじゃ、本題にはいるぞ」

そういつて俺は、黒金の腕輪の入った箱をババアの前に出す。

「この箱はなにさね？」

わかつてるくせに。意地の悪いババアだ。

「何って黒金の腕輪に決まってるだろ。完成したから持ってきてやつたんだ」

「……まさか本当に作るとはね」

ん？確かコイツ簡単な作業って言ってたよな？

「おいババア。それはいつたいどういうことだ？」

「……アンタ、父親になにか教えて貰ったかい？」

「何も教わってないぞ」

「それじゃ、これは本当にアンタ一人で作ったんだね？」

なんかいつにも増してしつこいな。

「だからそう言ってるだろうが」

俺がそう言つと、ババアは「こいつはおもしろいねえ」と小声で言う。そして、

「アンタ、試験召喚システムに興味はあるかい？」

俺にそんなことを告げる。

俺が試験召喚システムにあるか。だと？

「無いって言つたら、嘘になるな」

「それじゃ、あるにはあるんだね？」

「まあな」

「なら話は早い。試験召喚システムのメンテナンスを手伝ってくれないかい？」

「……………は？」

ババアの言葉に一瞬戸惑う。俺が、試験召喚システムのメンテナンスを手伝う？

「もちろんタダとは言わない。それなりの物は出そうじゃないか？」

「……………いつの話だ？」

「清涼祭の前の日さね。清涼祭で行う「召喚大会」は世間に試験召喚システムを見せつける大会だからね。試験召喚システムに不具合なんか起きたら大変だからね。それに、メンテナンスは、黒金の腕輪を作るよりも簡単なさね」

理由はわかった。けど、

「それならアンタがやればいい話なんじゃないか？」

俺なんかがやるよりも、ババアがやったほうが確実にしろいな。

「アタシは忙しいからできないのさ。だから頼んだよ」

言いたくないことでもあるかのように、勝手に話を進める。

まあ、いいか。それなりのものを出すっていつてるし、それほど大変でもなさそうだしな。

「んじゃ、そのメンテナンスとやら、やってやるうじゃねえか」

俺はそう告げて、部屋の扉に向かう。

「ちよっと待ちな」

部屋を出ようとした俺を、ババアが引き止める。

「なんだ？」

「コイツをやるさね」

そういつて一つの箱を俺の前にだす。

「……………なんだこれは？」

「ケーキさね。黒金の腕輪のお礼だと思ってくれればいいさね」

見たところ開けた様子もないようだし、ありがたく貰っておくか。

「んじゃ、ありがたく貰っておくぞ」

俺はケーキを受け取り、学園長室を後にした。

「ん、このケーキ結構美味しいな」

俺は学園長室を出た後、屋上で貰ったケーキを頬張っていた。家に持って帰ると、北斗に食われるしな。

ケーキを一つ食べ終えたところで、ケータイから呼び出し音が鳴り響く。

俺はケータイを取り出し、電話にでる。

「ーもしもし」

「あ、大地？ちよつと話を聞いて貰える？」

電話は明久からだった。

「別にいいけど。なんだ？」

「えっとさ、なんとか雄二を引つ張り出せないかな？」

「それは、喫茶店にか？」

「うん」

「そうだな……状況によるな。今の雄二の状況はわかるか？」

「えっと、霧島さんに追いかけられてる」

それならなんとかなるな。

「よし。明久。お前、雄二の居場所はわかるか？」

「多分わかるけど？」

「うし。ならお前は雄二に会ってくれ。そしたら、お前のケータイから俺に電話かけて、それを雄二に渡せ」

「いいけど、それでどうするの？」

「いいか。その後はだなーー」

第58話

「理解できたか？」

俺は明久に作戦を説明した後、島田、秀吉と合流し、詳しく作戦を説明する。

「ねえ、それって本当に上手くいくの？」

島田が心配そうな目で俺を見る。

「大丈夫だ。後は秀吉が上手くやってくればいい」

「心得た。しかし、明久からの連絡が遅いのう」

そういえば、結構時間がたってるな。

「ま、鉄人に追いかけてまわされてるってところだろ」

P r r r r

お、きたきた。

「もしもし？」

「ん、大地か？一体なんの用だ？」

ケータイから聞こえてくる声は雄二のものだった。どうやら明久は上手くやったようだ。

「いや、俺が用があるんじゃない。待ってる、今代わるから」

「おい、代わるって誰とー」

ケータイから聞こえてくる雄二の声を無視して、俺はケータイを秀吉に渡す。

そして、秀吉が雄二に対し、

「……雄二。今どこ？」

霧島の声真似をして、そう告げる。

「うむ？大地よ。どうやら切られてしまったようなのじゃが、これでよいのか？」

「ああ。ナイス声真似だ秀吉。後は明久が話をつけるだろうからな」

後は、明久が帰ってくるのを待つだけだ。

「そうか。姫路の転向か……」

俺と島田と秀吉は、雄二たちと合流し、Fクラスの教室内にいた。雄二と俺はどうして喫茶店を成功させないといけないのか。その詳しい理由を知らなかったので、三人から説明を受ける。

「そうになると、喫茶店の成功だけじゃ不十分だな」

「だな」

雄二の台詞に相づちを入れる。

「不十分？ どうして？」

「姫路の父親が転校を勧めた要因は恐らく三つある」

「そういつて、俺は指を三本立てる。」

「まず一つ目。ござとみかん箱と言う貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功した利益でなんとかできるだろう」

言いながら指を一本引つ込める。

「二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと？」

「そういうことだ。教室の改修となると、喫茶店の利益程度じゃ、どうにもならん。それに、業者の出入りや手続きが必要になるから、学校の協力が不可欠だ」

雄二の代わりに、俺が説明をする。

「ま、大地の言うとおりだ。んで、最後の三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促すことのできない学習環境という面だ」

「ねえ雄二。大地がいるんだから、三番目の問題は大丈夫なんじゃない？」

「いいや。姫路の父親はFクラスをバカの集まりだと思っているからな。だから、大地も姫路の父親の中ではただのバカになっていくらう」

失礼な父親だな。

「ま、それについては姫路と島田で対策を練っているんだろ？」

「そうか。だから「召喚大会」なのか」

召喚大会で優勝すれば、Fクラスにも学年トップと渡り合える生徒がいるって証明できる。そうすれば、競争相手についてはクリアできる。

「そうなの。この前、瑞希に頼まれちゃって。「どうしても転校したくないから協力してください」って。召喚大会なんて見世物にされるだけみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

「大地が参加するなら優勝は無理だと思うが、今回お前は出ないんだらう？」

「まあな。ババアの為にでる必要なんてないからな」

「ん、大地は学園長と知り合いなの？」

明久が俺にそんなことを聞いてくる。

「まあ、な」

「おし。それじゃあ話が早い。学園長室に行くぞ」

雄二がそう言いながら立つ。やれやれ。あのババアにもう一度会いにいくなのか……

「ねえ坂本。どうして学園長室に行くの？」

「ま、簡単なことだ。二つ目の問題。これは学園長に直訴したら済む話だ。ここは教育機関なんだ。いくら方針とはいえ、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

あのババアが素直に引き受けるとは思えないがな。

「それなら、早速学園長室に行こうよ」

そう言つて、明久も立ち上がる。

「うし。んじゃ、秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人を見かけたら俺たちは帰つたと言つておいてくれ」

「どうやら、学園長室には、俺と雄二と明久の三人で行くようだ。

「うむ。了解じゃ。鉄人と、ついでに霧島翔子も見かけたらそう伝えておこう」

霧島の名前を出されて言葉に詰まる雄二。本当に霧島に弱いな。

「アキ、神長。しっかりやってきなさいよ」

「オツケー。任せといてよ」

「りょーかい」

島田の声援を受け、俺たち三人は、教室を後にした。

第59話

「……賞品の……として隠し……」

「……こそ……勝手に……如月ハイランドに……」

学園長室の前まで来ると、扉の向こうで誰かが言い争っている声が聞こえてきた。

まあ、片方はババアで間違いないだろう。だが、もう一人は誰だかわからんな。

「どうした、大地」

「中で誰かが話をしているようだが、片方はババアで間違いないな」「そうか。なら良い。あ、そうだ大地。いくら知り合いだと言っても、こちらは頼みがあつて来てるんだ。敬語を使えよ？もちろん明久もだからな」

扉を開ける直前に、雄二にそう言われる。あのババアに敬語を使え、か。

「できるだけ頑張るさ」

「もちろん」

さて、入るとするか。えーっと敬語敬語。

「失礼します。ババア」

「おいバカ。後ろの一言が余計だ」

しまった。つくせで。

「またアンタかい……って、今度はアンタだけじゃないみたいだね」
そういつて、俺の後にいる雄二と明久を交互に見るババア。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

眼鏡を弄りながらババアを睨み付けたのは、教頭の竹原先生、か。「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

「さつきから言ってるように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

そう告げると、竹原教頭は部屋の隅に一瞬視線を送り、

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

さつき何かを確認していたように見えたが、気のせいかな？

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

ババアが竹原教頭との話を中断されたことを気にすることなく、俺らに話を振る。

とりあえず、俺がババア相手に喋ると敬語どころじゃなくなるし、雄二に任せよう。

つか、雄二も敬語使えるのか？

「今日は学園長にお話があつて来ました」

一応使えるみたいだな。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関するのなら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

こんな横柄なババアに礼儀を説かれるとはな。

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二。それでこつちが――」

雄二が明久を示し、紹介する。

「――二年生を代表するバカです」

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井かね」

「ちよつと待つて学園長！ 僕はまだ名前を言つてませんよね!？」

二年生を代表するバカで伝わるんだな。

「気が変わったよ。話を聞いてやるうじゃないか」

まるで映画の悪役のように口の端を吊り上げるババア。つか、俺いなくてもよかつたんじゃないか？

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話な、ウスノロ」

今のが俺に対しての言葉だったら殴りかかっているとこだ。

「わかりました」

にしても、こんなに口汚く罵倒されてんに、雄二の態度や言動が落ち着いたままだなんてな。コイツがここまで大人だったとは。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

だめだ。言動が綻び始めた。

「学園長のように戦後時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

これ、雄二もかなりキレてるな。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というわけです」

いつもの雄二だな。

そんな慇懃無礼な雄二の説明を受け、ババアは思案顔になって黙り込んだ。

もう俺も喋って大丈夫だよな。雄二もいろいろ言ってるし。

「おい、ババア」

俺が声をかけても反応がない。まさか、雄二の態度に腹を立てたのか？ ま、普通は立てると思うがな。

「ふむ、丁度いいタイミングさね」

ん？ 何が丁度いいんだ？

「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」

「それじゃ、直してくれるんだな？」

雄二の言った通りだな。さすがに生徒の健康に害を及ぼすと言われて動かない教育機関はないよな。

「却下だね」

「明久は生コン。雄二はバケツを頼む。大きめの」

「オーケー。すぐ持つてくるよ」

「……大地、明久。少し落ち着け」

第60話

しまった。つい本音が。

「まったく、このバカどもが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

「さつさと教えるババア」

「……お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」
ババアが呆れ顔で俺たちを見る。何かおかしなことだったか？

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」

「それは困ります！ そうなると、僕らはともかく体の弱い子が倒れて」

「ーと、いつもなら言っているんだけどね」

明久の台詞を遮り、ババアが顎に手を当てて続きを話し始める。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼み聞くなら、相談に乗ってやるうじゃないか」

交換条件ってことか。俺が前に北斗の再振り分け試験を頼んだ時も、交換条件を出されたっけな。ババアは利益があることなら聞いてくれるってことか。

「んで、頼みってのは？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「まあな」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「優勝賞品って、賞状とトロフィー。それに「白金の腕輪」と、副賞に「如月ハイランド プレオーブンプレミアムペアチケット」、
だろ？」

それと交換条件に何の関係があるんだか。

「そうさね。それじゃ、ここからが本題だ」

ババアが間を開け、再び話出す。

「その副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「回収？ それなら、賞品に出さなければいいじゃないですか」

「そうできるならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないだよ」

「んなもん、アンタが契約する前に気づけばよかつたんじゃないかな？」

一応学園長なんだし。

「アタシは白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

ババアが眉をしかめる。ババアなりに、責任は感じてるみたいだな。

「んで、悪い噂ってのはなんだ？」

つまらない内容なんだけどね。と前置きして、ババアが口を開く。「如月グループは、如月ハイランドに一つのジnkスを作ろうとしているのさ。」「ここを訪れたカップルは幸せになれる」っていうジnkスをね」

「？ それのどこが悪い噂なんです？ 良い話じゃないですか」
明久の言う通り、そんなに悪い話とは思えない。

「そうでもないのさ。如月グループはそのジnkスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと！？」

さっきまで黙っていた雄二が突然大きな声を出す。

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まっているだろう！ 今ババアが言ったことは「プレオープンプレミアムチケットを使ってやってきたカップルを如月グ

ループの力で強引に結婚させる」ってことだぞ!？」

「う、うん。言い直さなくてもわかってるけど」

雄二がこんなにくるたえている姿は見たことがないな。

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

「くそつ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな。学生から結婚までのジंकクスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことが」

悔しげに下唇を噛む雄二。さっきから雄二の様子がおかしいな。

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

やけに雄二について詳しいな。俺のことも知っていたし、さっきも明久の名前がすんなり出てきたし。ババアも一応学園長として仕事をしてるってことなのか？

「雄二。とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことでもないし、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

俺と明久はそれで済む話だが、雄二は違う。アイツには霧島という彼女？がいる。

大方霧島に無理やり連れていかれることを恐れたんだろうな。

バカテスト 2 問目

問6 (清涼祭アンケート)

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい

「あなたが今欲しいものはなんですか？」

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本 取り消し 成人向けの写真集』

教師のコメント

取り消しする必要があるのでしょうか。

神長大地の答え

『北斗に捨てられた工口本 取り消し 北斗との楽しい時間?』

教師のコメント

なぜ訂正前と訂正後で字の書き方が違うのでしょうか？

吉井明久の答え

『カロリーー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

問7（英語）

次の英文を訳せ

『She became sentimental feelings』

神長大地の答え

『彼女は感傷的な気持ちになった』

教師のコメント

正解です。特にコメントはありません。

内藤 光の答え

『彼女は感傷的な気持ちになった』

教師のコメント

そういえば内藤君はAクラスでしたね。

吉井明久の答え

『彼女はセンチメンタルな気持ちになった』

教師のコメント

その気持ちは物差しで測れるのですか？

土屋康太の答え

『彼女は物差しで測られた』

教師のコメント
身長をですか？

一条北斗の答え

『いいえ。彼女の気持ちです』

教師のコメント

無いとは思いますが、カンニングの疑いが出てきたので、後で吉井君と土屋君と一緒に職員室に来てください。

問8（英語）

次の英文を訳しなさい

『This is the thing which the grandmother bought for me.』

姫路瑞希の答え

『これは、祖母が私の為に買ってくれた物です』

教師のコメント

正解です。流石姫路さんですね。このぐらいの英文じゃ間違えませんよね。

神長大地の答え

『……………』

教師のコメント

おや？どうしたのですか神長君。君がこの英文を訳せないなんて

一条北斗の答え

『大地のおばあちゃん、死んじゃってるんだけど、大地はこの問題見て大丈夫かな?』

教師のコメント

神長君に謝ってきます。

問9（地理）

以下の問いに答えなさい

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

その通りです。

神長大地の答え

『知らね』

教師のコメント

お願いですから機嫌を直してください。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

先生に君達のバカな解答に付き合っている暇はありません。

問10 (現代社会)

以下の問いに答えなさい。

『PKOとは何か、説明しなさい』

神長大地の答え

『P E A C E - K e e p i n g - O p e r a t i o n s (平和維持活動)の略。』

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動の1つ

『P S、ケーキあんがとさん』

教師のコメント

正解ですが、P Sの部分は秘密にしておいてください。

土屋康太の答え

『……………(プイッ)』

吉井明久の答え

『知りません』

教師のコメント

君達はどうでも良いです。

ちよつとした休息。

「ねえ、大地」

「ん、なんだ？」

「なんであんな中途半端なところで終わってるのにこんな話が入ってきたの？」

「ああ、それはな、作者が「バカとテストと召喚獣」の二巻を無くしたからだ」

「ええ！それ大丈夫なの！？」

「作者は、「どこかにあるはず！」といって家中を探してるから、早かったら明日、遅かったら明後日。最悪もう一回買ってくる。だそうだ」

「でも、それなら今回の話書かないで探すことに集中してれば良かったのにね」

「探すの飽きて、やることなかったから書いたんだろ」

「作者って適当だね」

「まあな。作者はこんな小説を書いてる暇人だもんな」

「うんうん。しかも私たちより年下なんてね。しかも今年で受験生なのに勉強もしないで遊んでばかり。本当、作者は適当だね」

「まったくだ。どうせ小説も適当に置いて親にどっかにやられたとかだろうな」

「あ、それありそうだね」

「悪かったな適当で」

「……………！」

「とりあえず、なんとなく入ってみたぜ！」

「ねえ大地、これが作者？」

「みたいだな」

「そう。じゃあ……………」

「いやあ、まいったまいった。まさか本がなくなっ痛い痛い！」

「……………」
「ちよつ……………！無言で全力で関節技は腕がもげるように痛あああああああ！」

「……………」
「ちよつと！見て取れないで助け本当にもげるううううう！」

「ま、天罰だな」

「ちよつ！本当にヤバいつて！これじゃ腕が使いものにならなくなつていつ書けるかわから足にかけられるなバカ大地iiiiiiii！」

「フンツ！」

「痛つてえええええ！」

しばらくお待ちください。

「あゝ本当酷い目にあつた〜」

「アンタに責任があるんだからしゃーない」

「そうだよ。なんで小説を無くすのかな」

「いやあ、面目ない」

「アンタが書かないと、俺たちの時間が止まつたままになるんだからな」

「そうだよ。私なんて、大地と会えない日が何日も続いてるんだから、早く書いてよね！」

「……………はい」

「と、今日本編をUPできなかった元凶は俺たちが罰を与えたんで、今回はお許しください」

「それでは、また近いうちにUPされると思うのでお楽しみに〜」

「え〜〜」

「お前（作者さん）は黙ってる（て）！！」

「……………すみません」

「それでは、また今度〜」

「またね〜」

ちょっととした休息。(後書き)

とまあ、そういう訳で本編はいつ書けるか分かりません。記憶してればよかったです。まったく覚えていませんw
近いうちに必ずUPするので、よろしくお願いします。

第61話(前書き)

結局買うハメになってしまいました^^;
600百円の出費が微妙に痛い！

第61話

「……絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる……。行けば結婚、行かなくても「約束を破ったから」と結婚……。俺の、将来は……！」

ダメだ。壊れてる。

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

絶対可愛いなんて思っていないな。

「つまり交換条件ってのはー」

「そうさね。「召喚大会の賞品」と交換。それができるなら、教室の改修くらいしてやるうじやないか」

召喚大会の賞品と交換か。俺と雄二なら、なんとかなるかもな。

「無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。私はお前達に召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

「はっ。俺達がそんなセコい真似するかっての。なあ、明久」

「……………」

なぜか黙り込む明久。コイツ本当に強奪とかやるつもりだったのか？

「なあ、明ひー」

「大地と雄二が優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

後でしばき倒す。つか、コイツさり気なく俺と雄二にめんどくさいこと押し付けやがったな。

まあ、優勝するには俺と雄二が出るのがー

「何を人任せにしているんだい吉井。召喚大会に出るペアは神長と坂本じゃない。アンタと坂本のペアだよ」

「はあ……………？」

このババア、俺と雄二のペアじゃなくて、明久と雄二のペアで優勝しろっていうのか？

「おいババア。一体何を考えてやがる。何故俺と雄二ではなく、明久と雄二なんだ？」

「そうですね。なんで大地じゃなくて僕なんですか？」

チケットの回収が目的なら、明久よりも点数が高い俺を――

点数が、高い？

なんでババアは、Aクラスの優秀なやつらじゃなく、俺たちこの話を持ち込んだんだ？優勝してチケットを回収するだけなら、成績の良いAクラスを使えばいいだけなのに、わざわざ成績最低のFクラスの俺たちにこの話を持ち込んだんだ？Aクラスの整頓が断つたからか？いや、ババアと言えども一応学園長だ。Aクラスのやつらが学園長たつての願いを断るとは思えない。じゃあ、他の生徒にもこの話を持ち込んでいる？いや、それもないか。それだったら俺と雄二のペアで出るように言っているだろう。

だめだ。ババアの考えが全く読めない。これじゃあまるで、チケットの回収は目的ではないような……………

だが、他に何がある。他にあるものといったら、白金の腕輪ぐらいじゃー

白金の腕輪。その単語で一つの考えが浮かび上がる。

いや、だがまさか。だが、他には考えられない。

俺の考えが正しいなら、ババアが優勝賞品を回収したいが、成績の良い者は使わない理由にも納得できる。いや、使えない、が正しいか。

ババアの目的はチケットではなく白金の腕輪。これはもう確実に言っていていだろう。そして、白金の腕輪を回収したい理由、それは、科学者としては一生の恥となるかもしれないもの。

そう。欠陥だ。

白金の腕輪の欠陥はおそらく、点数が高すぎると暴走する。そのようはものだろう。これなら優勝賞品は回収したいが、成績が優秀

なものは使えない、ということそに納得がいく。だからババアは、点数が低い、優勝の可能性がある明久、雄二にこの話を持ち込んだ、ってところか。

これでババアの考えが全てー

「ーち、おい大地」

つと、考え事に熱中しすぎてた。

「すまんすまん。ちよつと考え事をしててな」

ん、そついやいつの間にか雄二が復活してるな。

「ちよつとつて時間ではなかったがな」

それはお互い様だ。

「んで、話合いは終わったのか？」

「ああ。もう終わった」

俺、本当にかんりの間考え込んでたのか。

「ほら。神長も起きたんだからさつさと帰りなクソガキ共」

「そつだな、んじゃあ帰るとすつか」

「そつだね。帰ろうか」

「俺は別に寝ていたワケじゃないがな」

あ、そつだ。一応確認しておこう。

「なあ、ババア」

「なんだいクソガキ」

二人には聞こえないように、小さな声で次の言葉を呟く。

「科学者つて、大変だよな」

一応ババアも頭の切れる人間だ。これだけ言えば、俺がなにをも言いたいのかわかるだろう。

「アンタ、まさか……………」

予想通りの反応だ。これで、俺の考えが間違っていないことを確認できた。

「なにやっつてんだ、帰るぞ大地」

「へいへい」

そつ言つて俺は扉を開けてまっていた明久と雄二のもとに歩きだ

す。

「それじゃ、帰るぞババア」

そう言っつて、俺は扉を閉めた。

「……………まったく、底の知れないガキだね」

第62話

「ムツツリーニ。飲茶は大丈夫か？」

「……………完璧」

清涼祭当日の朝、俺たち厨房班は、厨房で最終確認を行っていた。

「おし。皆！今日は気合い入れていくぞ！」

「……………おう！」

厨房班は大丈夫だが、ホール班の方は大丈夫だろうか？ 一応確認にいくか。

「ムツツリーニ俺は一度ホールに行ってくるぞ」

近くに居たムツツリーニに、留守にすることを伝える。後でばっくれた。とか言われたら面倒だからなあ。

「……………待て。俺も行く」

「うん？ ムツツリーニも行くのか？」

「……………これを食べて貰う」

そういつて胡麻団子の載っている木のお盆を見せる。

「なるほど。味見して貰って出来栄を確かめようってワケか」

「……………（コクコク）」

「俺は一つしか作ってないが、これも持ってってもらっていいか？」

「……………載せて」

差し出されたお盆に、俺は胡麻団子を載せる。

「んじゃ、行くか」

「……………（コクコク）」

俺たちは胡麻団子を持ち、厨房を後にした。

「明久ー」

「ん、何大地？」

「……………胡麻団子」

「おわっ」

あり？後ろにいたはずのムッツリーニがいつのまにか明久の後ろに。

「それで、どうしたの？」

「だから、胡麻団子を持ってきたんだ」

「え？食べていいの？」

「……………（コクコク）」

そう言っ明久たちの前に胡麻団子を差し出すムッツリーニ。

「わぁ…………。美味しそう…………」

「これ大地たちが作ったの？」

「ああ。もちろん」

「これ、ウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路、島田、秀吉の三人が、胡麻団子を頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！ 表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

自分たちが作ったものを美味しいって言って食べて貰えると、嬉しいな。

「それじゃ、私も一つ」

「ああ。食ってくれ」

今度は北斗が胡麻団子一口だけ頬張る。

「あ…………」

「ん？どうした北斗？」

北斗の動きが止まる。もしかして、不味かったのか？

「私、あんこはだめだったー」

バタン。

倒れる程に苦手なのか!?

「あーちよっと北斗を寝かせてくる」

「……うん。そうしてあげて」

やれやれ。まさかあんこ食べただけで気絶するとはな。

適当な所に北斗を寝かせ、皆のところに戻る。

「あ、早かったね大地」

「まあ、な。そーいや、明久は胡麻団子を食べなくていいのか?」

「あ、僕も食べていいんだ」

「ああ。まだ一つ残ってるしな」

「それじゃあ、貰おうかな」

「……………(コクコク)」

ムツツリーニが残った一つを明久に差し出す。

明久が軽く一口だけ胡麻団子を頬張る。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、

辛すぎる味わいがとつてもーんゴパッ」

明久の口からありえない音がでる。あの胡麻団子、まさか……………

…

第63話

「あ、それはさつき姫路が作ったものじゃな」
「やっぱり姫路の作ったものか。」

「……………！！（ゲイゲイ）」

「む、ムツツリーニ！ どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？ 無理だよ！ 食べられないよ！」
「お前な。世界には食べ物を食べたくても食べられない人だっているんだぞ」

「それ今言うことじゃないよね！ それにそれは僕のことだよ！」

「お前の場合は自業自得だ」

「こうなりゃ力づくで食わせてやる。」

「ムツツリーニ！ 俺は明久を抑えるからお前は胡麻団子を明久に食わせる！」

「……………（コクコク）」

明久を羽交い絞めにして、身動きが取れないようにする。

「離して大地！ これを食べたら本当に死んじゃうよ！」

「お前が食べたんだから、責任もって食べる」

「……………（コクコク）」

「iiiiiiiiiiやあああああ！！！」

ムツツリーニが胡麻団子と言うなのバイオ兵器が後少しで明久の口に入るといふ時、

「うーっす。戻ってきたぞー」

雄二が帰ってきた。だが、今は挨拶をする暇はない！ 早くこのバイオ兵器を処分しなくては……………！！

「ん、美味そうな胡麻団子だな。明久に食べさせるぐらいなら俺が食ってやるっ」

そういつてムツツリーニから胡麻団子を取り上げ、躊躇いなく口に運ぶ。

「……たいした男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いてるよ」

「お前のことは忘れない……」

「？ お前らが何を言ってるかわからんが……。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつてもーんゴパっ」

明久と同じようにありえない声を出して床に突っ伏す雄二。これ、大丈夫か？

「あー、雄二。とつても美味しかったよね？」

「ふっ。何の問題も無い」

床に突っ伏したまま、雄二が返事をする。一応意識はあるようだな。

「あの川を渡ればいいんだろう？」

それはきつと三途の川だ。

「雄二！その川は止める！帰れなくなるから！」

一口で雄二に致命傷を負わせるなんて。姫路の手料理、相変わらず恐ろしいキレ味だ。

「え？ あれ？ 坂本君はどうかしたんですか？」

ムツツリー二の作った胡麻団子で夢見心地になっていた姫路が、こちらの様子に気づく。さっきまでのやり取りは見られていないようだ。

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫？」

どうやら島田までトリップしていたようだ。これなら普通の胡麻団子はかなりイケてるだろうな。

（おい、明久。雄二の蘇生をすろぞ）

（わかってる。今やるから）

姫路達に聞こえないように、小声でのやり取り。

「大丈夫だよ、ちよつと足がつつただけみただから。おーい、ゆーじー、おきろー」

明久がおどけた口調で雄二を起こす仕草をする。ただし、手は必

死に心臓マッサージをしながら。

「六万だと？ バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まってーはっ！？」

よしっ、蘇生成功。こうして、人知れず尊い命がまた一つ救われた。

「雄二、足がつったんだよね？」

明久が雄二が何か余計なことを言い出す前に畳み掛ける。

「足がつった？ バカを言うな！ あれは明らかにあの団子のー」

「……もう一つ食わせるぞ」

「足がつったんだ。運動不足だからな」

第64話

流石雄二。賢明な判断だ。

(……明久、いつかキサマを殺す)

(上等だ。殺られる前に殺ってやる)

本当にこの二人は仲が良いな。

「ふーん。坂本ってよく足がつるのね」

マズい。前に雄二が倒れた時も、こんな言い訳だったためか、島田が怪しんでいる。

(明久、頼んだぞ)

(任せて、大地)

小声で明久になんとかごまかすよう指示を出す。

「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？ そういう身体って、筋がつりやすいんだよ。美波も胸がよくつるからわかるとくべあつ！」

「……俺が手を下すまでもなかったな」

流石明久だ。自分が酷い目にあう選択肢を選ぶのが上手いな。

「ところで、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

秀吉が話題を逸らしてくれる。さすが秀吉。わかってるな。

「ああ、ちよっと話合いにな」

珍しく歯切れの悪い返事をする雄二。

まあ、ババアのとこにでも行つてたんだろうな。

「そうですか。それはお疲れ様でした」

「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでも行けるな？」

「バッチリじゃ」

「お茶と飲茶も大丈夫だ」

ムツツリー二のは皆上手いって言うていたが、俺の胡麻団子はどつだかわからないがな。

「よし。少しの間、喫茶店は大地と秀吉に任せる。俺は明久と召喚

大会の一回戦を済ませてくるからな」

そう言っただけ俺と秀吉の肩を叩く雄二。

「あれ？ アンタ達も召喚大会に出るの？」

「え？ あ、うん。色々あってね」

ババアに「チケットの裏事情については誰にも話すな」と言われているためか、適当に言葉を濁す明久。まあ、ババアの目的はチケットの方じゃないけどな。

「もしかして、賞品が目当てとか……？」

「うん。一応そういうことになるかな」

あ、なんかややこしいことになる予感が。

「誰と行くつもり？」

「ほえ？」

予想的中。島田かが戦闘モードになった。

「吉井君。私も知りたいです。誰と行くこうと思っただんですか？」

最近、姫路もおかしくなってきたよな。

「だ、誰と行くって言われても……」

さて、ここは助け船を入れてやろう。

「明久は雄二と行くつもりなんだ」

「え？ 坂本とペアチケットで「幸せになりに行くの……？」」

あ、やばい。明久が暴れ出しそうだ。

(明久、これぐらい我慢しろ)

(そっだぞ明久。事情を知られたら、ババアに約束を反故にされるぞ)

雄二もハメたように見えたが、なぜコイツは冷静でいられるのか。

それは――

「俺は何度も断っているんだがな」

最初から打ち合わせしておいたからな。姫路と島田の言うことは大体見当がつくからな。

「アキ。アンタやっぱり、木下よりも坂本の方が……」

「ちよっと待って！ その「やっぱり」って言葉は凄く引っかかる

！ それと秀吉！ 少しでも寂しそうな表情をしないでよ！」
「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持った方が……」
「それができれば明久だって苦労はしてないさ」
「雄二、もつともらしくそんなことを言わないで！ 全然フオローになってないから！」
「ゴミをフオローする意味はないだろう？」
「友達をゴミ扱いするな！ バカ大地！」
「なあ、ムツツリー二。お前明久と友達だったか？」
「（フルフル）…………… 赤の他人」
「ムツツリー二まで僕を見捨てるの！？」
「…………… 俺に変態の友達はいない」
「ムツツリー二の言う通りだ。変態の友達なんて作りたくない。」
「ムツツリー二！ 僕は変態じゃなくてー」
「同性愛者だろ？」
「なんてことを言うのさ大地！ 僕は同性愛者じゃないから！」
「おい。早くしないと不戦敗になるから行くぞ」
「…………… くっ！ と、とにかく、色々と誤解だからね！」
「もう今さら遅いだろっけどな。」
「さて。んじゃ、がんばるとしますかあ！」
「そうじゃな。わしらは喫茶店に集中するとするかの」
「…………… （コクコク）」
「ウチらも途中で抜けるけど、それまでは手伝うわよ、瑞希」
「はいっ。がんばりますっ」
「皆やる気は充分だな。」
「うっし！ 皆！ 今日一日がんばるぞ！」
「…………… おおおおおお！……………」

第65話

「神長、胡麻団子二つとウーロン茶一つ追加ー」

「あいよ。ああ、その胡麻団子、三番テーブルのお客にもっててくれ」

「わかった」

喫茶店が始まり間も頃は、それほど忙しいわけでもなかったが、徐々に客足も増え始め、少し余裕がなくなってきたな。

「神長。肉まん三つ追加だ」

「須川、頼んだ」

「あいよー」

俺は胡麻団子を作るので手一杯だったので、肉まんは須川に押し付ける。

「神長、営業妨害だー」

「あい……………は？」

なんか、嫌な言葉が混ざっていた気がするんだが。

「だから、営業妨害だ。なんとかしてくれ」

「ほお。営業妨害か。予想外だな」

たかが学園祭の出し物の喫茶店で営業妨害とは、まったくもって予想外だ。

「つて、冷静に考えてる場合じゃないな。相手は誰なんだ？」

「ウチの三年二人だな」

「三年生か。これまたやつかいだな。」

「雄二はまだ帰ってこないのか？」

こういうことは、俺じゃなくて雄二が対処したほうが良いに決まってるからな。

「坂本は今木下が呼びにいったぞ」

「そうか。なら、一応ホールに行くとするか」

俺はホールに向かうため、厨房を後にした。

「おいおい！ 本当にこんな机で食べ物扱っていいと思ってるのかよ！」

「責任者はいねえのか？ ああ！」

営業妨害をしている二人は、どちらも男。体格は二人とも一般的なものだが、髪型は、片方が小さなモヒカン、もう片方が丸坊主と、なんとも覚えやすい二人だった。

「面倒だが、雄二がくるまで相手してやるかあ」

「すまん。頼んだぞ」

「なにかお気に召さないことでもありましたでしょうか？」

営業妨害をしている二人に近づき、丁寧な口調でそう告げる。

「どもこつもねえ！ このテーブルはなんだ！」

そういつてモヒカン頭の方がクロスを剥がし、みかん箱を指差す。

「こんな机で食べ物扱っていいのかよ！」

今にも掴みかからん勢いでモヒカン頭の方が文句を言う。

「お前が責任者なんだろ？なんか言ったらどうなんだ？」

坊主頭の先輩が高圧的な態度で俺にそう告げる。

「すいません。俺は責任者ではないので」

そろそろ丁寧語も疲れたなあ。

「ああ？ こつちは責任者出せつつてんだよ！」

モヒカン頭の先輩がそう言うのと同時に、俺の目に責任者である雄二がこちらに向かってくるのが見えた。ナイスタイミングだ。

「すいません、たつたいま責任者が到着いたしましたので」

「ああ？ どこにいるってゴペツ！」

登場と同時に坊主頭の先輩を殴る。さすが雄二だ。

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか？」
しかも殴ったことをまったく気にせず話を進める。さすがだ。

「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが……」

ま、当然の反応だな。俺だって友達がいきなり殴り飛ばされたら驚く。

「それは私のモットーの「パンチから始まる交渉術」に対する冒瀆ですか？」

それは交渉とは言わないと思う。

「ふ、ふざけんなよこの野郎……！ なにが交渉術ふぎゃあっ！」

「そして「キックでつなく交渉術」です。最後には「プロレス技で締める交渉術」が待っていますので」

「わ、わかった！ こちらは夏川を交渉に出そう！ 俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちよ、ちよつと待てや常村！ お前、俺を売ろうと言っのか！？」

慌てているのは常村と呼ばれた先輩に売られた夏川とよばれた坊主頭の先輩だ。

第6話

「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」

常夏コンビとは巧い命名だな。

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらう」

ま、賢明な判断と言えるだろう。だが、ウチの代表はそこまで優しくはないからなあ。

「そうか。それならー」

大きく頷いた後、夏川先輩の腰を抱え込む雄二。

「おいっ！ 俺もう何もしてないよな！？ どうしてそんな大技を
げぶるあっ！」

「ーこれにて交渉は終了だ」

バックドロップを決めて平然と立ち上がる雄二。この交渉術、俺も使ってみようかな。

「お、覚えてるよっ！」

典型的なザコキャラの捨て台詞をいいながら、倒れていた夏川先輩を抱え込み、常村先輩が走り去る。これで、問題は片付いた。

「流石にこれじゃ、食っていく気はしないな」

「折角美味しそうだったんだけどね」

「食ったら腹壊しそうだからなあ」

「ーというわけにはいかないか。」

クロスの中を目の当たりにし、ガタリ、と音を立てて一人目が席を立つ。あれって、教頭の竹中先生だよな。あの先生がウチに来ていたとはな。

「店、変えるか」

「そうしようか」

「あ、お客さん！」

まずいな。このままだと悪評が学校中にひろまっちゃう。

（おい雄二。なんか手はないのか？）

(安心しろ。もう手は打ってある。お前はひとまず、廊下に出ていろ。ここにいられると、いろいろと邪魔だ)

邪魔、という言葉はきにいらなかったが、文句を言う暇もないので、指示通り廊下に出る。すると、そこには明久がいた。って、当然か。雄二と一緒に召喚大会にいったんだもんな。

「よっ、明久。お疲れさん」

「あ、大地」

「雄二が手は打ってあるって言うたが、お前なにか聞いてるか？」

「うっん何も聞いてないよ。とりあえず、今は雄二に任せよう」

「ま、そうだな」

雄二の方に向き直ると、雄二がお客さんたちにむけ、言葉を発していた。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの調達が遅れていたの
で、暫定的にこのような物を使つてしまいました。ですが、たった
今本物のテーブルが届きましたのでご安心ください」

そう言い終えると同時にお客さんたちに深々と頭を下げる雄二。

その後ろに、秀吉と男子数名が立派なテーブルを運んでいるのが見えた。なるほど。これで衛星面を改善した姿を見せられるな。

「あれ？ テーブルを入れ替えてるの？」

そんな時、後ろから声をかけられる。

「あ、おかえり。美波に姫路さん。一回戦はどうだった？」

「はいっ。なんとか勝てました」

姫路がこちらにVサインを見せる。まあ、この二人なら一回戦くらい楽勝だよな。

「そんなことより、テーブルを入れ替えちゃってもいいの？ 演劇部にあるテーブルなんて、そこまで多くはないはずでしょう？」

島田の指摘ももつともだ。数があるのなら、最初から使っていたらううしな。演劇部にある机なんて、精々2、3個だろうな。

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせていただきますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、

「ゆっくりとおくつろぎください」

そう締め、雄二が俺らのいる廊下にやってくる。

「ふう。こんなところか」

小さく息を吐く雄二。きつと慣れない丁寧語で疲れたんだな。

「お疲れ、雄二」

「おつかれさん」

「何があつたのかわからないけど、お疲れ様」

「お疲れ様です」

「おう。姫路に島田か。その様子だと勝つたみたいだな」

「一応ね。それより、喫茶店は大丈夫なの？」

さっきの騒動のせいでお客は減つたし、悪評も流れるだろう。

「このまま何も妨害がなければ問題ないな」

何かひっかかる言い方だな。また妨害があることを予想しているような言い方だ。

「あの、持つてくるテーブルは足りるんですか？」

「ああ、それか。そうだな……。明久、二回戦まであとのくらい時間がある？」

「んー小一時間つてところかな」

「そうか。あまり時間がないな……。ちやつちやと行くか。明久、ついて来い」

そういつて明久に向かつてクイクイ、と指を動かす雄二。

「雄二、俺は手伝わなくていいのか？」

多分今から雄二がやるうとしてるのはテーブル調達だろう。それなら、少しでも人が多いほうがいいはずだ。

「ああ。お前は喫茶店の手伝いを頼む。姫路と島田も、ウエイトレスをやっけていてくれ。落ちた評判を取り戻す為に、笑顔で愛想よくな」

「ま、雄二が喫茶店を手伝えつてなら、それに反論はしねえよ。けど、本当に大丈夫なのか？」

念の為、もう一度雄二に聞く。

「ああ。大丈夫だ」

「なら、俺は厨房に戻るか」

「おう。頑張ってくれ」

雄二の台詞を背に、俺は厨房に向かった。

第67話

「神長、そろそろ休憩していいぞ」

ホール担当の福村が俺にそう告げる。

常夏コンビのせいで店内はあまり忙しいってわけでもないし、休憩して問題ないな。

「なら、そうさせて貰う」

「おう。そうだ、休憩中にいろいろまわっとけけよ。次はいつ休憩できるかわからないからな」

そう言っつて福村は厨房を出ていった。

「せっかくだし、色々見て回るか」

つつても、一人で回るのもあれだし、北斗でもー

「……………あ」

北斗のこと、すっかり忘れてた。

「おーい。北斗、起きろー」

「…………返事がない。ただの屍のようだ」 北斗裏声

屍つてことは、窓から投げ捨ててもいいよな。

「ちょ！ なんで窓を開けるの！？ ここ三階だからここから落ちたら流石に死んじゃうよ！？」

だったら屍だなんて言うな。

「まったく。大地は冗談通じないんだから」

「そう思ってるなら最初から冗談なんてつくんじゃねえよ」

「だって、目が覚めたらこんなところに寝かされてて、少しすれば大地が起こしにきてくれるかと思ってたら、一時間も待たされたん

だもん」

コイツ、結構前に起きてたんだなあ。ちょっと悪いことしちゃったな。

「すまん、忙しくて起こしにいけなかったんだ」

本当は忘れてただけだが。

「あ、そうなんだ。ならならいいよ」

北斗があまり人を疑わないようなやつで良かった。

って、北斗を起こしにきた目的を忘れるとこだった。

「なあ北斗。学園祭、一緒に回らないか？」

「え？ 私とまわりたいの？」

「嫌なら別にいいんだが」

「ううん！ 嫌なわけないじゃん！一緒にまわろうよ！」

嫌っていわれたら体育座りで泣いていただろう。

「うし。なら一緒にまわるか」

「うん！」

俺と北斗は学園祭の出し物を見てまわるために、教室を後にした。

「ねえ、どこからまわるの？」

「ん、そうだなあ……」

そういや、どこをまわるか決めてなかったな。

「どうせなら、あまり行かない四階を見てまわろうよ」

四階か。北斗の言う通り、あまり行くこともないし、見学も兼ねて四階に行くとするか。

「よし、なら急いで行こうか」

北斗の手を引き、急ぎ足で四階に向かう。

「ちょっと。なんでそんなに急ぐの？」

なぜ急ぐかって？ それはなー

「標的発見。直ちに排除しろ」

「「サー イエッサー！！」」

「後ろから殺気が伝わってくるからだ」

「……あれ、ウチのクラスの男子だよね？」

「そつだ」

覆面を被っていて、顔は見れないが、あれはウチのクラスのFF
F団だ。

「ウチのクラスは女子とお近づきになろうものなら容赦なく殺しに
かかるからなーあ！」

俺目掛けて投げられたカッターを間一髪で避ける。

この人混みの中を的確に俺目掛けてカッターを投げるだど!?

アイツら、本当にやばいぞ！

「今日は血の雨を降らすわけにもいかないし、とにかく逃げるぞ！」

「そつだね。早く逃げたほうがいいよね」

俺は北斗の手を引いたまま、ちよくちよく俺目掛けて投げられる

文房具をよけながら、奴らをまくために四階に向かった。

第68話

「なんとかまけたみたいだな」

「私、もう、疲れた……」

「確かに疲れたな。どっかで休憩するか」

「クラスの連中も、もう追ってこないだろうし。」

「あ、それならここにしようよ」

そう言っつて北斗が指差したのは、三・Bの前にある「喫茶 Wagnaria」と書かれた看板だ。

「……Wagnariaっつて……」

色々と問題があると思う。著作権とか。

「ん、この名前の意味分かるの？」

「WORKINGっつてアニメに出てくるファミレスの名前だ」

「え、そうなの？」

「たぶん、面白がっつて付けた名前だろう。」

「ま、まあ、普通のファミレスだろうし、入ろうよ」

本当の「Wagnaria」だったら普通の喫茶店じゃないけど。

「っつておい北斗。まだ行っつて決めてないっつて」

「いーじゃない。せっかつくだし入っつていこうよー！」

北斗が三・Bに小走で向かっつていく。

「はあ。仕方ないな……」

俺もその後につづき、三・Bに歩みよる。

「いらっしやいませー。Wagnariaへようこそ。二名様でよろしいでしょうか？」

三・Bに入ると、喫茶店の店員の先輩が声をかける。

「はい」

「わかりました、それでは、こちらにどうぞ」

そういっつて先輩が近くの空いている席に俺達を案内してくれる。

「こちらがメニューになります。お決まりになりましたら、お呼びください」

ペコリとおじぎをして、先輩がレジの方に戻る。

さて、何を頼もうか……。

メニューを開き、ある程度目を通す。

「んじゃ、俺はホットドッグとコーラにするか」

「じゃあ私はグラタンとレモンティーにしようかな」

「ん、決まったなら、注文するか。すいませーん」

近場にいたウエイトレスさんに声をかける。

「はい。なんででしょうか？」

「注文良いですか？」

「はい。かしこまりました」

そういつて伝票らしきものを取り出すウエイトレス。もう注文しているのか。

「ホットドッグとコーラとハンバーガーとレモンティーを一つずつお願いします」

北斗がそういうと、ウエイトレスが伝票に書き込む。

「はい。それでは少々お待ちください」

そう言って厨房に戻るウエイトレス。

そしてその腰にはなぜか刀が。

………突っ込まないぞ。元ネタを知ってるからって絶対突っ込まないぞ。

「ねえ大地。あの先輩達なにやってるんだろ？」

俺が自分と戦っている、北斗が厨房のほうを指さす。一体何が

……。

厨房の方に目をやると、女の先輩が男の先輩を殴っていた。

「著作権なめんなこらあつ！」

「ちよつと！ どうしたの大地！」

しまった。突っ込まないと決めてたのに。

「すいません……」

周りの人たちの視線がかなり痛い。ああ……やっちなったなあ……

「それにしても、やっぱり普通の喫茶店だね」

帯刀している人や男を殴る人がいる喫茶店は普通とは言わない。

「お待たせしました。コーラとレモンティーになります」

「あ、ありがとうございます」

帯刀している先輩が俺達の注文の品を持ってくる。

「ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい」

「それでは、ごゆっくりどうぞ」

伝票を置いて、先輩俺達の席から離れていく。

「……………ねえ大地」

「ん、どうした北斗？」

「なんで……………なんであの人帯刀してるの？」

今更気づいたのか。

「まあ、そう言うアニメなんだよ」

ただ、多分あれは模擬刀だろうけどな。学園祭で真剣なんて使う

ワケないしな。

「ま、とりあえず早めに食って色々まわろう」

「そうだね。早めに食べようか」

その後、北斗と軽く話ながら、昼食を済ませた俺たちは、他のクラスの出し物を見るために喫茶店を後にする。

ちなみに、喫茶店の代金は全部俺持ちだった……………。

第69話

「さて、次はどこにいこうか……」

「大地の好きなところでいいよ」

俺の好きな所でいいのかわらぬ。なら。

「お化け屋敷、とか」

「……（ビクッ）」

あ、やっぱり無理っぽいな。

「冗談だ」

「だ、だよな。冗談だよな……」

「ああ。だから、あそこに行こう」

そういつて、三・Aの前に置いてある看板を指差す。

俺が指差した看板には、「お化け屋敷」と書かれていた。

「……」

「痛たたたあ！ 地味に痛い！」

北斗が俺の腕をちねる。これ本当に痛いぞ！

「むう……私こういうの苦手だって言ったのに……」

「……」

「ん、どうしたの大地？」

「あ、いや……なんでもない……」

やべえ。ふてくされてる北斗も可愛い……。

「顔も赤いし、熱でもあるのかな？」

北斗が俺の額に手を当てる。

なんか、ドキドキするな……。

「かなり熱いけど、本当に大丈夫？」

「あ、ああ……」

そう……。と言って俺の額に当てていた手を引つ込める北斗。

よかった。後少して倒れるところだった……。

「あれ？ そういえば、なんの話してたんだっけ？」

えっと……。確か……。

「……お化け屋敷に行くって話だったな」

「……………うっ。本当に行くの？」

「無理にとは言わないが……」

ちよつとからかってみただけだし、別に行きたいってワケでもないし。

「……………」

「ん、北斗？」

北斗が黙り込んで何かを考えている。

「お化け屋敷って、抱きつき放題なんじゃ……………」

「何か言ったか？」

かなり小さな声だったから、上手く聞き取れなかった。

「あ、ううん。なんでもないの。それよりお化け屋敷に行こ！」

さつきまであんなに嫌がってたのに、自分から入るうつつって言うなんて。

「本当に大丈夫なのか？」

無理にいつている可能性もあるし、一応確認をする。

「大丈夫だって。怖かったら大地に抱きつくから」

「そう、か…………？」

何か、今聞いているいけない言葉が入ってた気がする。

「なあ北斗。お前今抱きつくって…………」

「ほら！ 早く行こうよ！」

無視ですか……………。

「……………まあいいか」

抱きつかれたらそれはそれで……………その……………。

「ほら大地。早く行こうよ」

北斗がお化け屋敷の入り口で手招きする。

「ああ悪い。今行く」

「二名様ですね。入場料は一人300円となっております」

「大地、お願い」

「……………俺の小遣いが。」

「はあ。しゃあないな……………」

「ありがとう大地」

「まあ、いつものことだからな」

「財布を取り出し、二人分の入場料を払う。」

「それでは、どうぞ」

「受付の人が入り口のドアを開けてくれる。」

「うし。入るか」

「う、うん……………」

「ん、なんだ？やっぱ怖いのか？」

「声も震えてるし、やっぱ帰ったほうが……………」

「ううん。大地と一緒にだから大丈夫だよ」

「……………っ！！」

「あれ？どうしたの大地？」

「な、なんでもない！行くぞ！」

「あ、まってよ大地！」

「ツカツカとお化け屋敷に入る俺の後を北斗が早足でついてくる。」

「……………危なかった。今度こそ本当に倒れるところだった。」

第70話

「雰囲気はあるが、あまりお化けが出てこないな」

「私は雰囲気だけでもうだめだよ……」

まあ、入ったばつかだし、最初の方でてくるわけないか。

「お、あそこの曲がり角、何かありそうだな」

「そ、そういうこと言わないでよ!」

「すまんすまん。冗談だ」

つつても、何かあるだろうな。あそこだけちよつと雰囲気違つし。

「ねえ大地、先に行つてよ……」

そういつて俺の背中にしがみつく北斗。先に行つてもなにも、俺がずつと前を歩いてるんだが……。

「あいあい」

曲がり角を曲がる。だが、そこには何もなかった。

「なんだ、何もないのか」

ちよつとシヨックだ。

「え、そうなの?」

恐る恐る北斗が俺の肩から前方を見る。その時、

「うばああああ!」

後ろからいきなりフランケンシュタインが出てくる。壁が動くようにでもなつてつていたのか。

「きやああああ!」

これは北斗の悲鳴。

「うぎやややああ!」

驚いた北斗に殴られたフランケンシュタイン。

「つて冷静に観察してる場合じゃねえ!」

これ、営業妨害になるんじゃないか!?

「だって、急におどかすから……」

「お化け屋敷なんだからそれが当たり前なんだ!」

幸いフランケンシュタインは気絶してるし、今のうちにここを離れよう。

「急ぐぞ北斗」

「え？ この人このままでいいの？」

「俺らじゃどうしようもないから。ほら早く行くぞ」

北斗を置いていくきはないが、「こうすればついてくるだろう。

「あ！ 待ってよ！」

うし。思った通りついてきたな。これでこの場は回避成功だ。

「おい金田一。いつまでーって！ 何があつたんだ！？」

「どうしたんだ金井？」

「金田一が倒れてるんだよ！」

「何！？ まさか、営業妨害か！」

「わからん。けど、一応先生に言ったほうがいいか」

「やばい！このままじゃ捕まる！」

「北斗！」

「ん、何？」

「すまん！」

そう言つて北斗をお姫様抱っこする。色々と危ないが、今はそんなこと気にしてる場合じゃない！ 一刻も早くここを出ないと！

「え！ そ、その！な、なんで……！！」

「すまん北斗！ 今は説明している暇はないんだ！」

「あ！ もしかしてあの人達がやったんじゃない！」

「ちい！ 見つかったか！」

「とにかく、しばらくジツとしてくれよ！」

「う、うん……」

「待っていい！」

「誰が待つかああああ！」

「なんと少しでも逃げ切つてやる！」

「ね、ねえ大地……」

北斗がちよつと顔を赤らめながら告げる。

「その、あの、はうっ」

「なぜ気絶!？」

台詞を言い終わる前に気絶する北斗。何かしたか俺？

「北斗も心配だが、今は逃げるのが先か……」

本当なら今ここで北斗の様子を見ておきたい。お化け屋敷を出て様子を見るしかない。となると、

「いたぞ!あつちだ!」

「待てっつていつてるだろ!」

「絶対に捕まるかあああああ!」

全力で出口に走るしかない!

バカテスト 三問目

問11 (特別アンケート)

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

「喫茶店を運営する場合は制服はどんなものが良いですか？」

姫路瑞希の答え

「家庭用の可愛いエプロン」

教師のコメント

「いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです」

神長大地の答え

「裸エプロン」

教師のコメント

「……………えっ？」

一条北斗の答え

「大地が書いたもの」

教師のコメント

「神長君は裸エプロンと書いていましたよ」

土屋康太の答え

「スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレスは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもを用意し裏

にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールをー」

教師のコメント

「裏目までびっしり書き込まなくても」

吉井明久の答え

「ブラジャー」

教師のコメント

「ブレザーの間違いだと信じています」

神長大地の答え

「ちよっ！ アバラは……！ え！？ そこも！？ ちよっ！ 痛い！ 止め、わっ、わかつた！ 俺が悪かつたあああ！」

教師のコメント

「……………すみません」

問12 (日本史)

以下の()に入る言葉を書きなさい。

「板垣退助らは、1874年1月に、()を左院に提出しました」

神長大地の答え

「民撰議員設立の建白書 こんな問題明久でも間違えないでしょ」

教師のコメント

「そうですね。この問題なら吉井君でも間違えないでしょう」

吉井明久の答え

「ありつたけの勇氣！」

教師のコメント

「神長君に謝りなさい」

一条北斗の答え

「ありつたけの金！」

教師のコメント

「アナタは真面目にテストを受けているのですか？」

問13 (現代国語)

「自由」についてあなたが思っていることを簡単に書きなさい」

神長大地の答え

「現代社会において、自由とは何か、と疑問を抱くことがある」

教師のコメント

「模範回答とはいえませんが、一応丸にしておきます」

土屋康太の答え

「痴漢しほうだい……！」

教師のコメント

「高校生の回答としては好ましくないので×にします」

一条北斗の答え

「自由っていったら、夜に大地の部屋に忍びこんで………キャッ
！」

教師のコメント

「こういふときはどういふ反応をしたら良いのでしょうか？」

吉井明久の答え

「僕は、何者にも縛られず、自由に生きていたい……」

教師のコメント

「ムカつときたので×にします」

問14 (化学)

以下の問いに答えなさい。

「雄と雌がつくる、異なる2種類の細胞の働きによって仲間を増やす生殖の仕方を何と言いますか？」

神長大地の答え

「有性生殖」

教師のコメント

「正解です。簡単すぎましたかね」

土屋康太の答え

「雄と雌………！ 血で解答用紙全面が真っ赤」

教師のコメント

「それだけの単語でこうなるとは思いませんでした」

内藤 光の答え

「プーー」

教師のコメント

「あなたはそう書くと思っていました」

問15 (特別問題)

肩の力を抜いて次の問いに答えなさい。

「料理の「さしすせそ」とは何か応えなさい」

神長大地の答え

「さ……さとう し……しお す……お酢 せ……しょうゆ そ……みそ」

教師のコメント

「正解です。神長君は料理も出来るようですね」

吉井明久の答え

「さ……さとう し……しお す……お酢 せ……しょうゆ そ……みそ」

教師のコメント

「正直君が正解したことに驚いています」

姫路瑞希の答え

「さっ……酢酸……!」

教師のコメント

「……えっ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1651u/>

バカと天才と召喚獣

2011年10月3日20時11分発行